
僕、女になりました

【桃月】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕、女になりました

【Nコード】

N8559D

【作者名】

【桃月】

【あらすじ】

はあく。なにやら、とんでもないことになってしまった。えーと、読者の皆さん。本当にあれな事なのですが……。僕、女の体してますが、男なんです。わけあって、女をやってます。……って信じてくれるわけないよね。はあく。これから先、どうなるんだろ。僕、男に戻るのかな？……はあく。

第1話 僕、女になりました（前書き）

やあ、初めまして！

この物語の主人公である、蛍の兄の壮士です。

いやあ、本当に大変な事になってしまいました。

我が弟……、いや、今は妹になりますが。

まさか、あんな可愛い姿になるとは……。

元の蛍も十分可愛かったんですが、あれは反則だあ……。

実の兄である僕でさえ、襲ってしまう感覚があ……！

「ああ、蛍いいイイイイツー！」

「えーと……兄さん？ もう読者の皆さんは読んでますよ……って聞いてないか。えーと、この物語はご都合主義がモットーです！ 楽しく読んでもらえたら、それで幸い……だそうです！ それでは、始まり始まり」

「け、蛍……そんなに激しくしちゃあ！！ ああッ！！」

「はあ」……………（今更だけど、なんてアホな兄なんだ、この人は…）
「…」

第1話 僕、女になりました

……なんて事だ。

冷蔵庫の中からジュースを取り、それを飲んだらこうなってしまった。

なんで、こんな事に……。

はあ。

神様、僕……何かしましたか？

こんな体になっちゃって……。

腰にまで届くほどに髪が長くなって……、胸も凄く大きく膨らんで……。

そして、男にとって、大切な部分がなくなった。

「ああ、なんでこんな事になったんだろ……」

ストンと肩を落としながら、僕は親友の……海斗の顔を見る。
海斗は目を大きく開いて、こちらを凝視していた。
それはそうだろう。

この状況で凝視してしまうのは仕方のない事だ。

はあ……。

本当に困った事になってしまった。

どうやら、僕は……。

僕は、女の子になったみたいです……。

明るい日差しに照らされて、僕は夢からゆっくりと目覚めていく。

目をこすりながら、カーテンを開いてみると、太陽の光が部屋に入

りこんだ。

ま、眩しい……。

それはもう、朝起きたばかりの人にとっては脅威的な攻撃だ。
眩しい光で完全に目が開き、僕は自分の体を見てみた。

……やっぱり、昨日の出来事は夢じゃなかったんだね……。

ああ、神様……！

本当に僕は何か悪い事をしましたか？

もし僕が何かしていたのなら、その罪はきちんと謝ります。

だから……、だから　！

どうか、男に戻してください！

言っでは悪いのだが、そこらの女性よりも膨らんでいる胸。
いつの間にこんなに伸びたのやら、腰にまで掛かったさらさらな長
い髪。

そして、……男の証がついていない。

そう……。昨日の一件で僕はどうやら“女の子”になってしまったのだ。

……これは悪い悪夢だ。

今でも、そう信じていたい。

だが、頬をつねると痛みが湧き上がる。
まぎれもなく現実の証拠だ。

「……どうしよう、本当に」

声のトーンも上がっていて、これが自分から発している声だとは到底信じたくない。

僕はうなだれるように、頭を抱え込んだ。

こうなつては、もう現実から目を剃らしたくもなる。

そもそも、昨日なんであんなジューズが家にあったのか、不思議に思う。

ジューズで性別を変えるなんて聞いた事がない。

……もはや、世界規模のニュースだ。

というか、前代未聞の出来事になるな……。

「……僕、なんであんなジュース飲んだんだろ……」

後悔というのは本当に後から、じわじわと来るものなのだと、改めて実感する。

僕は、昨日に起こった大惨事を思い返した。

本当に人生に一度しかないほどの厄日を……。

それは入学式が済んで、学校から帰宅する所から始まった。

いつものように、僕は親友である海斗と一緒に帰り道を歩いていた。

椿 つばき
海斗 かいと

僕の幼なじみであり、頼りがいのある相棒。

家が隣同士で昔から仲がよく、幼稚園から現在まで全て同じ学校と

きている。

……しかも、そのほとんどが同じクラスだ。

ここまでくると、腐れ縁のレベルを越えていると思える。

まあ、今の僕にとって海斗は体の一部みたいな物で、本当に一心同体のようなものだ。

「なあ、蛭！ 今日さ、帰りにお前の家に寄っていったいいか？」

「別にいいよ」

「やったっ！ いつも、お前にチェスのゲーム負けてばかりだから、今日こそは勝ちにいくからな」

「まあ、それなりにかかっておいで。……手加減はしてあげるからさ」

「うつせーっ！ その減らず口も今日で終わりにするからな。で、話は変わるけどさ……」

海斗と他愛のない会話をしながら、我が家へと帰っていく。

学校の話とか、勉強の事とか、恋愛についてとか……。

やはり、幼い頃からの友達だからだろうか？

本当に他愛のない話だが、海斗が相手だとその全てがおもしろく感じた。

そんな話が続く事、20分。

その20分間はあっという間に過ぎて、僕の家へと着いた。僕達はすぐに家の中へと上がりこんだ。

「ただいまー」

僕は帰ってきた事を家中に知らせたが、返事は返ってこなかった。お父さんは仕事で忙しいから、まだ帰ってきていないとして……。兄さんもまだ帰ってないのか……。

一応、説明を入れておくが僕の家族は3人で成り立っている。

お父さんに兄さん、そして僕の全員男家族だ。

お母さんは僕がまだ幼い頃に病気で他界している。

だから、僕はお父さんと兄さんに育てられてきた。

お父さんは僕が小さい頃から、仕事に追われていたので、主に兄さんが僕の面倒をみていてくれていたらしい。

僕はその時の記憶が曖昧でよく憶えていないのだが、兄さんにはちゃんと感謝している。

……お母さんがいない事は確かに寂しいけど、でも僕にはお父さんと兄さんがいるから。

だから……、大丈夫だ。

……なんだか、しみりした話になってきているので、この話はここで止めておこう。
話が脱線してきている。

この時間帯は、普段は僕よりも兄さんが早く帰ってきているのだが、今日は生徒会が長引いているのか、家にいなかった。

「喉乾いたあゝ。海斗、何かジュースでも飲む？」

「いや、俺は喉乾いてないし、遠慮しておくわ」

「おっけー」

海斗がチェスの準備をしている中、僕は冷蔵庫から何か喉が潤う飲み物がなにか探した。

……冷蔵庫を開いた手前に一本の赤いビンがあり、僕はそれを手にする。……赤色のビンの中には、美味しそうな色のジュースが入っていた。

お茶もないし、まあこれで我慢しようかな。

僕はそれを手にして、椅子に座って待っている海斗の方へと向かった。

「へえゝ、なんか珍しいな。今時、ビンって……」

海斗が僕の持っているビンを見て、言う。

……言われてみれば、確かに珍しい。

「……まあ、確かにそうだね。……ゴクッ……ゴクッ……んゝ、何だか変わった味だけど、美味しいよ、これ」

「そつか。……それじゃあ、始めようぜ。今日は絶対に勝ちにいくからな！」

「はいはい」

僕は笑い半分呆れ半分の顔で第一手を打とうとする。

そして、ポーンを動かそうと手を伸ばした瞬間、体に違和感が走った。

「……ッ！」

胸が苦しい……。

妙に全身が熱くなつていくのが自分でも分かるほど感じる。

……なんだ、こ……レツ？

「……蛍？」

僕の様子に異変を感じたのか、海斗が心配げな目でこちらを伺っている。

「おい、大丈夫か？ 顔色悪いぞ？」

「こ、ごめん……。ちょっとだけ気分が悪くなったただけだよ。……少し、顔洗ってくる」

「お、おう……」

そう言つて、海斗をその場に残したまま、僕は洗面所へと向かった。
熱い……。

本当になんだろう、この感じは……。自分でも表現できないくらい、おかしい症状が発生している。

「一体どうしたんだろ……僕」

鏡に移った僕は本当に顔色が悪そうに見えた。

蛇口をひねつて、水を出す。

出てきた冷たい水で僕は顔を洗い流した。

ドクンッ！ ドクンッ！

「ッー！」

まただ……！

体中を電気が迸っていくような感覚に再び襲われる。

凄く……熱い……ッ！ さっきの何倍も体中が熱い……ッー！

僕はとうとう立ち続ける事が維持できなくなり、思わず床に座ってしまった。

どうなつて……なんだ……？ ま、まさ……ッ……さっきの……ジュ

「……………スに……………何か……………」

全身に何かが駆け巡り、心臓が今にも飛び出しそうな勢いで鼓動する。

ドクンッ！！ ドクンッ！！

「う、うわああああー……………ッ！！！」

僕は奇妙な感覚に体を襲われていく中で、無意識に大声で叫んでいた。

その僕の叫び声を聞いて、海斗が洗面所へと向かってくる。

「お、おい！ 何だ、どうしたんだ！ 返事をしろ、啻！！！」

「ッ……………あ、うん。だ、大丈夫……………みたいだ」

奇妙な感覚がおさまっていく。

あ、あれ……………？

さっきまで、あんなに体が熱かったのに……………。

不思議に思いつつも、僕は床から起き上がって、洗面所のドアを開けた。

パンツ!!

「痛ッ!!」

「あ、ごめんっ!」

洗面所のドアを開けた際に、ドアの前にいた海斗に勢いよくぶつけてしまう。

「……だ、大丈夫か?」

頭を押さえながら、床にしりもちをついた海斗に手を伸ばした。

「あ、ああ。平気、平気! 大丈夫……え?」

海斗が驚いた顔で僕を見つめる。

なんだ、その変なものを見るような目は……。

僕の顔に何かについているのか……?

「どうしたんだ? 海斗」

僕は海斗の手を引っ張って、体を起こしてあげようと……

……ん? あれ……?
力が……入らない……。

「んん~~~~ッ!」

いつもなら、片手で引っ張っても起こせるのに……。
あれ? なんで……?

「んん~~~~ッ! う、うわっ……!」

思いつきり手を引っ張っても起こせないどころか、僕が海斗の方へと倒れこんでしまった。

ムニユッ!

……え? ムニユッ……?

異様な感覚が体中からする。

というか、ムニユッ……ってなんだ?

それに胸の辺りが妙に重く感じる。

これは一体……。

「えーと、キミは蛭……なのか?」

海斗が意味不明な事を言いだす。

なんだか、顔が赤くなっているが……。

はあ……。

こいつは親友の顔を忘れたのだろうか?

「そうだけど……。海斗、僕の顔を忘れたの？」

「え、いや……。本当に……。蛍……。なんだよな？」

……。だから、なんでそこでまた聞き返すんだ？

「はあ……。本当だよ。僕は正真正銘、伊藤蛍だ」

「……………」

依然として、疑った顔で僕を見る海斗。

……。こいつは僕をからかっているのだろうか？

そうなのか？……。いや、そうだ！

きっと、僕をからかっているんだな！

そうだ、そうに違いない！！

「なあ、えーと……。蛍……。一回、鏡見て来い」

「…………？ 別にいいけど」

洗面所にいく前に僕は海斗の思考を読んでみた。
海斗の事だ。

実は顔には何もついてなくて、僕を騙して大笑いするつもりだろう。

……。うん。きっと、そんなところだ。

はあ……。仕方ない。

ワザと引つかかったふりをして、海斗の言つとおり、自分の顔を見
てくるか。

僕は起き上がって、再び洗面所に入る。

そして、呆れながら、洗面所の鏡の前に立った。

「さあーで、どんなゴミがついているのか……な……」

……。

……。

……。

「な、なんだこりゃあああーッ！！？」

鏡に映ったのは芸能界のそこらのアイドルにも負けないくらいの美
少女だった。

な、なに……、これ……？

僕は唇をブルブルと震わせて、自分の目を疑った。

と、とりあえず、落ち着かなきゃ……。

鏡に映っている女の子は僕……なのか？

鏡に映った少女の姿をよく見てみる。

胸が大きく膨らんで、いつの間にか髪の毛も腰ぐらいまで伸びていた。

……とてもこれが僕自身とは思えない。

しかし……、どことなくだが僕の顔となる原型はあった。

「な、なんだよ……これ……。一体なんなんだ……」

どうなっているんだ。なんで、僕が女の子の姿に……。

これは、……さっき飲んだジュースのせいなのか？

「……け、蜚」

いつの間にか、海斗も洗面所に入っていた。

「か、海斗、僕……女の子になっちゃった」

「え、え、えっと！ と、とりあえず、落ち着こうな！ こ、こういう時はだな……」

海斗も僕の姿に戸惑いを隠せずに、かなりパニックっていた。

はあ、……まず海斗が落ち着こうか。

当の僕はまだ驚きはあったものの、海斗よりかは落ち着いていた。

ああ、……なんでこんな事になったんだ。

僕、本当に女の子になってしまったのか。

……お父さん達にはどう説明すればいいんだろ？
というか、これって治るのか……？

はあ、……厄日だ。

この後、「とりあえず、僕は大丈夫だから」と海斗に話して、家に帰した。

海斗は「何か手伝える事があつたら言ってくれ」って、帰る間際に言っていたけど……。

うん、まあ……こればかりはさすがに……ね。

それよりも、一番大変だったのは兄さんだ。

学校から帰ってきて、僕の顔を見たときの第一声が「一目惚れしましたああーッ！　付き合ってくださいー！　」って……。

……普通はまず、見慣れない女の子が家にいる事に怪しいと思うだろう。先にどなたか名前を聞くだろつ。
はあ……。

前に言つたが、兄さんは確かに面倒見がよくて優しい良い兄なんです。

……ある一つの事を除いては。

「うおおおーッ！！　ビバ！　美少女！！　誰だかわからないけど、とにかく好きだあああーッ！……！」

……そう。

兄さんは「ド」がつくほどのスケベで変態なのです。
最近はやまっていたので、もう大丈夫だと思っていたのに……。

はあ……。

兄さんに僕が弟の「蛭」である事を理解してもらうのに、だいたい一時間くらいかった。

兄さんは僕が「蛭」だという事に初めは戸惑ってはいたものの、すっかりと納得してくれた。

後、僕を女の子の姿に変えたジュースの事も兄さんに話したが、ジュースの事については兄さんは知らなかった。

となると……手がかりとして残っているのはお父さんだけになる。

……まさか、お父さんが？

僕はお父さんに直接聞くのと、家でじっと待っていたのだが、なかなかお父さんの帰ってくる気配はなかった。

「お父さん……何かあったのかな……」

時計は既に11時を回っていた。

いつもなら、遅くても9時までには必ず帰っているのに……。

あまりにお父さんの帰りが遅いので心配になっていた所に、兄さんがやってきて僕に話しかける。

「あれ？ 蛭、知らないのか？」

「え……?」

「父さんは今日から出張で海外に行ってるから、帰ってくるのいつだかわかんないぞ?」

「……うそ、だよな?」

「本当だよ。俺が今まで蛭に嘘を言った事なんて一度もないだろ?」

……となるとなんだ?

あれか……、えーと、つまりは……。

僕って……当分は女の子のままなの?

い、いや……もしかしたら、ジュースの効力が切れるかもしれないと、とにかく!

とりあえずは今後の様子を見て、行動しなきゃ……。

僕は自室に戻って、ベッドへと倒れこんだ。

今は色々考えても仕方ない。

……今日はもう寝よう。なんだか、考えすぎて疲れてしまった。

ああ……これが悪夢なら、夢から醒めた時に何も起きなかった事に
して欲しい。

……神様、是非お願いします。

僕を災難に振り回さないでください。

「はあ……」

ベッドの隣にある少テーブルには、若い頃のお母さんの写真が置いてあり、僕はその写真へと目を向ける。

写真に写っていたお母さんは、僕の姿にどこことなく似ていた。

いや……、この場合、僕の方が似ているのか。

「……おやすみ、お母さん」

母への就眠の言葉を済ませた後、僕は深い眠りへと落ちていった。

で、現在だ。

「はあ……」

もう、昨日と今日合わせて何回ため息が出たのだろう。

やっぱり、ジュースの効力は切れていなくて、少女の姿のままだった。

これが現実……か。

「おい！ 蛭、入るぞおーッ！」

ドアの向こうから、兄さんの呼ぶ声が聞こえてくる。
僕が「どうぞ」と言うと、兄さんはすこい勢いで扉を開けた。

「な、なに？ どうしたの？ 兄さん」

「いや、なあーに！ 女の子に変わった蛭の姿が拝みたくなっ！」

「……………」

呆れて思わず、黙ってしまった。

兄さんは僕が女の子になって、嬉しいのだろうか？

「ホント、若い頃の母さんにそっくりだなあー！」

「そ、そうかなー……………」

「いや、ホントにそっくりだ！ 美人だ！ 可愛すぎる！！ つーか、もう一生その姿でいてくれえー！」

どうやら、兄さんは僕が男に戻る事を毛頭望んでいないらしい……。そればかりか、ここにきて重度のマザコンである事が判明した。

はあー……………朝から、うっとおしい事この上ない。

「兄さん、部屋から出て行ってくれない？ 着替えるから」

「え、別に男同士なんだし、今着替えても……………」

「今の僕は女だけど？ ……下心丸見えだよ、兄さん。早く出て行

つてくれる?」

「……うーん、女の子となった蛍の体を見れないのは残念だ。……仕方ない。まあ、この先見る機会なんていつでもあるしなっ!」

そう言い残して、兄さんは僕の部屋から早々と出て行った。

……兄さん。そんな機会、この先絶対にないから。
はあ……。

これから先、前途多難な事が起きるような気がしてきた……。

「はあ、早く……男に戻りたい」

ボソツと呟いた僕の本音は、写真の中にいる母さんだけが聞いていてくれた。

第1話 僕、女になりました（後書き）

【キャラ紹介】

伊藤 蛭いとう けい

16歳。風見学園生徒1年生

この物語の主人公。

容姿端麗の完璧の少年だが、試作型の薬を飲んでしまった事が原因で女の子になってしまう。

学力、運動能力共に優秀で、学園主席で入学。

チェスや将棋、クイズ等はかなりの得意でこういったゲームに関しては天才肌の持ち主。

女の子になっても容姿端麗なものには変わりなく、むしろ更に良くなっている。スタイル抜群。

髪型はツインテール。（これは兄である壮士の趣味による）

元の姿に戻る方法を海斗と共に探す事となる。

よく様々な厄介事に巻き込まれてしまい、その度に被害者となっている。

椿 海斗つばき かいと

16歳。風見学園生徒1年生

主人公の幼馴染。

頼りになるので、主人公からは相棒として思われている。

スポーツ万能で、蛭とは家が隣同士で幼稚園〜現在まで共に同じ学校。

主人公の家族以外で主人公が女になった事を知っている数少ない一人。

主人公が女になってしまい戸惑うが、一緒に元の姿に戻す方法を探すはめになってしまいが……。

主人公が女になってしまった事により、女性として意識してしまう事は本人だけの秘密である。

第2話 脅威のランジェリー（前書き）

やっと第二話になりましたね！

みなさん、元気にしてますか？

というか、僕の事は覚えていますか？

蛍の兄の壮士です。

いやあ……、本当に蛍ときたら、お風呂には一緒に入ってくれないわ、夜一緒に寝てくれないわで、最近冷たいんですよ。

「ああ……、兄さんは今日も枕を濡らしながら、一晚を過ごすんだね」

「……勝手にほざいてください（というか、いつになったらこのコーナーから解放されるんだろ、僕）」

「グスン……グスン……け・い・ち・や・んのいじわるう……！」

「マ、……マジで気持ち悪いですよ、兄さん。読者がドン引きしています。……すみませんでした！ それでは、気を取り直して、本編へどうぞ」

第2話 脅威のランジェリー

服に着替え終わった後、僕は一階へと降りて朝ご飯の用意をする。それにしても、女の子になったからだろうか。

体のサイズが小さくなっている。

今着ているシャツがダボダボに感じるくらいだ。

「……………動きにくい」

これが今の僕のサイズにあいそうな、一番小さい服だったのだが……、やっぱり無理があるようだった。

はあ……………、どうやら女性用の服を買わなきゃいけないようだ。

今まで貯めておいたお金を本当はこんな事に使いたくないのだが、まあ仕方ない。

下着の方も買っておいた方がいいかもしれない。

とりあえず、今はお母さんの下着を使わせてもらっているけど替えが少ないので、このままだとすぐに尽きてしまう。

……………それにお母さんには本当に申し訳ないのだが、サイズが合っていないくて体がキツイ。

……………下着の事がもし兄さんに知られてしまったら……………。

背筋から寒気が走った。

あのド変態な兄さんの事だ。

きつと、とんでもない事を僕にするかもしれない。

想像するだけでも鳥肌が立ってしまったので、すぐにその想像を頭からかき消す。

「あつ……でも、どうやって下着を買えばいいんだろ……」

僕自身、体は女になっても、心は当然男のままだ。

正直、女性の下着を買いに行くのは抵抗感がある。

はあ、なんか僕も変態になってしまった気分だ……。

兄さんと同類は嫌だけど、……この際仕方ない。

このままでは、一人の獣によって僕の身が危険になるかもしれないのだから。

「おい、蛭！ 飯できたかあ？」

兄さんが二階から降りてきて、リビングに入ってきた。そして、台所へと入り込んで僕の隣に立つ。

「もう少しでできるよ」

「おお、そうか！」

「うん。……だからさ、テーブルの方で大人しく待っていてくれな
いかな？」

「え？　なんで？　別に我が弟……もとい、妹の料理を見るくらい、
いいじゃないかあゝ！」

「なら……この手は何だろうね？」

兄さんの手は僕の肩に置かれていた。
その触り方ときたら、妙に気持ち悪い……。

「スキンシップだよ、スキンシップ！　というか、胸大きくなった
なー」

「……その言葉はセクシャルハラスメントに該当すると思いますよ
？」

「えー？　男同士、兄弟なんだから、別にいいじゃないか」

……なんて矛盾しているんだ。

さっき、僕の事を妹扱いして、そこで男扱いするんですか？

……それに、そのいらやしい手つきで胸を触ろうと迫ってきている
のは一体何ですか？

近親相姦ですよ、本当に変態になりますよー？

……いや、この人は既に変態だったか。

「それ以上、セクハラ行為を続けると叫びますよ？ 兄さん」

「ええ〜！ そんなあ〜〜〜っ！」

「そんなあ〜〜〜っ……じゃないですよ。それが嫌なら、今この手に持っている包丁で兄さんの手を切り落としましょうか？」

ニコツと笑いながら、僕は兄さんの顔へ包丁を向ける。

「え、遠慮するよ……」

僕の殺気を感じ取ったのか、兄さんは汗を垂らしながら、恐る恐る引き下がった。

はあ〜……、ホントに疲れる。

兄さんの相手をするのは本当に神経を使ってしまう……。

「できましたよ、兄さん」

僕はようやく出来上がった料理をテーブルへと持っていく。

今日の朝食は、ご飯に味噌汁、それに玉子焼き。

お互いにお箸を持って、「いただきます」を言った後、料理を口に運んだ。

「おいしいいいいいいいーッ!!」

「そんな大袈裟な……」

「いや、我が妹の作ったこの玉子焼き。見事な味だ！ この塩と砂糖、それにコシヨウの配分具合が絶妙なくらいにいい味を出している!! 俺は感動した!」

本当に大袈裟な言い方だ。

ただの玉子焼きなのに。

まあ、悪い気分にはならないので、いいのだが……。

「ねえ、兄さん」

「なんだ？ 我が……愛しの嫁よ」

兄さんのその呼び方に即座に突っ込もうとしたが、我慢する。

「今日さ、も……もし暇だったらでいいんだよ？ 買い物に付き合ってくれないかな？ ……一人じゃ、心細くて」

……………。

.....。

.....。

「な、なにiiiiiiiiiiiiッ!!　そ、それは本当か!!?」

「え、あ、う……うん」

いきなりなんだ？

そんな大声で叫んで……。

明らかに近所の方々に迷惑だろう。

せつかくの休日の朝なのに……。

この人は近所迷惑という言葉を知っているのだろうか？

それに、今の止まった間隔は一体なんだったんだ？

本当に必要だったのだろうか？

……はあ。

「け、けけけ、蛭が、俺をデートに誘ってくれるなんて……。兄さん、とつてーも嬉しいぞー！」

「そ、そう？ ……あ、ありがとう」

僕は兄さんの大喜びしている顔を見て、引いてしまった。

兄さん、弟からの買い物誘いを受けただけで何でそんなに喜ぶの？

……なんだか、見ているこっちが哀れに思えて仕方ないよ。
それにデートじゃないし……。

まあ、一人でランジェリーショップに入るのはさすがに恥ずかしいし、兄さんがついてきてくれるのは多少なりとも恥ずかしさが軽減されるから、僕の方は兄さんにどう思われても構わないけど……。

「それじゃ、10時までには行く用意をしてね、兄さん」

「うん！ うん！！」

ああ、凄い笑顔だよ。この人。

どこから、こんな笑顔が出せるのだろうか。

僕にはまったくわからないよ。

本当に……謎だ。

「……あつ、そうそう。言い忘れたけど、海斗も一緒に買い物に来てもらうからね」

「……………へっ？」

あ、今顔がガツカリした。

……相変わらず、すぐ顔に出るよね。兄さんは、本当にわかりやすい表情をしている。

「そ、それじゃあ、10時までには用意しておいてね！」

僕は食べ終わった食器を台所まで持って行って、そのままリビングを後にした。

「け、蛍と二人きりじゃ……なかったのね……、とほほ……」

自室へと戻った後、僕はどの服装で出かけるのかを考えていた。

……一応、女の子らしい服で行くほうがいいかな。

とりあえず、選びに選び抜いた服を取り出して、それを鏡で自分の体に合わせてみる。

「うーん、とりあえずこれでいいかな」

着る服が決まった後、僕はさっそくそれに着替え始める。

少し大きいが、外見上対して違和感がなかったので良かった。

よし、……上出来だ！

後はこの長い髪の毛だな。

腰まで長いとなると、うっとおしいし……髪の毛くろうかな。

「さて、……どうしようか。普通に一つくくりでいいかな……」

「　　待てええええエエエーッ!」

ボタンッ!

「…………え?」

でかい叫び声と共にドアを打ちぬいて、兄さんが僕の部屋へと侵入してきた。

あーあ、ドア完全に壊されてしまったよ。

……あれ、きつともう鍵が掛からないだろうな。
はあ……。……。

これは修理代、結構するだろうな。

……お父さん、きつと嘆きそうだ。

「待てっ、蛭!　くくるなら……!」

「はあ……くくるなら？」

また、変な言葉が飛び交いそうだったが、僕はあえて聞いてみた。

「ツインテールにするんだあああーッ！……！」

「……は？」

「だーから！ ツインテールだ！」

「……はあー！？」

また、何を言い出すかと思えば……。

ツインテールって、どこのアニメのキャラクターですか……。

そんなの今時流行っていないよ。

むしろ、この長い髪でそんな髪型にしてみたら、目立って仕方ない

よ。

「なっ！ なっ！ ツインテール、ツインテール！！」

「……出て行ってもらえませんか？ 兄さん」

「嫌だ！ ツインテールにするって約束しないと、出て行かないぞ！」

……なんてわがままな人なんだ。

まあ、今に始まった事じゃないのだけど。

ああ、これは素直に言うことを聞くまで、本当に出ていきそうにないな……。

なんて傍迷惑な人だろう。

うう……仕方ない。

「……はあ。わかりました、……ツインテールにします。だから、早く部屋から出て行ってもらえませんか？」

「やつふおおおっ！ 後でちゃんと見せるんだぞ！！ 蜚、好きだぞ！ 大好きだぞ！ 愛しているぞおおーッ！」

兄さん、最後のはいらないですよ。

……あゝ、やっぱり、最後の二番目からいらないです。

兄さんが部屋から出て行った後、仕方なく約束どおりのツインテールとやらにしてみる。

はあゝ……正直、あんまり変な髪型にはしたくないのに……。でも、しておかないと兄さんうるさいし……。

「えーと、……とりあえず、これでいいのかな？」

兄さんが出て行く際に渡してきたリボンを左右にくくり、ツインテールの髪型が完了する。

……ああ、本当にアニメみたいな髪型だ。

鬱だ。鬱病にかかりそうだ。

なんか女の子になってから、たったの1日で兄さんの遊び道具にされたような気がする。

「あ、そうだ！ 海斗に連絡しなきゃ……」

僕は携帯電話に登録しているアドレス帳から海斗の電話番号を選択して、電話を掛けてみた。

プルルルッ！ プルルルッ！ ブツンッ！

「あ、海斗。今日、買い物に一緒に行かない？」

「別にいいけどさ、お前何か買うものが……」

海斗がそう言いかけて、途中で言葉を止める。

「あゝ、服か！」

「そうそう！ あと、下着の方も買わなきゃいけないんだ」

「し……下着なあゝ……」

海斗が言葉を濁しながら言う。
きつと、察しがついたのだろう。

「えーと、……嫌だったら、無理しなくてもいいんだよ？」

「……いや、大丈夫。行くよ、俺」

「そ、そっか！ ありがと！ ホント言うとき、兄さんと二人きりだと心配で心配で……」

「あははっ、だろうな！」

「じゃあ、１０時に僕の家に来てね」

「10時か。後30分だな、わかった！ それじゃ、また後で」

「うん、また後でね」

プツッ！

海斗との電話を終える。

なんだか、海斗には悪い事しちゃったな……。後でちゃんとお礼くらい言っておかないと。

約束の時間まで30分。
用意を終えた僕はテレビを見ながら、時間が来るのを待つことにした。

そして、ようやく約束の時間がきて、僕は玄関の方へと向かっていった。

玄関では既に兄さんが靴を履き終えていた。

「ちゃんと準備できたの？ 兄さん」

「ああ、バッチリさ！ それよりもだ……！」

ああ、また何かよからぬ事を言いそうな予感が……。

「そのツインテール、最高だあああーッ！！ もう、本当に可愛
いぞ！！ 感動した……！」

はあ、やっぱり……。

なんで、ツインテールを褒めるのだろうか？

普通は先に「服が似合っているよ」とか言うだろう。

まあ、変態に普通を求めても仕方ないか……。

「この髪型、なんか凄く違和感があるんだけど……」

「何をまた！！ ツインテールこそ“美”なのだよ！ それに、蜚にはその髪型がすごーく似合っているぞ！ イッツ、パーフェクトー！！」

目の前でアホな姿を晒している兄さんに頭を痛くする。

……ああ。誰か、この変態を止めてください。

止めて下さった方には本当に何でも御礼をします。

あ、や……やっぱり、エッチなのだけはご勘弁を……。

ピンポーン。

インターホンが鳴る。

きつと、海斗が来たのだろう。

まだ靴を履き終えていない僕は少し焦ってしまう。

「兄さん。先に出て、海斗と待っていて！」

「おう、わかった！ 早くしろよ！ でないと……」

「いいから早く行ってください……」

「ちえ〜！ 冷たいな〜、蛭ちゃんは」

兄さんが文句を言いながら、玄関の扉を開けて先に外へ出る。靴の紐を結び終えて、僕も扉を開けて外へと出た。

海斗は大きな欠伸をしながら、兄さんと挨拶を交わしていた。僕は玄関の鍵を閉めて、二人の方に駆け寄る。

「おはよ、海斗。……なんだか、眠そうだね」

「ああ、昨日は色々あつて、なかなか寝ることができなかったからな〜……！」

海斗が僕の顔をニヤリと見て、言う。

これは僕のせいだよな……。

うう……、面目ないです。

「う、ごめん……」

「あははっ、冗談だよ！ 気にするな！ それよりも……」

海斗の目線が僕の頭の両サイドへと向けられた。

その目はまるで何か珍しいものでも見たように、瞬きをピクピクと何回もしている。

あう……。

頼むから、そんな憐れむような目で僕を見ないで。

「え、えーと……蜚、その髪型はどうした？」

「あ、えつと……これは……その……」

「海斗君。よくぞ、聞いてくれた！」

僕がどう返せばいいか困っていた所に兄さんが横から話に割り込んできた。

……ああ、また面倒な事になりそうだよ……これ。

「海斗君。これはね、人類の“美”そのものであるツインテールなんだよ。わかるかい？」

「え、えーと……」

海斗が兄さんの言葉にどう返せばいいのが、困っている。

はあ……。

兄さん、そろそろ勘弁してください。

……海斗、困っているじゃないですか。
見ているこっちが辛いです。

「ま、まあ、その“美”が何なのかはわかりませんが、今の蛭の髪型は確かに似合っていますね」

「……は？」

海斗の予想外な言葉に僕は思わず、声を上げてしまった。

「おおーッ！ 海斗君、君の目は素晴らしいくらいに輝いて見えるようだね！ やっぱりそう思うだろう！！ だろ！！」

「ええ。まあ、確かにパツと見たところ、凄く可愛らしいですよ」

ちよ、ちよつと待て！

なんでこの二人が意気投合するんだ！？

おかしいよ！ 海斗も悪乗りしすぎだよ！

「いやあ、海斗君、君は本当にわかる男だな！ もう、俺達は同志だよ！」

「あははっ……ど、同志ですか」

なんだか、頭痛がしてきた。

……というか、勝手に同志を増やさないでよ、兄さん。

海斗もそこで苦笑いするなら、初めからやめてよ。

………はあ。

「あれ？ 蛭、どうした？ そんな不機嫌な顔して」

我がアホ丸出しの変態兄さんが僕の様子に気づいて、話しかけてくる。

……気づくのが遅いですよ、兄さん。

「どうしたんだよ、蛭ちゃん」

「……いや、何もないです。本当に大丈夫ですので、その呼び方はやめてください」

「わかったよ。マイ、シスター」

「はあ、もういいです。……早く行きますよ」

私は先に市街のデパートへと向かい、歩き始めた。

後ろでは、兄さんが海斗にツインテールを語りながら、二人後をついてきていた。

……うう。

これから女性の下着と服を買いに行くというのに、もうここだけで十分疲れた気がした。

……はあ、かったるいよ

先に服を買うために僕達は服屋へと向かった。

そして服屋に着くなり、兄さんが「蛭に似合いそうな服を必ず探してやる〜〜ッ！」と言って、真っ先に店内へと入っていった。そんなアホな兄さんを見て呆れながらも、僕は海斗と一緒に店内へ入っていった。

「へえ〜……こんなに服の種類があるんだ、女の子って」

年頃の女の子はお洒落に気にするものだが、売り出されていた服は様々な部類に分かれていた。

向こうの奥では兄さんが僕に似合いそうな服を全力で探している。

しかし……。

本当に僕のためなのだろうか？

なんだか、兄さんの背中から黒とピンクのオーラが混じって出ているように見えるのだが。

気のせい……だよな？

「……なあ、海斗はどんな服が僕に似合うと思う?。」

兄さんの事は放っておいて、僕は海斗に聞いた。

「そうだな。まあ、何を着ても似合いそうな気はするけどな」

「ん、ならこれはどう?。」

僕は棚に置いてあったフードのついてある可愛い服を手にして、それを上から重ねてみた。

「お、なかなか似合うんじゃないかな」

「そっかあ。なら、こっちはどう?。」

今度はピンク色のシャツに黒いネクタイが巻かれていた服を上から重ねてみた。

「ん、それも似合っているよ」

またも海斗から、お褒めの言葉を貰ったが僕はしっくりとこなかった。

「……なあ、海斗。本当にどっちも似合っていると思ったの?。」

「え? 似合っていたと思うぞ?。」

「そ、そうなのかなあ……」

海斗のコメントは似たようなものばかりだったので、本当に僕に似合っているのか、わからなかった。

……そういえば、僕がまだ男で、一緒に服を買いに行った時も、同じ事を言っていたような気がする。

もしかして、海斗はこういう服選びに関してはセンスがないのではないだろうか？

ために僕はいかにも似合わなさそうな服を手にとって、上から重ねてみる。

そして、その姿を海斗に見せる。

「じ、じゃあ、……この服はどうか？」

僕は海斗の反応を伺いながら、聞いてみた。

これで、「似合っている」と言ったら、確実に服のセンスが悪いことになる。

「うん、似合っているぞ」

「……そ、そっか」

海斗はすごくさわやかな笑顔で言った。

初めてわかった事だったので、少し驚いてしまう。
だが、まさかここまでセンスが酷かったとは思ってもしなかった。

……うん。

海斗って、女の子を傷つけてしまうタイプだな。
これじゃあ、せっかくの容姿もただの女の子泣かせになるかもしれないよ……。

「えっと……どうかしたか？」

「あ、いや。なんでもないよ！ あは…はははっ」

「そ、そうか」

「なあ、海斗。ちょっと兄さんを見ていてくれないかな？ 変な事が起きないように監視して欲しいんだ」

「別にいいけど、服選びはどうするんだ？」

「そ、それについては自分でなんとか良さそうな服を選んでおくよ」

「……そっか。わかった」

海斗は納得した後、向こうで今も一生懸命に僕の服を探している兄さんの方へと向かっていった。

ふう〜。

これはなかなかの人選ミスだったのかもしれない。
まあ、呼んだのは僕自身だし、仕方ないか……。

僕は最初にしたんだ二着の服と更にジーンズを一枚、赤と黒のチエツクのスカートを一枚買って、服屋での買い物を終えた。

……え？　兄さんが選んだ服はどうしたって？

えーと、兄さんは兄さんで僕の服を買っていた。
なんだか、露出度が高そうな服ばかり買っていたけど……。
僕は毛頭着るつもりはない。

兄さんには悪いけど、お金の無駄遣いになるだろう。

服の買い物が終わって、僕達は今日の山場となる場所へと移動した。

ランジェリーショップ。

そう、……下着屋さんだ！

「……遂にこの時が来たか。蚩、兄さんも中についていくからな！」
隣で、もう気合い満々で言う兄さん。

……いや、もう兄さんには外で待っていて欲しいです。
というか、僕がこの人を買いたい物に誘った事自体が間違っていた……。
はあ。

「悪いけど、兄さんはあっちの本屋で待っていて……ってもう入ってるしっ！」

僕の話を見殺しして、兄さんはランジェリーショップ内へと入っていった。

そのすぐ後にショップ内で「きゃああー！」とか「この変態っ！」とか、様々な罵声が飛び交って、それが外にまで聞こえてきた。

……ああ、入りたくない。

何故、あの人はこうも身勝手に行動して、僕を悩ませるのだろうか。こんな所で兄さんの変態に振り回されるのはいやだ……。でもでも、今ここで下着を買わないと今後、兄さんに襲われてしまう可能性が増してしまう。

……神様、あなたは僕に素晴らしいくらい嫌な試練をお与えしてくれましたね。ホントに……。

「……俺も入らなきゃいけないんだよね？」

兄さんが罵声を言われていたのを聞いていた海斗が助けを求めているような顔で僕に聞いてきた。

体をビクビクと震わせ、まるで捨てられた子犬のような顔をしながら、僕の手を握っている。

いや、そんな顔で言われましても……ね！。
普通の女の子なら、一目見て助けたくもなるだろう。

でも残念ながら、僕は男ですので……。

「……ごめんね、海斗。僕一人きりじゃ、心細いんだ。……一緒に
ついてきて欲しいんだ」

「だよ……な」

「うん、……ごめんね」

「いいさ……。俺も電話で“行く”って答えたしな。」

「海斗、ありがとおっ！」

「いいよいいよ。……あ、ちなみに入るのを断っても無理に連れて
入るつもりだったろ？」

僕は満面の笑顔でこう答えた。

「もちろんっ！」

「やっぱりな……、はあ」

海斗がいかにも嫌そうなため息をはく。
そして、僕に腕を引っ張られながら、ランジェリーショップ内へと入っていった。

その光景は僕達の予想を遥かに上回っていた。

「す、凄い数の量の下着だな……」

「そ、そうだね……」

白色にしましま模様や、ピンク、黒、水玉、……ああ、もう数え切れなくらい豊富な種類の下着が揃っていた。

僕と海斗は当然、目のやり場に困ってしまった。

「は、早くしてくれないか、蚩。俺、周りの人からすごい敵意の目で見られていて辛いんだが……」

今は女の子である僕の側にいても、やはり周りの女性からはランジェリーショップに男がいる事に許せないのだろう。

なんという……。

恐るべし、ランジェリーショップ！

「すみませーん！」

僕は店員を呼んだ。

すると、レジにいた店員さんがすぐに僕の方へと向かってくる。

「はい、なんでしょうか？」

「サ、サイズを測って欲しいんですけど、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫ですよ。では、こちらへどうぞ」

店員さんに案内され、僕と海斗は試着室へと向かった。

「海斗。すぐ終わると思うから、ここで待っていて」

「ああ、……なるべく早く頼むな」

僕は海斗をすぐ傍に残して、店員と一緒に試着室へと入った。

「では、上に着ている服を全て脱いでください」

「え……、あ、はい」

駄目だ、緊張してしまう。

なんだか、すごく恥ずかしい。

店員さんとはいえ、女性には変わりないのだ。

しかも、綺麗で年の若そうな店員さんだから、なおさら困ってしまう。

「どうしました？」

「い、いえ！ なんでもありません」

僕は慌てながらも、女性の指示に従って服を脱いでいく。
そして、上半身を全て脱ぎ終えた後、店員さんにサイズを測ってもらった。

「ど、どうですか？ ぼ……その、私のサイズはどれくらいなんでしょうか？」

声をガチガチに震わせながら、店員さんに話しかける。
そうでもないかぎり、こちらの身がもたなかった。

「とても豊かな大きさですよ。羨ましいくらいです」

店員さんは僕の言葉がおかしかったのか、笑いながらそう答えてくれた。

はあ……、やっぱり大きいんだ。僕の胸って……。
つい複雑な気持ちに浸ってしまう。

「はい、測り終わりました。もう、服を着ても大丈夫ですよ」

「あ、ありがとうございます。えーとその、サイズの方は？」

「はい。バストの方は86です。次にウェストは……」

店員さんから、サイズを聞いてそれを暗記しておく。

……うう、恥ずかしいな。

「そ、そうですね。すみません、どうも」

僕は顔を赤らめながら、店員さんにそう言った。

店員さんは笑いながら、「また何かあったら、声をかけてください」と言い残して、試着室から出て行った。

はあ。

なんか、辛いな。これ……。

サイズとか聞いて……、女の子って大変なんだな……。

「はあ、……早く、買って帰ろう……」

着替え終わって、試着室を出る。

「……か、海斗、お待たせ……」

「お、おう。どうしたんだ？ ……顔、死んでるぞ？」

「うう……、今はそつとしておいてくれ……」

僕はサイズにあった下着を適当に四着選んで、それを試着せずにそのままレジへと持っていく。

覚悟はしていたのだが、やはり女性の下着を実際にレジに持っていて、いざ買うとなると心臓が飛び出すほど恥ずかしくなってしまう。

……お、落ち着け、僕！

店員さんに値段を言われて、僕はその値段ちょうどのお金を払う。商品が渡されて、僕はレジからすぐに去ろうとした時に店員さんから声がかかった。

「お客様、レシートは要りますか？」

「あ、い、いりまへむっ！」

勢いよく言葉を囁んでしまって、僕の顔は燃え上がるように真っ赤へと変わっていく。

その様子を見ていた海斗は、今にも吹き出しそうな笑いを堪えていた。

店員さんや周りのお客さんも笑いたいのを抑えているのか、下を向いていた。

「ッ~~~~~!!」

ああ、もう……。

はぁ、最後の最後で……なんでこんな恥ずかしい事を……。

うう、……もう死にたいくらいだ。
はぁ。

「か、海斗！ 早く行くよッ！」

僕は海斗の手を強引に引っ張って、ランジェリーショップを後にした。

「あははっ！ あの時の蛍は最高におもしろかったぁー！」

「もう笑うなよ……、はぁ」

昨日に引き続き、本日もまた厄日だった。

こんな事なら、もういつそ泣きたいくらいだ。

……はぁ、僕の苦勞は一体どこに消化されるんだろ。

「まあ、でもなんとか必要な物は買えたんだし、良かったよな！」

「……うん」

「げ、元気だせよ！ そんなに落ち込まなくてもいいだろ？」

「あまりにも恥をかきすぎた、もう駄目……うう」

「おーい……って、こりゃかなり重症だな」

もう重症ってレベルじゃないよ、ホントに……。女になったとはいえ、店員さんには体を見せてしまったし、サイズ

を測る際に体を触られた……。

それに、最後は周りの人の前で言葉が噛み噛みになってしまったし……。

あゝ……、やっぱり最後の事が一番恥ずかしいよ。

「はあゝ……」

「あつ！　そう言えば、壮士さんはどこに行っただら？」

海斗の言葉に僕はハッと我に返る。

確かにランジェリーショップで兄さんの姿は見なかった。

ま、まさか……兄さん、あのランジェリーショップのどこかに隠れていたりして……。

はは、……まさか、ね。

「さて。もう用事は済んだ事だし、この後お前暇だろ？　元気がない蜚に今日は一つ、ラーメンでもおごってやるよ」

「え、ホントに!？」

「おつ、いきなり元気になったな〜！ それじゃあ、行くか」

海斗の後に続いて、歩き始める。

「ラーメンなら、あそこがいいな〜。ほら、名前なんだっけ。ん〜
……こ、好……」

「ああ、好天か！」

「そう、そこそこ！」

「オツケー！ ……あ、あんまし高いの頼むなよ？」

「えへへっ、わかってます！」

夕陽がかかった太陽の方角を歩きながら、海斗とまた他愛のない話を
をする。

今日の最後で、少しだけ……。

ほんの少しだけ、本当にこの日を楽しく過ごせるような気がした。

「……海斗」

「ん？ なんだ？」

「ありがとう……っ！」

一方その頃、ランジェリーショップでは……。

「くそ、隠れたはいいものの下着が買えないとは一生の不覚!!
しかし、我が最愛の妹のためにも俺はめげんぞ!! 全ては蛍の
可愛い姿を見るために!! あっはっはっはっはっはーッ!!
！」

「あ、見つけたわ! 変態がここにいるわよ!」

「なっ! しまった!! 全力で声を出しすぎた!!!!」

「観念しなさい! この変態!」

バキッ！ ボキッ！ ゴキッ！

「ぐ、ぐはあ~~~~ツ！！く~~~~、け、蛍のためにも俺は
……俺は下着を穿うんだあああーッ！！」

夕陽が暮れても、変態が一人、ランジェリーショップ内の女性全て
に戦いを挑んでいた。

……真性のアホだろ。

第2話 脅威のランジェリー（後書き）

【キャラ紹介】

伊藤 壮士^{いとう そうし}

18歳。風見学園生徒3年生

主人公の兄で、現生徒会の会長。

主人公を生徒会に引き入れようと企んでいる。

主人公と同じく容姿端麗で頭脳明晰なのだが、「ド」が付くほどの超変態の持ち主。

実の弟である主人公を溺愛しており、それは女になっても変わらない。（むしろ、悪化している）

ツインテール萌えの人物であり、主人公の髪型をツインテールにさせたのはこの人が原因。

女になつてからは、主人公へと猛烈なアタックをかけている。（蚩曰く、見境がなくなった獣）

主人公からは「真性のアホ」、「ド変態」と呆れられているが、本人はまったく気にしていない。

第3話 人気者って辛いですよ（前書き）

とうとう第三話ですね！

どうも、お久しぶりです！

兄の壮士です！

前回、第二話で何とか下着と服を買ったのはいいものの、蛭がなかなか着てくれないんですよ。

本当に辛いです！

思わず、涙を流しましたよ！

あ、もしかして……。

蛭は着たいけど、恥ずかしくて着れないのでは？

そうか……。

それしかありえんな！

「蛭、兄さんには素直にしてくれてもいいんだよ！」

「……は？（また、いきなりなんだ？）」

「でも、そんな恥じらいな蛸もまた好きだ〜!!」

「……………（筆者様。あなたはいつまで、僕にこのコーナーを続けさせるつもりですか?）」

「ああ! 蛸、可愛いぞ、可愛いぞお〜〜っ!!」

「…………えーと、読者の皆様。本当にアホな変態兄さんですみません。それでは、第三話へどうぞ〜っ!」

第3話 人気者って辛いですよ

ついにとうとう、この日がやってきました。

……そう、始業式！

学園側には前もって、事情を説明しておいたからいいものの。
果たして、これから本当に、女の姿のままで学園生活をつまくやつ
ていけるのだろうか？

ああ、不安の種が多すぎて、もう考えるのが嫌になってくる。

「はあ……」

風見学園女子生徒の制服を着た自分の姿を鏡に映して、僕はため息
を吐き出した。

この数週間、ジュースの効力が切れる気配はまったく言ってもい

いくらいになかった。

しかも、お父さんの出張がどうやら延びてしまったらしく、当分、家に帰って来れそうにもないらしい。

はあく。鬱だ。

なんて鬱な気分になるんだろう。

……ああ、なんだか、また現実逃避したくなってきた。

だいたい、学園側もなんであっさりと事情を受け入れてくれたんだ？
確かに、受け入れてもらった事には感謝しているのだが、男が女となつて、学園に登校する事って、安易に認められる事じゃないだろう。

というか、男から女に変わってしまった事に疑問を持って欲しいくらいだ。

……普通に考えるとおかしいとを感じるだろう。

まあ、学園長が気をきかせて、他の教師、及び生徒にはこの事を極秘にしてくれたので助かるばかりだったのだが……。

「はあく。それにしても、この制服のスカート、短すぎだよ……」

スカートの裾を持ちながら、位置を調整する。

このスカート、階段を上がる際に下にいる人に見えそうなくらい丈が短かった。

……うう。

今なら、短いスカートが嫌な女性の気持ちもわかる気がする。

「おーい！ 準備できたか？」

兄さんの呼ぶ声が一階から、聞こえてきた。

僕は用意した学園用の新しい鞆を持って、一階へと降りていく。玄関には既に支度を整え、準備万端の兄さんが待っていた。

「ごめん、兄さん。待たせた？」

「いや、全然大丈夫さ！ マイハニー！！」

はあ、……朝から本当にうざいテンションだ。

いい加減、「マイハニー」や「マイシスター」とか言うのを本当にやめていただきたい。

「それよりもだ！ 蛭！！」

「……なんですか？ 兄さん」

「なんでツインテールじゃないんだあああーッ！？」

兄さんが大声で叫び出す。

……そんな狂言をいきなり、言わないでください
それに朝から本当に騒がしい。

近所迷惑という事をこの人はわかっているのだろうか？

ああ、でも……わかっていてもこの人はそんな事、きつと聞かない
だろうな。

はあ……。

「あのね、兄さん。あの髪型にするの、凄く時間がかかるんです。
それに面倒くさいし……」

「い、いかん！！ それではいかんぞ！！ 面倒くらいなら、代わ
りにこの俺が…… ！！」

「遠慮します」

「ぐはあああーっ！！」

兄さんが言葉を言う前に、僕はきつぱりと断っておく。

だって、兄さん。
ツインテールにした時の僕の姿を見たら……。

……襲ってくるじゃないか。

女の子になって数週間、ツインテールの髪型にしては、襲ってくるの連続だった。

しかも、懲りずに何回も襲いかかってくるので本当に性質が悪い。

「お願いだよー!! 一生に一度のお願いー!!」

……兄さん。

こんな事に一生のお願いを使わないでください。
はあ。

だんだんと頭が痛くなってきた。

「嫌です。だって、あの髪型にしたら、襲ってくるじゃないですか」

「大丈夫！ 家の外では襲わないぜ！！」

親指を立てて、「GOOD！」のサインをこちらに向ける兄さん。

えーと……。

兄さん、外だけ限定ですか？

家でなら、襲う気なんですか？

うう……、本当に兄さんは欲望に忠実すぎます。

はあ、まるで獣のようですね。

実の兄ながら、つくづく哀れに思えて悲しくなってくる。

……はあ。

「と、とにかく！ 無理なものは無理……って、あれ？ 兄さん？」

いつの間にか、兄さんの姿が玄関から、消えている。

兄さんの靴はまだあったため、家の中にはいるはずだ。
何か忘れ物でもしたのだろうか？

「おーい！ 兄さん」

呼んでみても、兄さんからの返事が返ってこない。

はあ。

一体、何をしているのやら……。

「兄さん、早くしてください！……先に行ってますよ？」

「ちょ、ま、待ってくれ！！ 行かないで！！」

二階から姿を現した兄さんが、玄関へと降りて戻ってくる。

というか、兄さんはあの短時間で一体、いつ、どうやって二階へと上がったんだろう？

……謎だ。

「悪いな！ ちょっと忘れ物を取りに行っていたんだ。待たせたか？」

「……別にいいよ。それより何を取りに行っていたの？」

「ああ！！ これさ　！！」

そう言って、兄さんは手に持っていたものを僕に見せた。

「えーと、……リボンだね、これ？」

兄さんが手にしているのは、僕がツインテールの髪型にする際に、
髪の毛を結ぶリボンだった。
何故にリボンなのだろうか？

……ま、まさか。

「さて、蛭！ ツインテールにしようか！」

……やはり、そうきましたか。
はあ。

なんで、こんな展開ばかりなのでしょう、神様？

兄さんが物凄い笑顔でこっちに迫ってくる。

なんだか、その笑顔が不気味に見えて、仕方ない。
体中に怖気が走ってきた。

ああ、何か嫌な予感がしてきた……！

「えー……つと、兄さん、……聞いていなかったの？ ぼ、僕は
！」

「大丈夫だよ、蛭はツインテールがいいんだよね！」

僕の話をもったく聞かず、兄さんは迫る行為を止めようとしない。

ねえ、兄さん。

僕、“ツインテールがいい”って、言った事ありませんよ。

というか、兄さん、恐いです！

うう……、兄さんの目が本気になっている！

「に、兄さん！ お願いだから、落ち着いてください！」

「はっはっは！ 大丈夫だ。俺はいつでも、どこでも落ち着いてい

るぞー!!」

そ、それは顔をニヤケながら、言う台詞なんですか？

ああ、……兄さんの顔が異様に恐く見える。

……ち、近づかないでください！

そんな笑顔で近づいてこないで！
うう……、怖い。

不気味なくらいに恐すぎます！

つて、あ、そんな強く髪を引っ張っちゃ……っ！

「い、痛いっ！ に、兄さん、やめ……あ……っ！ ……やだ、僕
いやですよっ！」

「だめ！ 兄さんの言う事は、ちゃんと素直に聞かなくちゃねー！」

「あ……う……あは……んあ……っ！」

「そんなに嬉しい声を出さないでくれよ、蛭。……可愛いから、なんかいじめたくなるしさ」

「あう……っ！ だ、駄目……駄目、駄目え……あ……んっ！」

「はっはっは！ 大丈夫だよ、……優しくするからさ」

「に、兄さん、兄さんっ！！ ……ん、あ、あう……！ い、いや、……いやああーっ！」

.....

.....

.....

「はい、完成！ やつぱり、とても凄く似合っているぞー！ー」
「うう……むう」

あっという間に兄さんに髪型を変えられてしまった。

そう、……ツインテールに。

隣には、まるで勝ち誇ったような満面の笑顔で立っている兄さんが、僕の姿を見て、満足げに言っただけを見た。

一方、僕の方というと……。

「むう……っ！」

もちろん、怒っています。

はあ……！

この人は本当になんて自分勝手な人なんだろう。

はあ、もう金輪際、ツインテールにはしたくない。

本当にそう思ってしまう。

でも、兄さん……強引だからな……。

多分、さっきのように簡単に屈してしまいそうだ。

ああ……、本当にもう、嫌だ……。

はあ。

「まだ怒っているのか？ ごめんよ。……でもね、蛍のツインテールは本当に可愛いんだ！ もう、破壊的な可愛いさなんだよ！ だから……！」

「……だから、何ですか？」

「兄さん、欲望に勝てなかった　　テヘッ」

……おい、こら。

テヘッ、じゃないだろう。

あまりにも、自分勝手すぎるよ。

……というか、実の弟に己の欲望をぶつけないでよ。

そういう事は彼女でも作って、彼女にやってもらえばいいだろう。
はあ、……ああ。

朝から、本当に気分を害してしまった。

……もう、この人を放って置いて、先に学校に行こうかな。

僕は靴を履き終えた後、鞆を持って、外へと出て行った。

バタンッ！

「え、あれ？　ち、ちよつと！　ま、待ってよ、蛭！　俺、靴まだ履き終えていないんだよ、ま、待ってくれ〜っ！！」

通学中に何人もの風見学園生徒に出会い、その度に、僕はジロジロと見られていた。

「お、おい！ あの子、すっげー可愛くないか？」

「ん……？ うわ、めちゃくちゃ可愛いじゃん！」

「あれって、同じ学校の制服だよな！ うわ、あんな可愛い子が同じ学校だと思うと、凄くテンション上がるんだけど……！」

前にいた男子生徒二人がこちらを見ながら、ひそひそと話していた。

……というか、話の内容は全部聞こえているので、ひそひそ話にはなっていないのだが。

言動から見て、僕と同じ、新入生なのだろう。

僕を見ていた二人の顔は、下心がむき出しになっていた。

「可愛いよね。あんな子、彼女にしたいな」

「ばーか！ お前じゃあ、絶対に無理だって」

「う、うっせーな！」

……全くもって、冗談がきついです。

僕は男ですよ？

あなた達と同じ性別ですよ？

……まあ、言っても信じるわけがないと思うけどさ。

はあ。

男子生徒達に見られながらも、学園へ向かって歩く事、10分。
これから、毎日通う事になる風見学園。

……もとい、「私立風見ヶ丘学園」に着いた。

学園の正門を、ささっと通り、僕はクラス発表が張り出されている
掲示板へ向かった。

「おい！ 見ろよ、あれ！」

掲示板へと向かっていく中、一人の男子生徒が僕を見て、声をあげた。

それが周りの生徒へと伝わり、僕の方へと振り向いていく。

「うおっ！ か、可愛いー！」

「……すげー」

「そこらのアイドルも顔負けだな、あれは」

男子生徒のギラギラした視線が浴びせられる。

あう……、またですか。

「スタイルすごく良いなあ、あの子」

「う、羨ましい……」

男子生徒に混じって、女性生徒からの視線も浴びせられた。

こ、今度は女の子から……。

……僕は男ですよ。

「はあ」

軽い嘆息をする。

どうやら、見事なまでにこの容姿は目立っていた。

僕は周りから、ざわざわと聞こえてくる声を、聞こえないよう振りをして、掲示板へと歩いていった。

掲示板には生徒が囲むように集まっていた。

僕はその中を潜り抜けていく。

その際、また周りで声が湧き始めたが気にする事なく、クラス分けの紙が張られている真正面へと立った。

そこには六枚の紙が、ザラッと並べられていた。

なるほど、僕達のクラスは全部で6クラスなのか。
えーと……。

僕の名前は……っと！

「……あつ、あつた！ クラスは……一組か」

しかも、出席番号も一だったので、一年一組の一番。
なんか、一尽くしだな、僕。

……そうだ。

ついでだから、海斗のクラスも見てもこうか。

「海斗は……あつ！ 海斗も同じ一組だ」

……まさか、海斗と同じクラスになるとは。

神様、本当にありがとうございます。

海斗と同じクラスになれた事、凄く嬉しいです。
できれば、この調子で僕の体も早く男に戻って欲しいです。

「おはよ、蛭」

背後から、海斗の声が聞こえて、振り返る。

そこには、はにかんだ笑顔を見せた海斗が僕の後ろに立っていた。

「あ、おはよう」

「もう、見たのか？ 蛭は何組だったんだ？」

「うん、……一組だよ」

「へえ、そっか」

会話をしながら、海斗が掲示板に張られた、クラス発表の紙を見る。

「あつ、海斗、僕と同じクラスだよ」

「おつ、そうなんだ！ ありがとな、俺の分も見えてくれて」

そう言っつて、僕の頭を二回撫でた。

「こら。撫でるな」

「わりい、蛭の背が小さくなったから、つい」

笑いながら、からかう海斗に、僕は「う、うるさいな！」と小言を漏らした。

海斗がゆつくりと、口を開く。

「まあ、なんだ……。よろしくな、蛭」

「うん、よろしくっ！」

僕と海斗は握った手と手をお互いに軽く当てた。

「な、なんだ！ あの爽やかな笑顔をした野郎は……！」

「……羨ましい」

「ち、ちくしょおおおーッ！」

「あーあ、やっぱり彼氏いたんだな……」

後ろでは、かなりの数の男子生徒が悔しげな、または怒りの顔を浮かべて、僕達を見ていた。

「……はあ。」

なんか、すごく勘違いしているよ。

……なんだか、嫌な展開がくるような気がする。

ああ、神様。お願いします！

どうか、この勘が当たりませんように……！

「蛭？ ……どうした？」

「な、なんでもない、……なんでもないよー！」

「ん……本当かな？」

僕の様子が何かおかしいと感じたのか、海斗が少ししゃがんで、僕の顔を覗き込もうとする。

「な、海斗……っ！」

その光景は、僕の後ろから見れば、顔が重なったようになる。

つまりだ。

……僕達がキスをしているように見えてしまう、という事だ。

「あ、あの野郎おおおー!!」

「……見せつけてるな」

「ちくしょおおおー!!」

後ろで僕達を見ていた男子生徒数名が、怒りの視線をこちらに向けている。

ある生徒は、殺気まで送っていた。

……まずい、かなりまずいよ。

「なんか、すごい汗かいてるぞ？ ……本当に大丈夫なのか？」

……無理です。

この状況に耐えられません！

海斗が心配して、僕の額に手を当てる。

「っ……………！」

「熱は……………ないみたいだな。よかった」

よ、よくないっ！

海斗、後ろの視線に気づいてよ。

……僕達、結構危ないんだよ？

後ろからは、今も男子生徒からの視線が向けられていた。

このままでは、拉致があかない……。

「か、海斗！ 早く、クラスに行こうよっ！」

僕は海斗の手を離し、顔を上げて言った。

「あ、ああ。でも、体の方は大丈夫なのか？」

海斗は、まだ納得していないのか、心配している。

「だ、大丈夫だから！ ほ、ほらほら、早く！」

「あっ、ちょっと！ 蛍　！」

「い、いいから！ 早く行こっ！」

僕は海斗の腕を強引に引っ張って、校舎内へ向かっていった。

多分、僕達の後ろでは、今も男子生徒がこちらを睨みつけているだろう。

ああ……。

絶対に、振り向きたくないな。

はあ……、なんで僕っていつもこんな目に……、あう。

第4話 兄さんの意外な弱点（前書き）

第四話になりました。

もう、お馴染みになりましたか？

蛭の兄、壮士です。

いやあ……、今回の話は本当にね。

蛭には意外な弱点をつかれました。

いやはや、本当に情けない。

しかし、こんな事で兄さんは負けはしないぞおおおおー！！

「でもさ……あの時の兄さん、凄く可愛かったよ？」

「ぶ、ぶはっ！！ け、蛭！！ 何をまた！！？」

「え、だって……。なんか凄く子供っぽくて、素直に可愛いつて思っただけど」

「ぐはあっ！…… ちょ、ま、まで…… 蛭！ お、落ち着こうじやないか！」

「僕は落ち着いています。兄さんこそどうしたんです？ また、顔真っ赤ですよ？」

「こ、これはだな…… げ、幻覚だ…… 蛭の幻覚だぞ……！」

「はいはい、そういう事にしといてあげますよ（幻覚って……、本当に素直じゃないな、兄さんは。というか僕、初めてこのコーナーで楽しく終わったな）」

第4話 兄さんの意外な弱点

各クラスから、生徒達の盛り上がっている声が廊下にまで、響いて聞こえてくる。

……きつと、どこの中学校から来たのか、話し合っているのだろう。

僕達のクラスも色んな雑談で盛り上がっていた。

僕は、自分のクラスの扉を開けて、教室に入った。

続いて、海斗も入る。

突然、さっきまで、うるさい程に盛り上がっていた声がピタッと止んだ。

そして、教室にいた全生徒達の視線が、僕へと注がれる。

え……っと。

な、何……どうしたの？

……って、ああ。

このパターンはあれだな。

うん、嫌な予感がしてきた。

僕のこの予感は、外れるわけがない。

あう……、本当は外れて欲しいんだけど。

「うおおおおおー！！ 美少女だっ！！」

「俺達についているぞおおおおおー！！」

「……楽園だ。このクラスは理想郷だ！」

「……ふっ！ 絶対、狙い落とす」

……はう。

なんで、こつ男は単純なんでしょうか……、神様？

それに最後の「狙い落とす」って……一体、何ですか？

はあ。

一応、僕も男だけどさ。

でも、男子生徒の皆さん。

目をギラギラさせすぎですよ。

怖いです。

嫌な鳥肌が立つので止めて欲しいくらいです。

女の子って、本当に辛いよ。

……あう。

「すごく可愛いなあ」

「……あのスタイル、ものにしたいわね」

「いいな〜！ あんなに美人で」

女の子まで、僕を羨む目で見てる。

はあ。

僕の予想よ。

たまには、外れてもいいじゃないのかな？

本当に、なんでこんな嫌な予感ばかりが当たるんですか？

うう……。

か、神様のほか……。

始業式が無事に終わった後、僕は一人で学校から帰っていた。
「はあ〜」

何度もため息をついてしまう。

あの時の教室での騒ぎは、本当にひどかった。
教室に入って、自分の席についた後、男子生徒が目の色を変えて、
僕の席を囲んだのだ。

「……名前はなんて言っんですか！」

「うゝ、ご趣味はなんですか？」

「部活は、どこに入りますか!？」

……などなど、多彩な質問攻めを受けた。

ホント、精神的に追い詰められた気分になる。

「はあ〜」

美少女って、すごく羨ましがられると思うけど、実際はそうでもないですよ。

ため息をつきながら、のそのそと帰り道を歩いていく。

ふと、通路に張られていた広告が目映る。

「……アルバイトか」

広告には、「アルバイト募集中」と、大きく書かれていた。バイトの内容を詳しく見てみる。

……場所は、喫茶店『ARMA>アルマ<』

割と好評の良い、近所にある喫茶店だ。

募集している年齢は高校生から、と書かれていた。

どうやら、16歳の誕生日を迎えてなくても、高校生なら大丈夫みたいだ。

……バイトかあ〜。

やってみたいと思っているのだが、学校の校則で、バイトは禁止されている。

バイトしている生徒を発見次第、「停学」と厳しい校則だ。隠れてするには、リスクが高すぎる。

「どうしたんだ？ 愛しのマイシスター！」

いきなり、背後から僕がよく知る声が、聞こえてくる。

……というか、僕の事を「マイシスター」と呼ぶのは、この世界でどこを探しても、一人しかいない。

「……に、兄さん」

「はっはっは！ 蚩、会いたかったぞ！」

「……なんで、兄さんがこんな場所にいるの？ 生徒会は？ 会長の仕事は？」

僕がそう尋ねると、兄さんが笑顔になり、答えた。

「ああ！ 事前に全てやっておいたんだ！ ……そう！！ 全て、この日のために！！！！」

……アホだ。

なんというアホだろう。

そんなつまらない理由で、事前に仕事を終わらす事ができるなら、その力をもっと違う方向に使えばいいのに……。

やっぱり、兄さんはどこかおかしい。

どこかで頭のネジが一本、外れてしまっているのかもしれないな……。

はあ。

ホントにアホだから、呆れますよ……。

「でだ、マイシスター！ 何を見ていたんだ？」

「ん……、ああ。これです、兄さん」

僕は広告を指差した。

指差した方向を追いかけるように、兄さんが広告に顔を向ける。

「バイトかあ。蛭はバイトしたいのかー！」

「えーと、まあ興味はあるんだけど。でも、僕達の学校ってバイト禁止だから……まあ、仕方ないよね」

「ほう！ そんな事で困っていたのか！ うむ……なら、俺が学園長に交渉してみよう」

「…………え？」

兄さんが携帯電話を取り出して、どこかに電話を掛け始める。

ま…………まさかつ！

本気で学園長と交渉するつもりなのだろうか…………！？

「三年生徒会会長の伊藤ですが、学園長はいらっしゃいますか？」

「ちよっ、ちよっと兄さんっ！！ そんな事しないでいいから！」

僕は兄さんの携帯電話を奪おうと手を伸ばす。

だが、兄さんに頭を押さえられて、手があと一步届かない。

…………うう、男だったら絶対に届く距離なのに！

「あ、学園長！ すみません、いきなりお電話を掛けて。実は相談がありまして…………ええ。校則にあるバイトの件に関してですけど。

…………はい、そうです。はい…………はい！」

ああ……、もう勝手に話を進めちゃっているし……。いや……でも、こればかりは流石の兄さんでも無理なのではないだろうか。

いくら生徒会会長と言っても、兄さんは『生徒』なのだ。

一生徒の個人的なお願いなんて、学園側が聞くわけ……

「ええ、ありがとうございます！　では、そういう事でお願いします」

「……へ？」

プツン！

話が終わったのか、兄さんは携帯電話をポケットに直した。
そして、僕の頭を押さえていた手を放して、僕の方を見てきた。

……兄さんの顔は、とても喜んでいた。

うん、それはもう清々しいくらいに。

あれ……？

となるとなんだろう？

えーと……。

も、もしかして……。

「聞け、蛭！！ バイト禁止を校則から取り除いてもらう事にしたぞ！！ 学園長も快く許可してくれた！！」

「え！ ほ、本当ですか？」

「おう！！ 兄さんに不可能はないぞ！！ あっはっはっはっはっはっ……！！」

「あ、ありがと、兄さん」

でも、どうやって……？

そう疑問に思い、聞こうとしたが、僕はそれを止めておいた。

この人は理屈が通じない人だ。……一般常識に囚われない人と言っても過言ではない。

だから、そんな愚かな質問をしても、きっと意味がないだろう。

ああ……。

実の兄なのに、謎が深まるばかりだ。

深く考えると、頭がパンクしそうになる。

まあ、なにはともあれ……、兄さんのおかげでバイトが出来るようになったのだ。

「本当に嬉しいよ、兄さん」

兄さんに向かい、深く感謝を込めて、言う。

兄さんは「おうっ！」と笑顔で答えてくれた。

「……ところでだ！ 蛭よ！」

「ん？ ……兄さん、何？」

兄さんの笑顔な顔が、徐々にヤラシイ顔つきに変わっていく。

そして、拳をギュツと握り締めながら、兄さんは大声で叫びだした。

「報酬として今晚、是非一緒にお風呂に入ろうじゃないかあああ
ーっ!!」

「……………はあ？」

僕は思わず、呆れ声を上げてしまった。

……………ああ、やっぱりね。

こういう事でしたか。

兄さんが、何か交換条件を出してくるのは大体予想がついていたんだけど……………。

なんで……、なんで……お風呂なんですか？

はあ……。

本当に流石だな、僕よ。

悪い予想だけは見事に、百発百中で当たってくれますね。
うう……。

こんな予想能力、本当に入りません。

「……さて、早く帰らなきゃ」

「あつ、おい、蛭！ スルーしないでくれよう！」

「……お風呂を一緒に入るとか、今の僕の姿から普通に考えて危ないです」

「いいじゃないか！ なあ、蛭！」

「嫌です。僕の身が持ちません」

「そんな堅い事を言わずさ。たまには、兄弟で一緒にお風呂を浸かろうじゃないか……！」

ああ……。

本当にうっとおしいな。

ホント……、昔の兄さんが恋しいよ。

「兄さん……。僕、今は女の子ですよ？ 仮にも“兄弟”じゃありません。“兄妹”です。この年で兄妹が一緒にお風呂なんて、問題にも程があります！ 第一、もし……万が一、一緒にお風呂に入つて、それが他人に知られたらどうするんですか？ 僕達、今は兄妹なのに、世間から変な目で見られますよ？」

「……俺は別に構わんぞ？」

「そ、その言葉は危険ですからっ！ 早く、撤回してください」

「ふっ！ 何をまた……！」

目を瞑りながら、華麗に僕を強引に抱き寄せる兄さん。

……いやいや、そんなにキメても、発言が危ないので無意味に終わりますよ。

いや、本当に……ね。

「安心しろ！ 俺は、周りの目なんか、まったく気にしないから！
我が愛しのマイシスター！！」

「……………」

……駄目だ。

この人はどうやら、既にアホの領域を踏み越えてしまっているようだ。

もう、溜め息すらつけない。

そんな自信たっぷりに言われましても、こっちは全然安心できません。

……逆に凄まじい寒気がたちますから、やめてください。

うう……、この変態な部分さえなかったら、凄く良い兄なのに。

この際、どんな手段を使ってもいいから、僕の一般常識を分けてあげたい。

ああ……、神様。

何故、どうして、僕はこんな変態な兄の弟として誕生させたのですか？

欲は言いません。

ただ、普通の兄が欲しいだけです、神様。

……はあゝ。

本当にあんまりだ。

兄弟なのに、なんで兄さんはこんな変な性格になったんだろうか……。

「はあゝ……」

「……あ！　なら、こうしようか！」

兄さんは、ポンツと手の平に、手を置いた。

何か良い考えが閃いたのか、満面の笑顔になる。

……僕にとって、その笑顔は驚異的なくらいに、不気味に感じた。

「………今晚、一緒に寝るって事に」

「そつちの方が余計危ないですよっ！　なんで、難易度を上げたんですか!?!」

「ぶうゝ！　蛭は本当にケチだなあゝ！」

……ケチとか、そういう問題じゃありません。

「せつかく、バイトを出来るように頼んであげたのにさゝ」

「それについてはちゃんと感謝してしましよ。そんなに駄々をこねないでください、兄さん」

それでも、「むうゝ……」と頬を膨らまして、納得のいかないような眼差しをこちらに向ける兄さん。

……そんな目を向けても、駄目ですって……。

はあゝ……。

「……蛭よ」

兄さんが、拗ねた顔をやめ、今度は野心めいた瞳で僕を見つめてくる。

「今度は何ですか……？」

ため息をつきながら、僕がそう聞くと、兄さんは何故か、威張った様子で答え始めた。

「ならば、今晚の夕食を作る際は、裸エプロンで　　！！」

「即答で却下させていただきます」

「ぐはっ！ これさえ、駄目なのか……っ」

兄さんが銃で撃たれたかのように、胸を押さえて地面にしゃがみこむ。

……はあ、大袈裟すぎる。

というか、アホだ、この人。

それに裸エプロンって……

さっきの二つより、難易度が急増して、危険じゃないですか……。

そんな姿をしたら、僕は確実に兄さんに襲われると、自信を持って言えますよ。

「兄さん。そんなところで倒れこんだら、汚いですよ？」

兄さんへと、手を差し伸べながら、そつと話しかける。

「だって、蛭が……裸エプロン……拒否したし……」

「……あんなお願い、誰もが同じ状況に立たされたなら、皆が全員に拒否しますよ。だから、落ち込まないでください」

「ああ……、裸エプロン……」

……駄目だ。

拒否された事が、相当ショックだったのか、兄さんは上の空の状態になっている。

「……蛍の裸エプロン……萌え……」

兄さんが聞き取りにくい音量でボソボソと呟き始める。

……兄さん。

拒否されたからって、現実から目を背けて、妄想に浸らないでください。

「……蛍と裸エプロン、……新婚生活……赤ちゃん……」

……ちょっと待て。

「蛭と裸エプロン」はまだ、良しとしよう。

しかし、「新婚生活」と「赤ちゃん」って何ですか？

何故、そんな意味不明な単語が、兄さんのお口から出てきたのですか？

……ああ。

きっと、兄さんの頭の中では、自分通りの妄想が膨らんでいるんだな……。

そして、その妄想の中で僕、きっと兄さんに陵辱されているんだろうな……。

「兄さん、いい加減に立ち上がってください……！」

僕は兄さんの肩を強く、揺さぶる。

しかし、なかなか立ち上がらないどころか、兄さんは蛻の殻のような目で、僕を見てきた。

「は……だか……エ……プロ……ン」

まるで、死にかけ寸前に最後の言葉を言い終えた人……のような、そんな掠れ声で兄さんが僕に言いかける。

兄さんの顔は、まさに死人のようだった。

「ひ、ひい……っ！」

あまりの不気味さに、僕は思わず、後ろに引き下がってしまった。

は、はう……兄さん！

それ、ホラーです！

ジャンルが違いますよっ！

「は……だか……エプ……口……ッ」

もう一度、裸エプロンの名を言った瞬間、兄さんはぐったりと地面に倒れこんだ。

ああ……。

本当にこの場面から、見た人は確実に誤解するだろうな……。

「に、兄さん……、現実に帰ってきてください」

そう言いながら、僕は兄さんに恐る恐る近づいていく。

「いいんだ……、もう……いいんだ……」

兄さんは、起き上がったと思いきや、地面にガックリと四つん這いになって、しゃがみこんだ。

未だに何かボソボソと呟いていて、それが何なのか、よく聞き取りづらい。

「何がいいかわかりませんが、いい加減にしてください！ 周りに人が通ったら、確実に変な人と思われそうですよ？」

「……いいんだ……もう……いいんだ……」

「よ、よくありませんよっ！ 早く起き上がってくれなきゃ……」

もう二度と口を聞きませんよ”!?”」

その最後の言葉を言った途端、兄さんの体がピクツと反応して、動きが止まった。

……あれ？

……兄さん、もしかして……。

僕は、再度確かめるために、声のトーンを少し落とし、なおかつ、感情を込めて言ってみた。

「……もう、一生無視です……兄さんっ！」

そう言い終わると、兄さんの体がまた、ピクツと反応して、動いた。

そして、顔を上げた瞬間、ものすごい必死な顔で叫びだした。

「そ、そそそそ、……それだけは……っ！ それだけは、駄目だ
あああーっ！」

あまりの声の大きさに耳を両手で塞いでしまう。

はあ……。

兄さん、だから……近所迷惑ですってば……。

「な、なら……いつもの兄さんに戻ってください」

僕は兄さんの側に近寄り、手を再び差し伸べた。

「わ、わかった……」

兄さんは僕の手を掴むと、地面からゆっくりと起き上がり、立った。落とした鞆を僕が拾い上げて、それを兄さんに渡す。

「兄さん……はい、鞆」

「……あ、ああ」

鞆を受け取った兄さんは、やりすぎたと思ったのか、反省の顔色を見せていた。

「ごめん、蛭」

これは意外だった……。

捨てられた子犬のような顔を浮かべて、兄さんが、ボソッと謝罪の言葉を呟いたのだ。

兄さんが自分から謝る事は、珍しい。

というか、滅多にない事だ。

……ちょっと……言いすぎたかも……。

「反省したなら、……いいですよ」

クスクスと苦笑しながら、僕は兄さんの頭に手を置いた。

そして、そつと、優しく、頭を撫でていった。

「あつ……蛍……っ」

「ん、何ですか……？」

「あ、兄の頭を……撫でるな」

「どうしてです？」

そう聞きながら、兄さんの顔を覗いてみると、紅葉した葉っぱみたいに顔を赤くさせていた。

……まさか。

兄さん、もしかして……照れてる？

「ねえ、兄さん。……顔、赤いよ？」

「……それは蛍の気のせいだな」

兄さんの返事には、いつものような余裕が、こもっていなかった。

……やっぱり、照れてるんだ。

「えへへ、兄さん」

僕は、少し口元を緩ませて、軽く微笑んだ。

兄さんの照れた顔を見るなんて、子供の頃以来だ。
ちよつと、兄さんの意外な面を見たかもしれない。

僕は苦笑しながら、兄さんの頭を撫でていた手を、そつと離れた。

「これで、さっき僕が言いすぎた分はチャラ……ですよ？ 兄さん」

「あ、……ああ」

恥ずかしかったのか、兄さんが赤くなった顔を隠して、背中を向ける。

なんだか、いつもの困った兄さんではないので、可笑しい。

いつもなら、「蛭、最高だよおおーっ！」とか「蛭、愛してる

ぞおおおーっ!!」とか言うくせに……。

まさか、兄さんにもこんな素顔が残っていたなんてね……。

「兄さん、大丈夫ですか？」

クスツと笑いながら、僕は兄さんにあえて、聞いてみた。

「い、いや……なんでもないぞ！　大丈夫だっ！」

平然と笑顔を繕い、その笑顔を僕に向ける兄さん。

だけど、兄さん。

顔が赤いのはさすがに直せていませんよ？

「あれれ……？　兄さん、お顔が真っ赤なままですよ？」

僕は追い討ちをかけるように、聞いてみる。

僕のその言葉で、兄さんの笑顔が完璧に崩れ、変わりに動揺した表情を浮かばせて、更に顔を赤くした。

「だ、大丈夫だ！　心配ないっ」

兄さんは、必死に顔を隠している。

こんな事を言うのは、変だと思っただけど……。

それは、とても普通の兄さんからでは、信じられないくらいに、可愛らしい姿だった。

「ねえ、兄さん」

「な、なんだ……？」

照れた顔をあまり見られたくないのか、口元を手で覆い隠しながら、兄さんは僕を見る。

……はあゝ。

本当に素直じゃないんだから。

僕は兄さんの耳元で、囁くように口を動かした。

「……さっきの照れた顔、凄く可愛かったよ」

「~~~~~!」

兄さんの顔が、更にまた真っ赤に染め上がっていく。
それはもう、これ以上真っ赤にはなれないくらいに……。

「ほら、兄さん。また、顔が真っ赤に変わったよ?」

「う、うるさい! 兄をからかうんじゃないぞ、蛭!」

「えへへ、いやですよ」

そんなに顔を真っ赤にして、照れられても、全然説得力ありませんよ?

まあ、ちょっと悪ノリしすぎなのかもしれないけど。

でも、普段の事を考えると、これくらい別にいいよね?

ねっ、兄さん

第4話 兄さんの意外な弱点（後書き）

どうも！

筆者の桃月です。

読者の方々。毎度毎度、『僕なり』を読んでくれて、本当にありがとうございます！

第五話はまだ出来上がってないので、出来上がり次第、更新します！

第5話 保健室 パニック（前書き）

ああ……。

そ、そんなー！

蛍の初めてのキスが……！！

ま、まさか、彼に奪われるなんて……！！

「そんなの嘘だあああああー……！！」

「に、兄さん……本人が気にしている事をそんな大声で言わないでください。古傷に触ります」

「け、蛍……！ 嘘だと言ってくれよ。実はキスなんかしていないって……！！」

「……コホンっ！ え、えーと！ 引き続き、第5話をどうぞ！」

「そ、そんなあああああ……ッ……！！」

「はあ……（海斗の……馬鹿）」

第5話 保健室 パニック

女の子での学園生活を始めて、早十日。

僕はすっかり、女の子として、この学園生活に慣れ始めていた。

……ああ。

なんだか、自分で言っていて、すごく空しい。

でも、やっぱり、まだ慣れないものとかがある訳で……。

例えば、そう。

今のこの状況とかが、そのひとつでもあります。

「あれ？ 伊藤さん、着替えないの？」

既に、体操服に着替え終わった女子生徒から、声がかかる。

風見学園の体操服は、なぜか、女子生徒はブルマと決まっている。

はあ、なんでブルマ……？

今の時代でブルマって、なんて希少かつマニアックなんだろうか……。

あう……。

やっぱり、こんなの僕、着る事ができませんよ。
さすがに、まだ僕にも男の意地というものが残っています！

はあ……、鬱だ。

そのうち、精神的な病気で、うつかり病に陥りそうだ。

「伊藤さん！ 早く着替えないと、体育の時間遅れるよ？」

他の女子生徒は着替え終わって、体育館へと向かったので、更衣室には僕と彼女しかいなかった。

「あ、……う、うん！ さ、先に行つてくれるかな？ “私”、ちよつと体調崩しちゃって……」

……“私”。

僕は学園にいる間は、自分の事を「私」と呼ぶようにしている。

さすがに、高校生にもなつて、自分の事を「僕」と呼ぶ女の子はいない。

僕が男の子だった事が、バレないようにするためにも、色々と身近な所から変えなきゃいけないと思つたからだ。

それにしても、……やっぱり慣れないものだなあ。

“私” って……、はあゝ。

「伊藤さん、大丈夫？ 最近、結構多いけど……」

「ああ、……うん。でも、大丈夫だから！」

「そう？ ……ならいいんだけど」

「ありがと、佐倉さん」

僕は苦笑しながら、彼女にそう言った。

佐倉 唯さん

この学園で、初めてできた女の子の友達だ。

すごく優しい子で、何かあるたびに心配してくれる。

僕の知っている人の中で、数少ない良識のある人だ。

こんな良い女の子と友達になれた事に、本当に感謝したい。

ありがとう、神様……！

「もう時間だから、佐倉さんは先に行つてて！」

「え……？ でも……」

佐倉さんは、僕の顔を見て、心配そうな表情をする。

「保健室に行くだけなら、一人でも大丈夫！ だから、佐倉さん、先に行つて。もうすぐ、チャイムが鳴るし、このままだと遅れちゃうよ？」

「……わかったわ」

佐倉さんは、渋々と納得するも、まだ僕の事を心配してくれている

のか、僕の方をチラッと見た。

そして、思い残したような顔をしながら、更衣室を出て行った。

僕は佐倉さんを見送った後、保健室へ向かった。

もちろん、僕の身体には怪我なんてないし、どこも悪くない。

……しかし。

やっぱりまだ、ブルマを穿くという事に抵抗感が残っていたのだ。

佐倉さん、本当にごめんなさい。

心配をかけてもらっているのに、こんなくだらない理由で授業をサボっちゃって……。

「はあゝ」

なんだか、彼女の信頼を裏切っているみたいで、自分に嫌悪感を抱いてしまった。

「はあゝ……」

もう一度、深いため息をついてしまう。

そういえば、最近、ため息をつく事が非常に多くなっている。もちろん、ため息の原因は、主に兄さん絡みだ。

だが、少なくとも学園では、兄さんはあまり関与していないので、
やっぱりこれは自分の責任なのかもしれない。

いや、責任じゃなくて、僕のワガママだな……。

やっぱり、ブルマを穿かなきゃいけないのかな……。

はあゝ。

保健室へと着く。

「失礼します」

ドアをそつと開け、一言入れてから、保健室へと入る。
入った瞬間、保健の相崎先生と目があつた。

「あら、“また”、貴方ね……。何？ 今度はどうしたの？」

相崎先生は呆れた顔を浮かべては、苦々しく言った。

「あゝ……えーと、また、体調が悪くなっちゃって……」

あはは、と苦笑いする僕。

相崎 真弓先生。

保健室の先生をしており、体育の時間をサボる際、お世話になっている先生だ。

「はあ、“また”……ねえ……」

軽い溜め息をついた後、先生は疑っているような眼差しを僕へ向けた。

……さすがに体育の時間を立て続けに五回も休むと、それはもう確実にバレてしまうだろう。

あう……。

「伊藤さんは授業を休みたいの？」

「はい、休みたいです」

「あら……、即答ね。それに偉く元気な声だし。……まあ、いいわ。右端のベッドが空いているから、そこ使って」

「あ、ありがとうございます」

僕はホッと、息をつく。

なんだかんだ言っても、授業に返さずに僕をいつも保健室で休ませてくれている先生に深く感謝した。

……もしかしたら、先生は僕が仮病で休んでいる事に気がついているかもしれない。

「アタシはちょっと用事があるから、職員室に戻るわ。授業が終わるまでには帰ってくるから、安静にして寝ていなさい。……わかった？」

最後に念を押すように言われる。

「わかってます」

と、まるで当たり前のように僕がそう言っていると、先生は苦笑して保健

室を出て行った。

先生が出て行った後、僕はベッドへと向かい、座った。

窓からは、眩しい日差しが入り込んでいて、とても寝れそうにない。

「はぁ……」

僕はかったるい嘆息をつきながら、カーテンを閉めようとした。しかし、運動場で男子が体育の授業を受けていた所を発見して、それに気をとられてしまう。

今日の男子体育の授業内容はサッカーのようだ。
今、2つのチームに分かれて試合を行っている。

……なかなかの接戦だ。

どちらも点は取れてなく、お互い同点のまま、後半戦へと移行する。
後半戦では、お互いのチームメンバーは総替えになっていた。

その中に、海斗がいた。

キックオフのホイッスルが鳴ると同時に、海斗のチームが先制ボールを味方に向けてパスした。

相手チームがボール目掛けて、突進してくる中、海斗のチームはパスを上手く使い、上手にかわしていく。

そして、その中で海斗にパスが渡った。

相手チーム二人が、ボールを貰った海斗に迫り来る。

味方はパスを要求しているが、その味方が相手選手にマークされていて、この状況ではパスしようにも出来ないだろう。

相手チームの二人は、もう海斗の目前まで迫っている。

危ない！

そう僕が思った瞬間、海斗が動き出した。

ボールを真上に上げて、相手二人を楽々と交わす。

交わした後、ドリブルしてゴールを目指していく。

次々と迫り来る相手を巧みにかわしながら、相手チームを翻弄していく。

……ボールの裁きがありえないくらい上手い。

自分の思い通り、自由にボールを動かしているように見える。

「海斗、すごい……っ」

いつの間にか、僕は手に汗を握る程、その試合を観戦するのに熱中していた。

……正確には試合ではなく“海斗”にだが。

そつえば、海斗って昔からスポーツだけは誰にも負けた事がなかったっけ……。

僕も体を動かす事は得意な方だ。

だけど、海斗にスポーツの勝負を何回挑んでも、一度も勝てなかったな。

多分、スポーツ、……体を動かす事に関しては本当に類希ないセンスの持ち主だ。

「まあ、……勉強は普通より下なんだけどね」

僕自身が言った言葉に、思わず苦笑してしまう。

海斗は最後の一人を抜き終わると、ゴールに向かって力いっぱいシュートを決めた。

まるで、風を切るように放たれたボールは、ゴールに向かって弧を描くように飛ぶ。

ゴールキーパーは海斗のシュートを受け止めようとボールに向かってジャンプするが、一步届かずに見事ゴールが決まった。

それと同時に、相手味方チームから、歓声が湧き始める。

「ナイス！ 椿」

「すげえよ！ どうやったら、あんな動きが出来るんだ！？」

海斗の周りに味方が集まり始める。

「あははっ、普通に蹴り上げたただけだって！」

笑いながら答える海斗に、「いや、お前の普通は異常なんだよ！」と、味方に突っ込みを入れられ、その場にいた男子全員が笑う。

「つーか、そんなに凄いのにして部活に入らないんだ？ お前なら、多分すぐにレギュラー入りだぜ？」

そい言つて、海斗の隣にいた男子生徒が海斗の頭をクシャクシャと掻き回す。

「いや、俺さ。部活とかあんまり興味ないんだよ」

「うわ、もったいねえっ！」

男子生徒は笑い上げて、更に海斗の頭をクシャクシャに掻き回した。

……本当にもったいない。

外から聞こえてくる会話を聞いて、僕もその男子生徒と同じ意見だった。

どうして、海斗はあんなに運動神経がいいのに、部活に入らないのだろうか？

中学の時もそうだったし、……海斗は時間に捕らわれる事が嫌なのかな？

「ッ！！」

歓声のほとぼりが冷め始めた直後、海斗が何か苦痛の声をあげて、地面にしゃがみこんだ。

「おい、大丈夫か？」

「ああ。……シュートした時にきつく蹴り上げたからかな。足を捻ったみたいだ」

「おいおい……、保健室に行った方がいいんじゃないか？ 俺、先生にちょっと事情を話してくるよ」

一人の男子生徒が、体育の中島先生に向かい、事情を話している。そして、話し終えたのか、海斗の所へと戻っていく。

「椿、先生から許可をもらってきたぞ」

「そうか。ありがとな、谷山」

谷山と呼ばれた生徒は海斗のお礼に対して、ニコッと笑う。

「気にすんな！　つか、きつかったら、一緒についていこうか？」

「いや、大丈夫。そこまで痛くないし、向こうで湿布でも貼っても
らえば、すぐに治るよ」

「そうか……。なら、気をつけてな！」

「ああ。それじゃあ、行ってくる」

海斗は、谷山君が「おうっ」と言つのをちゃんと聞き終えると、ゆ
っくり歩きながら、運動場から出て行った。

「ふう……………」

僕はカーテンから、離れた。

……海斗達のやりとりを見ていたために、さすがに見過ごす訳には
いかない。

「海斗、足捻ったんだよね……。……仕方ないか」

そつばやきながら、湿布と包帯を探していく。

勝手に保健室を調べた事がバレてしまったら、絶対に相崎先生に怒
られるだろうな。

……あの先生、怒ったら怖い、と生徒達の間でも噂になっているし
……。

「はあ……………」

この事がバレて、自分が怒られる所を想像して、ため息をつきなが
ら探していく。

「あ……。……これかな？」

ガラスケースの棚の上に包帯セットらしき物があるのを見つけ、そ
れを取る。

後は湿布だ。

……湿布は確か、冷蔵庫の中だっけ？

僕は棚から少し離れた場所にあった冷蔵庫へと歩いていく。
そして、冷蔵庫を開けて、中を調べてみた。

……案の定。

冷蔵庫の奥の方に、何個も重ねてあった湿布の入った箱があった。
その中から、一枚だけ取る。

これで一応の準備は整った。

……後は海斗が来たら、すぐにでも

コン、コン！

「失礼します！」

ノック音が二回聞こえた後、扉を開き、海斗が現れた。
本当にちょうど、いいタイミングだ。

「……あれ？ 蛭、お前もどこか悪いのか？」

海斗は話しかけながら、僕が座っている椅子の前側の席へと座りこむ。

僕は頷きながら、返事をする。

「う、うん。……ちょっと、体調を崩しちゃってね」

僕の答えに、海斗がじつくりと目を見つめてくる。
何故だか、海斗の顔はニヤニヤと笑っていた。

「……本当は、女子の体操服を着たくなかっただけじゃないのか？」

「う……」

思わず、顔をしかめてしまう。
あまりにも凶星だったために、言葉が出ない。

うう、……鋭い奴め。

「ほ、ほら！ そんな事は置いといて……、足捻ったんだよね？」

これ以上、この話を続けられると、海斗にもつとからかわれると思った僕は、すぐに海斗の怪我の話へと切り替えた。

「え？ あ、ああ。……なんで、知っているんだ？」

「えへへ、その窓から外を眺めていましたから」

「ちえ、蛍にドジった所を見られてしまったか」

海斗が子供みたいに少し拗ねた顔を見せたので、僕はつい笑ってしまっ
まう。

「ほら、足見せて。湿布貼ってあげるから」

「ああ」

海斗が長ズボンの裾を捲り上げる。

見たところ外傷はなく、腫れているところも特に見当たらない。
どうやら、本当にただ足を捻っただけのようだ。
捻挫や骨折じゃなかったので、ひとまず安心した。

「どこが痛いのか？」

「……かな」

海斗が指差した箇所になんか触れてみる。

「……？」

「……！」

触れた瞬間、海斗が顔を歪ませたので慌てて、手を離す。

「あつ、ごめん。……痛かった？」

「ああ……、少しな」

海斗の言葉を聞きながら、湿布のペーパーを剥がしていく。

「……ん。それじゃあ、湿布貼っていくから、じっとしててね」

「ああ、よろしくな」

湿布をゆっくりと慎重に痛む箇所へと貼っていく。

「っ……あー……!!」

「海斗、……痛む？」

「い、いや、凄く冷たくてさ。ちょっと、びっくりしただけ」

「そっか。ならよかった」

湿布を上手く貼り終えた後、張った箇所に取れないよう、包帯を丁寧に巻いていく。

「きつくない？」

「ああ、大丈夫だ」

海斗は、大丈夫だ、と言いながらも少し痛むのか、我慢している顔をしていた。

昔から、我慢強いというか強情というか……。

「なあ、蛭」

「ん？ 海斗、何？」

「最近さ、蛭、バイト始めたのか？」

「あ、うん。そうだけど……」

海斗の質問に、僕は顔をキョトンとして、答えた。

海斗の言うとおり、僕は五日前から、前に広告でアルバイトを募集していた喫茶店『ARMA』のウェイトレスとして、アルバイトをしていた。

「どんなバイトなんだ？」

海斗が興味津々な顔をして、聞いてくる。

……アルバイトに興味があるのかな？

「え〜と、一応ウェイトレスかな？ ほら！ 僕、今女の子だしね」

「へえ〜……。場所はどこで？」

「近所にさ、ARMAって喫茶店があるよね？　そこで働いているよ」

「そうなんだ」

「うん。……はい、包帯完了」

先と先の結びを終えて、手当てを終了する。

「ありがとな」

海斗は礼を言つて、ズボンの裾を下ろし、立ち上がる。

「どういたしまして。あ、……感謝しているなら、この礼は代金で支払ってもらいまゝす」

冗談めかしながら、僕は笑う。

「ばーか、そんなの絶対に払わないって」

海斗が素っ気のない声で言いながら、僕を呆れて見る。

「……ケチ」

僕がボソツとそう呟くと同時に、海斗がこちらを軽く睨んだので、これ以上は止めておく。

「はあゝ。それじゃあ、俺はもう行くよ」

そう言つと、海斗は扉に向かつて、のそのそと歩き始める。
だが、歩き方があまりに不十分に見えたために、海斗が戻るのを僕は止めに入つた。

「まだ手当てしたばかりだし、少し安静にしなよ」

僕も立ち上がり、海斗の腕を引っ張つて、足を止めさせる。

「これくらいなら、大丈夫だつて……！」

海斗は笑つた顔を見せる。

……しかし、その顔には明らかに痛み到我慢しているように見えた。

「保健室で少し休みなさい」

僕が少しきつい声を出して、海斗に言う。

握つた腕にギュッと、力を込めながら。

「大丈夫つて言つてるだろ？」

海斗は僕の言い方に少し不快に感じたのか、怒つた口調で言い返してくる。

「……大丈夫じゃないから。顔に明らかに我慢しているのが出てるよ」

負けじと僕も言い返す。

「我慢なんかしてない。本当に大丈夫だつて言つてるだろ……っ」

「我慢してる。それに……授業に戻ったところで見学しかできないよ?」

「それは……そうだけど……」

僕の言葉に理があつたために、海斗が口ごもりだす。

「だろ? だから、この時間はここにいなさい」

「……はあ、わかったよ」

海斗が降参して、扉へ向かおうとした足を引き返す。

それを見て、僕も海斗の腕を掴むのを止めて、手を離れた。

「やっぱり……、口じゃあ、蜚には敵わないな」

「……別にそんな事ないと思うけど」

「そんな事あるよ、……くっ……!」

再び、海斗が痛そうな顔を浮かべる。

無理に歩いたせいか、痛みが増してきたのかもしれない。

「ほら、手を貸すよ」

「……悪いな」

海斗の手を持ってやり、先導してゆっくりと手を引いてやる。
そのまま、ソファーへと手を引いて、海斗をソファーの上に座らせ

る。

怪我の箇所を見てみると、包帯がもう取れかかっていた。

「ホント、無理しすぎなんだよ」

「……悪い」

海斗は先程とは正反対で、今度はあっさりと謝っている。

「はあ……もう」

包帯を巻き直しながら、僕はため息をついた。

本当に調子狂うなあ……。……。

海斗って、いつもこうだから、この対応には困ってしまう。

海斗は、自分に非があると判ると、すぐにしょぼくしてしまうのだ。

「これでよしと……！」

巻き直しが終わると、僕もソファへと座った。

隣の海斗は、黙ったまま、自分の足を見つめていた。

なんだか、その姿を見るだけで痛々しく思える。

「いきなり落ち込むなよ。ほら、元気だしなよ！」

僕は海斗の肩を軽く揺さぶりながら、話しかける。

だが、海斗は聞いているのか聞いていないのか、わからないまま、顔は上の空だ。

ずっと、足ばかり見ている。

……仕方ない。

「ていつ！」

僕は海斗の額に手を近づけて、思いっきり力を込めたデコピンを喰らわした。

バチンツと、意気のいい音になる。

「っ~~~~！」

僕のデコピンは結構痛かったらしく、海斗は額を手で押さえながら、僕の方を見た。

「な、何するんだよ！」

「だって、返事がなかったし」

「返事をしないからって、いきなりデコピンかますなよ……！」はあ……、なんか蛭、壮士さんに似てきたな」

「いやいや……あんなアホな兄さんと一緒にしないでくれ」

僕の言葉に、あははっ、と笑う海斗。

……どうやら、デコピンのおかげか、すっかり元気になったようだ。

良かった、良かった！

「さて……蛭」

いつもの元気な顔に戻った海斗が、僕に満面な笑顔を見せる。

……不気味なくらいに。

「な、何？ 海斗」

僕がそう聞いた瞬間、海斗の口元がニタツと、嫌な笑みを浮かばせていた。

……ああ、あの嫌な予感がしてきた。

「デコピンの仕返しとして……とりあえず、脇こちよばし百秒な！」

「ちょ、待て！ 海斗、落ち着いて！」

「ふっふっふ……！」

海斗が嫌な笑い声を上げながら、僕に迫ってくる。

「ひい……っ、く、来るな……っ！」

僕は迫ってくる海斗から逃れるために、海斗を突き放すように後ろへ強く押す。

だが、今の僕は女の子。
押す瞬間に、海斗に両腕を掴まれて、そのまま、ソファーへと押し倒される。

「きゃあ……っ！」

ソファーへ、強く押し倒されて、声が出てしまう。
幸い、ソファーのクッションが利いていたために痛みはなかった。
海斗は僕の肩の傍に手について、僕の体に上乘りするような状態にいる。

「いってー……！」

足に負担を掛けてしまったのか、海斗が痛がる素振りを見せた。

「だ、大丈夫……？」

僕は心配そうに聞いてみた。

……って、自分が危うい中、海斗を心配する僕って一体……。

「あ、ああ……平気だ……、……あ……」

何故だか、海斗の言葉が途切れていく。
その目が大きく開かれ、眼孔が細くなり、頬に少し赤みが増してきている。

「……どうか……した？」

「いや、その……えーと……」

海斗の顔色を見ながら、不思議そうにする僕に対して、海斗は口ごもるように言う。

「ん？ 何……？」

「お前、……いや、俺が悪いんだけどさ。この体勢を見て、気づかない……のか？」

「へ……？」

僕と海斗のお互いの体勢を改めて、よく見てみる。

「……海斗は何を言っているんだ？
体勢って……」。

だから、僕は海斗に押し倒されて、僕の上には海斗が……。

「……あれ？」

「あ……えーと……」

僕も今のこの体勢、状況に気づき始める。

海斗の顔を見ると、頬の辺りが真っ赤に変わっていた。
そんな海斗の様子につられてしまい、僕も意識して恥ずかしくなってしまう。

「あ、その……！ いや、これは……一応男だし、別に問題は……
！ でも、体は女の子で……えと、えーと……！」

混乱して、自分でも何を言っているのかわからなくなる。
というか、すごく言葉があやふやだ。

あう……。

この状況って他人に見られたら、非常にまずくないか？
もし、先生に見られたりしたら、職員会議ものになるだろう。
早めのうちに離れておかないと……！

僕はすぐさま、海斗から離れようとする。

海斗も同じ考えだったのか、僕から離れようとした。
だが、足が不自由な状態なのでどう動けばいいのか迷った顔つきだった。

それは僕も同じだ。

下手に海斗の足に刺激を与えられない。

お互いの動きが噛み合わないまま、返って変に動く事で、さらに危ない体勢へと変わっていく。

「ちょっと……海斗！　なんで、そっちの足が寄ってくるの？」

「お前だって、どうして俺の腕にしがみつくんだよ。これじゃあ、離れられないだろ」

体勢は複雑化していた。

僕の足に海斗の足が絡み、お互いの顔がもう目前にある。

「ッ……あ……こ、こんなところ……見られたら、絶対に怪しまれる……よお……っ」

「ば、ばか！　そんな変な声を出すなよ」

「だ、だって……っ！　海斗の足が変なところに当たって……っ……！　か、海斗！　お願いだから、う、動かないで……っ！」

「そ、そんな事言われても、俺だって、この体勢は……っ！」

怪我した足が痛むのか、海斗が苦しそうな声で言う。

一方、僕は海斗の足に責められていた。
絡み合う足がくすぐったくて、海斗の腕を掴んだ力が強まってしま
う。

「はう……っ、か、海斗……っ」

「ちょ、そんなに腕を掴まれたら、力が出な……っ！」

海斗の腕がピクピクと震えている。

「っ……蜚！」

海斗が僕の名前を言った瞬間、海斗の腕がソファ一崩れ落ちる。
そして、支える部分を失った海斗の体は、真っ直ぐに僕へと落ちていく。

あまりに突然だったので、僕は目を瞑ってしまった。

「ん……」

何か暖かい感触が口元に触れた。
すごく柔らかな感触が唇を包み込んでいく。

……この感触は、一体？

目をゆっくり開けていくと、海斗の顔が目の前にあった。

「っ……！」

海斗は声にもならない声を出して、驚愕した表情で僕を見ていた。

唇が熱い。

少し動かすだけでとろけるような柔らかな感触が形を変えていく。
例えるなら、マシュマロみたいだ。

……なんだか、すごく、心地よい気分に浸ってしまっ

あ……これ？ これって？

柔らかい感触がだんだんと遠のいていく。

遠のいていくにつれて、それが何だったのかが、わかってしまった。

「あ……ええ……っ！ か、海斗？」

「……………」

僕の驚く声に黙ったまま、海斗は僕をじーっと、見つめていた。
頬は真っ赤に、唇は少し震わせている。

その仕草に、僕は思わず目を逸らしてしまった。
なんというか、今一瞬、海斗が子犬のように見えたのだ。
直視していたら、間違いなく心がおかしくなっていたと思う。

頬をつねってみる。

……痛い。

紛れもない、本物の痛みだ。

ああ……、神様。

これは一体、どういうおつもりなのですか？
どうして、こうハプニングが次から次へと巻き起こるのですか？

「あ……ああ……」

紅潮していた頬がさらに火照っていくのを感じる。

どうやら……。

どうやら、僕は……。

海斗とキスをしてしまったようです……。

「っ………!」

海斗から目を逸らしたまま、そっと両手で口元に触れてみる。

……唇には、まだ熱さとあの感触が残っていた。

くえくすとら　海斗の気持ち（前書き）

俺だって、まだ分からない。

だけど、なんでだ？

なんで蛍の事ばかり、思ってしまうんだ？

「はあ……」

「あれ？　海斗、どうしたの？　ため息なんてついて……」

「ッー！　……いや、気にすんな！」

「そ、そう……？（と、とりあえず、なんだか顔色が赤くなってるけど……）」

くえくすとら　海斗の気持ち

蛍の唇から、ゆっくりと離れていく。

見下ろすと、蛍の顔は真っ赤に変わっていた。

俺達、キスをしてしまったんだよね……？

「……かい……と……」

唇をわなわなと震わせて、蛍が俺の顔を見つめ返した。
その声に、いつもの雰囲気を感じられない。

……すごく色っぽい声だ。

赤く上気して染まった頬に少し涙ぐんだ目が、卑怯なくらい可愛く
見えてしまう。

それは普段とのギャップの差が、あまりにも激しかった。
とてもじゃないが、男の子だった蛍からは、想像もできない姿だ。

さき程、体勢を崩した際に、蛍の着ていたシャツのボタンが何個か
外れてしまい、ピンク色の下着が、シャツの間から垣間見える。
また、シャツにくっつきりと付いたシワが、余計に淫らさを演出して

いた。

「じ、ごめん……！」

足の痛みを無視して、すぐにソファから起き上がり、蛭に背中を向ける。

「その……。今、……俺達したのは……！」

「事故だよ……」

「え……？」

蛭の冷静な言葉に対して、俺は呆気のない声を出してしまう。

「事故だから。だから、……気にしないで」

淡々と言われたその言葉に、何故か胸が、チクリと痛んだ。

……どうしてだろう。

「気にしないで」と言われて悲しんでいるのか、俺は……？

「海斗、……聞いてる？」

自分でもわからない複雑な感情が頭の中で入り乱れる中、蛍の顔が目前まで迫り、目がぴったりと合ってしまう。

「な……っ！」

上目遣いをして、俺を見る蛍の姿に、胸の動悸が更に激しくなっていく。

なんで、俺……こんなに動揺しているんだ……っ！ 蛍は、男なのに……！ 男なんだぞ、蛍は……！！

「海斗……？」

蛍が不思議そうにして、俺の名前を呼ぶが、その呼びかけにどうし

ても反応する事ができない俺がいる。

頼むから、そんな目で見ないでくれ……と、そう言いたかったが、それを言えば蛍に確実に怪しまれてしまう。

キスをした直後だ。

そのせいで多分、俺は今、蛍に対して変な意識を持っているんだろう。

時間が経てば、この気持ちもすぐに冷めてくれるはずだ。

そうだ……。

きっと……そうに違いない……“はず”。

キンコーン・カーンコーン！

授業の終わりのチャイムが鳴る。

「あ、授業終わっちゃったね」

「あ、ああ……」

俺は蛍を見ながら、頷く。

まだ、意識しすぎているからだろうか。

…… 蛍から、視線を外す事ができない。

これでは早くも、さっきの自信が砂の城のようにあっけなく崩れ落ちそうだ。

一方、蛍はいつものダルそうな表情で、保健室の先生に提出しなきゃいけない保健室の診断書を書いていた。

そして、それを書き終わると先生の机の上に置く。

「……それじゃあ、僕は先に行くよ」

「ああ……」

ガラんと、扉が閉まるのを最後まで見届ける。

蛍は先に保健室から出て行った。

一人だけ、保健室にポツンと残っていた俺は、まだ動く事が出来なかった。

……熱い。

顔の赤らみが消えない。

蛍が出て行ってから、何故か保健室の雰囲気は急に寂しくなったよう気がした。

手を胸の位置に重ねてみる。

バクン、バクンッ、と心臓が脈打つように凄い速さで鼓動している。

この様子では、しばらく落ち着きそうにないな。

「くそ……、蛍は男なのに……」

愚痴をこぼしながら、顔を上にして天井を眺めた。

俺。

第6話 会長、副会長、僕（前書き）

さて、この6話で俺も蛭にキスするぞ！

作者様も読者様も、きっとそのような展開を望んでいるはずだ！！

うおっしやああああああー！！！！

やる気が出てきたあああーっ！！！！

「兄さん。何を思っているかはわかりませんが、この6話には甘いラブシーンは含まれていませんよ？」

「な、なにiiiiiiiiiiiiー！？」

「……本当です」

「……ぐはっ！」

「そんな吐血のふりをしなくても……。まあ、兄さん。残念でした」

「ふ……ふ……は……っ」

「……へ？ 兄さん？」

「ふ……ふふふっ！ あっはっはっはっは！ 蛍よ。いつか、いつかお前の唇に熱い口付けを交わしてやるからなあああああああっ！」

「……はあゝ（やっぱり、いくら話が進んでも成長しない人だな、兄さんは）」

第6話 会長、副会長、僕

キンコーン・カーンコーン……

授業のチャイムが鳴り、生徒達は席についていく。

六時間目は現代文だ。

僕は鞆から教科書を出して、机に置いた。

さりげなく、後ろを見してみる。

「……」

後ろの席に座っていた海斗が、無言で僕を見つめていた。
だが、僕と目があうとすぐに窓側に顔を逸らす。

「……はあ」

さっきから、ずっとこの調子だ。

……非常に辛い。

やっぱり、あの保健室での事を気にしているのだろうか？

なんだか、すごく気まずいんだけど……。

僕の方まで、変に意識してしまう。

先生の合図で授業開始の礼を終えた後も、海斗はずっと僕の方を見ていた。

その様子は、僕の席の前にある掲示板に掛けられた鏡から、はつきりと映っている。

「はい。では、次の所を伊藤さん。読んで」

「あつ、はい」

先生に本読みを当てられたので、席を立つ。
そして、指定した場所を読み始めた。

「……春の新緑は素晴らしい。未明、ふと目覚めると、窓が青々と染まっている。鳥達のさえずりが……」

本を読みながら、さっきの保健室の事を思い返す。

あまりにも衝撃的な出来事だったので、鮮やかに記憶に残っていた。

……海斗の体、すごく大きく感じた。

前までは僕とそんなに変わらなかったのに、今ではすごく大きく感じてしまう。

それに、あの時に重ねた唇の感触……。

って、駄目だ、駄目だっ！

なんて、アブノーマルな事を想像しているんだ、僕は！

い、今の事は早く忘れなきゃ……っ！

「はい、そこまで。ありがとう、伊藤さん」

先生に止められて、僕は席に座る。

はあ……、なんだかなあ。

僕の方まで、気が参りそうになってしまう。

今日は海斗と一緒に下校しない方がよさそうだ。

とりあえず、距離を置かなきゃ……。

「はあ……」

かつたるい嘆息を終えた後、窓から見える大空を見た。

快晴。輝かしいくらいに晴れていて、眩しい。

こんな良い天気なのに。

本当に……やれやれだ。

神様の……馬鹿。

放課後、僕は兄さんに呼ばれて生徒会室へと向かった。

何か話す事があるって言っていたけど……。

……話って何だろう？

兄さんの事だから、ろくな事じゃないだろう。
まあ、海斗と顔を合わせずにすむので助かったといえそうな
だ
が……。

生徒会室の前に立ち、ドアを軽くノックする。
数回ノックした後、女性の声が聞こえた。

「どうぞ。入りください」

「あつ、はい」

僕は優しそうな女性の声に誘われて、ドアを開けた。
少し軋んだ音をたてながら、ドアを抜ける。
生徒会室には、長机が縦横に二つずつ並べられている。
それぞれの役員の席だろう、椅子の数は九席あった。

隅っこには、過去の学校のファイルが本棚にびっしり収まっていた。その隣には、幾つもの優勝トロフィーが飾られている。

長机の一番奥の椅子に座っていた兄さんが、僕を待ちわびていたかのように喜んでこちらを見ていた。

隣には、さっきの声の主である女性が立っている。

「やっときたか、蛭！」

椅子から立ち上がった兄さんがこちらへと向かってきた。

「……兄さん、何をするつもりですか？」

兄さんは僕の肩を深く掴んで、顔をこちらへと近づけてくる。

「何って……。も・ち・ろ・ん！ キスだ！」

はあ……。……。

兄さんの言葉には、毎度毎度、ため息しか出ない。

ああ……。なんて、うっとおしい人なんだ。

会ってすぐに弟にキスを迫るなんて、もうアホを通り越している。

「顔を近づけないでよ、兄さん！」

僕は兄さんの頬を思いつきり、押し出す。

だが、兄さんは僕の反攻に粘り強く耐えながら、その顔を寄せてくる。

「ぐ、ぐううう……む、無駄だぞ！ 蛍いゝ！」

「や、やめてください！ そんなくだらない事しませんよ！」

「ぐうう……そんな事を言うな、マイ・シスター！」

「し、しつこい！ あなたはそれでも実の兄ですか！」

「ぐぐぐうゝ！ 男にはなあ！ 一度、やらねばならぬ大義があるのだ……！」

「ア、アホ兄さんっ！ そんな大儀、普通の男にはないよ！」

「ふっふっふ！ 俺は選ばれた男なのさ……！」

「く、くだらない事に選ばれすぎですっ！」

「まあ、くだらないかはさておき……だ！ 蛍のファーストキスを是非、この俺に……！」

「ちょ……っ！ さておかないですよ！（そ、それにファーストキス

はもう奪われましたよっ！」

「ふふふっ！！　愛があれば、後はどうともなるのさっ！！！」

「その笑い方、気味悪いよっ！　それに兄妹の愛は結ばれませんっ！！！」

と、悠長な事を言っている間も、兄さんの顔がだんだんと迫ってきている。

駄目だ！　このままでは、海斗の時と同じ目に……！

「……そこまですよ、会長」

あと数センチで唇が奪われる所を、その言葉に兄さんの動きが止まる。

……助かったの？

「ええ〜！　早瀬君！　もう少しでいいところなのよっ」

「会長、妹さんが嫌がっていますよ。いい加減、その辺にしといたらどうです？」

「ちえ〜」と愚痴りながらも、兄さんはおとなしくなり、さつき座っていた席へと戻っていった。

まさか……、あの兄さんが素直に人の言う事を聞くなんて……！
今まで、一緒に時を過ごしてきたのにこんな事を見るのは初めてだ。
他人の言葉……、ましてや同年、それ以下の年の人の言う事を聞くなんて……！

あ、ありえないっ！ 本来なら、絶対にありえない！

「あの、どうかしましたか？」

僕が啞然に取られていたのを気にしたのか、女性は尋ねてきた。

「あ、いえ……。ありがとうございます」

助けてくれたお礼を言いながらも、僕は彼女をまじまじと見ていた。
和服の似合いそうな清楚正しい雰囲気漂わしている。

見つめていると吸い込まれてしまいそうな黒い瞳に、腰まで掛かった黒い髪。

整った顔つきで凜としたその体は、大和撫子を連想させてしまう。

見とれてしまう程、綺麗な女性だった。

「自己紹介がまだでしたね。私は早瀬湊>はやせみなとく、2年よ。
よろしく、伊藤さん」

「よ、よろしく願いしますっ」

綺麗なお辞儀をされて、僕も慌ててお辞儀を返した。

「そうそう、早瀬君は生徒会の副会長だ」

兄さんが話に割って入ってくる。

なるほど、早瀬さんは生徒会の副会長だったのか。

「会長、伊藤さんに本題を……」

「ああ、そうだった。すまん、すまん！」

早瀬さんの言葉にあっさりと頷く兄さん。

……す、すごい。あの兄さんを尻に敷いている

それだけで、何だか早瀬さんを称えてしまいそうになりそうだ。
この人が我が家にいたら、僕もすごく助かるだろうな……。

「さて、本題だったな。なあ、蛭……」

兄さんがニツコリと笑顔を見せながら、僕を見て話し出す。
こういう時の兄さんの笑顔は本当によくない事が起こりそうで、不
気味そのものだ。

用心しながら、僕は聞いた。

「な、なに？ 兄さん」

「……生徒会に入らないか？」

「……へっ？」

何を言い出すかと思えば、生徒会への勧誘だった。

風見学園では、生徒会の役員を決める際に現生徒会長が、優秀だと思った生徒を生徒会役員に入れる事ができるという、そういう制度が組み込まれている。

てつきり、またとんでもないお願いをされるのかと思っていたのだが……。

何だ、そんな事だったのか。

……でも、なんで僕なのだろうか？

他にいくらも、生徒会役員となる逸材がいるというのに。

「どうだ？ 生徒会に入ってくれるか？」

「えっと、兄さん。ごめん、それは無理だよ。僕、バイトがあるし……」

「いや、たまに顔を出すだけでいいんだ。だから、一応籍だけでも入れてくれないか？」

「ん……」

顎に手を当てながら、早瀬さんを見る。

早瀬さんも、「お願いします」と顔に表していた。

ふう、困ったな……。――

正直、いきなり生徒会って言われても何をすればいいのか、僕にはまったく分かりもしないのだ。

兄さんは、顔を出すだけでもいいって言っているけど、それって生徒会に属している意味は果たしてあるのだろうか？

「うん……」

少し曇った声を上げて、真剣に考える。
どうしよう……。

「兄さん、他の人は誘わないの？」

「蛭じゃなきゃ、駄目なんだよ。頼む！」

兄さんが真剣な眼差しで僕に頼んでいる。
はあ……。ここまで言われると、断ろうにも断れない……。

「本当にたまにしか顔出せないよ？ それでもいいの？」

兄さんが何度も首を上下に振る。

「……なら、仕方ないから……入る」

「蛭、ありがとう……。っ……！」

兄さんが、また席から立ち上がり、僕の体を抱きしめる。

「に、兄さん?!」

「蛍、本当にありがと！俺、マジ嬉しいよ！！」

「…………もう」

隣では、「良かったですね、会長」と早瀬さんが笑いながら、そう言っていた。

ふう…………。

まあ、これだけ大喜びされたら、悪い気もしない。

それに兄さんの役にも立てた事だし、これで良かったかな。

…………ムニユツ、ムニユツ

「蛍の胸、ホントにやゝらか〜いっ！」

「つて…………~~~~ツ！！ド、ドサクサに紛れて、胸を触るなあ
ああーっ！！！」

…………つう！

や、やっぱり、前言撤回！

このアホ兄さんの役に立てて、良かったと思った自分が愚かでしたっ！

「もーっ！ 兄さんの大アホ~~~~ッ！」

話が片付いた後、僕は兄さんと一緒に下校する事となった。さつきから、カラスの鳴き声が何度も聞こえてくる。

あの話の後、兄さんのせいで無駄に時間が掛かってしまい、もう外は夕暮れに変わっていた。

「それにしても、綺麗な人だったね。あの人」

「ああ、早瀬君か！！ 去年の学園祭のミスコンで一位だったからなあ、彼女」

「へ、へえ……そうなんだ」

ミスコンって……。

学園祭ではそんなくだらない事もしているのか。

「蛭も今年のミスコンに参加してみたら、どうだい!？」

「却下します」

即答で僕は返事を返す。

だが、兄さんは即答で返された言葉に凹むまず、それどころか僕に脅しを掛けてきた。

「生徒会に入った以上、会長特権の“会長命令”を蛭に下すから、強制だぞ！」

「そ、そんな横暴な事、聞いていませんよっ」

「ふっふっふ！ 言わなかったただけだ！！ ちなみに命令に従わない場合は、バイトの校則を即直すからな！」

「そんなの卑怯ですっ！」

「だったら、参加決定だなあー！！ 蛭のミスコンでの衣装に期待だ！！ わっほおおおおーっ！！」

……っう。

こんな事になるなら、生徒会に入るべきじゃなかった。
それに衣装なんか着ませんよ。着たくありません。
はあ。

僕達は帰り道に近くのスーパーへと立ち寄った。
家の冷蔵庫に入っている材料はかなり少なく、今晚のご飯に持つかどうか怪しかったためだ。

「兄さん、今日何が食べたいですか？」

僕は兄さんに希望を聞いた。

「うゝむ、そうだな」

隣でのんきそうな顔になって、兄さんは考え込んだ。
最近では、ほとんど僕が三食全て作っている。

というか、兄さんにそうさせられているのだ……。

兄さん曰く、「女になった蛭の作った料理は三倍旨い」らしい……。

はあ。

まったく、意味がわかりません。

「ハンバーグがいいな、ハンバーグ！」

ハンバーグか。

そういえば、最近作っていなかったな。

「わかったよ。それじゃあ、今日はハンバーグね」

「いやっほおおおおおー！！　ハンバーグだああああー！！」

兄さんが片腕を上には伸ばして、ガッツポーズをとってみせる。

に、兄さん……

僕まで恥ずかしいから、やめてください。

……あう。

「蛍のハンバーグ、ハンバーグ！！」

大はしゃぎしている兄さんは放っておいて、僕はミンチ肉をカゴに入れた。

後、他に必要なものをカゴに入れて、レジへと向かい買い終えた。

買い物を終えて、スーパーから出る頃には日は沈んでいた。

「すっかり暗くなっちゃったね」

「そうだなあ〜！」

「ごめんね、買い物持たせちゃって」

兄さんの手にはさっきスーパーで買った食材、それが入ったビニール袋が持たれていた。

「軽いし、別に大丈夫だからな。気にするな！」

兄さんは首を振りながら、笑って言った。

「それに、まあ兄貴だし。当然の事だよ」

本当に……、当たり前のように言ってみせる兄さんの昔の記憶が重なる。

“僕は君のお兄ちゃんなんだから。当たり前だよ”

昔、兄さんがよく口癖ていた言葉だ。

この人は、今でこそ“変態”の印象が強いので忘れていたが、本来の兄さんは人一倍優しい人だ。

自分の兄だからと言って、大げさに褒めているつもりじゃない。昔から、本当に心優しい性格なのだ。

僕は幼い頃、近くの総合病院で入院していた。

原因は事故。海斗と路上でボール遊びをしていた時に、ボールが転がってそれを僕が取りに行つて、偶然車に牽かれてしまったのだ。

持っていたボールがクッション代わりとなり、奇跡的にも大きな怪我はなかったが、念には念を医師に入院を勧められた。

入院中は本当に暇だった。

周りには知らないおじさんとおばさんだらけ。

僕と同年の子なんて、誰一人いなかったから、本当につまらなかった。

だけど、お昼の3時になるとそんな事も思わなくなった。

兄さんがお見舞いに来て、色んなおもしろい話を聞かせてくれるからだ。

だが、どうしてこんなにも良くしてくれるのだろうか？

本当はこんな話ばかりさせて、兄さんはつまらないのだろうか？

まだ少し幼かった僕はそう思いながら、兄さんに聞いてみた。

「お兄ちゃんは……どうして僕にこんなに優しくしてくれるの？」

『どうしてって言われてもなあ』

「ねえ、どうして？ どうしてなの？」

『だって、放っておけないだろ？ 俺は君のお兄ちゃんなんだから。当たり前だよ』

あの時、兄さんが僕に言ってくれた言葉は凄く嬉しかったのか、今でも一言一句声まで憶えている。

「あの頃の兄さんは、本当に優しくかったな」

過去を思い返しながら、僕はボソツと呟いた。

それが兄さんの耳に聞こえていたらしく、反論してくる。

「……おいおい！ あの頃だけじゃなくて、今もだろ？」

「さあ、どうでしょうね。兄さん」

からかうような口調で兄さんに答える。

あの頃と比べたら、確におかしくなった部分はある。
というか、本当は直して欲しいんだけどね……。

まあ、それでも、根っこの部分は全然変わっていない。

あの頃のままだ。

「ねえ、兄さん」

「な、なんだよお」

兄さんは顔をむくれながら、そっぽを向いていた。

その姿がまた、面白おかしい。

本当に困った兄さんだ。

でも……。

「今日、兄さんの好物のハンバーグも作ってあげようか？ ちょう

ど、材料買って置いたし」

「え、マジで！？ 蛭、最高だぞぉー！ さすが、マイ・シスター
！ー！ 愛してるぅぅぅぅー！」

「兄さん……別に愛してくれなくてもいいです」

「はっはっはっはっはー！」

「はぁー、またすぐに調子に乗るんだから」

「調子に乗るのが、この壮士さんだからな！！ ……それにしても、
蛭の胸やわらかかったなぁーっ！ あの時の感触がまだ、手に残っ
ているぞー！！」

「ばっ、ばっ！ 兄さん、不潔ですよっ」

「いやぁー！ あのマシユマロみたいな感触がまた、たまらんぞお
おおー！」

「……あう。やっぱり、ハンバーグ作らないでおこうかな」

「蛭様、すみませんでした！ 俺を許してくださいー！！」

「……ぷっ、あははっ！ 冗談だよ、兄さん」

「なぁーっ！！ くそぉー！ 図られたー！！」

「えへへっ。兄さんのばーか」

……それでも、僕の兄さん。
僕だけの兄さんだから。
だから、どんな事しても全て許せるんだろう。

だって、僕達は兄弟だから。

「おっ！ 流れ星だ！！」

空を眺めていた兄さんがいきなりそう叫んで、僕もすぐに空を見上げる。

「あ、ホントだっ」

ギリギリだったが、星が消えかけの瞬間を捉えることができた。

「おっと、願い事をしないと！」

兄さんが目を瞑って、何か小声で呟やき始めた。
一応、僕も願い事を祈っておいた方がいいだろう。
僕は目を瞑り、手を合わせてこう呟いた。

これから先も僕達兄弟が仲良くできますように……

願い終えた後、僕達はまた歩き出した。

「蛭は何を願ったんだ？」

兄さんが興味津々で聞いてくる。

「えっ……と、そういう兄さんはどうなんですか？」

「はっはっは！ 俺か」

自分を指差して、笑いながら兄さんは答えた。

まあ、どうせろくな事じゃないと思うんだが……。

「そうだな。俺は……」

その時、笑っているはずの兄さんの顔がどこか真剣な眼差しに見えてしまった。

僕を見ているわけでもなく、どこか遠くを見て言った。

「俺は、大好きな人に幸せになって欲しい……かな」

「兄……さん？」

その顔色は一瞬、切ない表情に見えてしまった。
あまりにも欲しいものが手に入りそうで、入らない。
そんな苦い表情を兄さんは浮かべていた。

だが、次に瞬きをした瞬間にはもう消えていた。

「ところでだ！！ 蛍は何を願ったんだ？」

「え、あ……うん。僕はね……」

自分が願った事を口にしながら、さつき浮かべた兄さんの表情を思い出す。

兄さんはなんであんな表情をしたのだろう。

それにさつきの兄さんの願い事。

あれじゃあ、まるで。

叶わない恋をしているように聞こえるよ……？

第7話 『温かさ』（前書き）

皆さん、こんにちは！

伊藤 瑠です。

第7話からこのコーナーを兄さんから剥奪……じゃなかった。

えーと、譲り受けました

とりあえず、今後は私が司会です！

今後ともよろしくお願いしますね。

「それでは、第7話をどうぞお楽しみください！」

第7話 『温かさ』

家に着くと、時間はもう6時前だった。

随分と遅い帰宅になってしまった。

兄さんは疲れ果てたようにぐったりと、リビングのソファに座り込む。

「ううー……」

ソファにもたれこんで、兄さんの眠たそうな声を聞き、僕は苦笑をしながら台所へと立った。

「今から、夕飯作るんだから寝ちゃだめですよ。兄さん、わかっています?」

「わ、わかってるぞー。なんたって、今日はハンバーグだから……な……ん、う……」

返事をするものの、兄さんの声はいつもみたく元気がない。

「あはは」

苦笑しながら、ミンチをこねていく。

はしゃぎすぎもあるとは思いが、生徒会の仕事の疲れだろう。

なんというか……、本当によく頑張る人だ。

任された仕事は、責任を持ってこなす。

兄さんのそういう所は常に感心してしまう。

「兄さん、起きてますか？」

「むう……お、起きて……いるぞ……お……ん……」

兄さんの声はだんだんと小さくなってきている。

多分、もう半分寝ているな……。

「やれやれ……」

出来上がったミンチをフライパンに乗せて、焼いていく。

それがある程度、焦げ目が付いたところで裏返しにして、もう片面を焼いていく。

うん、……いい匂いだ。

我ながら、今日のハンバーグは中々の出来かもしれない。

「兄さん、もうすぐ御飯出来ますよ？　ちゃんと、起きていますか？」

「……すう……すう……」

「……寝ちゃいましたか」

兄さんの寝息を聞いて、つい、笑みを漏らしてしまう。

ハンバーグをひっくり返すと、丁度良い焦げ目が裏面にも付いていた。

ハンバーグの内、一つをまな板に乗せて、中身を切ると、中もよい具合にしっかり焼けている。

お皿にハンバーグを乗せて、同時進行で作っていたデミグラスソースを上にかける。

ふわっ、と香ばしい匂いがキッチンを漂った。

「出来たっ」

美味しそうに出来上がったハンバーグを、テーブルへ持っていく。もちろん、フォークとナイフも忘れずに、セットで。

「兄さん、出来ましたよ」

「う……う……ん……」

「ほら、起きてください！ 兄さん」

兄さんの肩を軽く揺さぶるが、なかなか起きてくれない。

困ったなあ……。

兄さん、一度熟睡してしまったら、なかなか起きてくれないなあ。ホント、どうしようか。

「んう………け……い」

「ん？」

不意に僕の名前を、兄さんは寝言で呟く。

「……ブラコン兄さん」

この場合はシスコンだろうか？
いや、そんな事はどうでもいい。
まったく、この人は。

夢の中でも、僕の事でいっぱいなのだろうか？
……はあ、困ったものだ。

「……け……い……」

またも、寝言で僕の名前を呟く兄さん。

「何？ 兄さん」

そんな寝言に僕は笑いながら返した。
ちゃんとした会話にならない事は承知しているが、こっぴつのは結構やってみると面白い。

遊び気分で返した返事に、早速、兄さんの口が動きだす。

「……も……」

「も……？」

「……萌……え……」

「……こら。勝手に萌えるな」

すかさず、兄さんの額をつついてやる。
困った事に兄さんは現在、夢の中で僕に萌えているらしい。
というか、せめて夢の中くらい僕を開放してやってください。
お願いしますから、はい。

「すうー……んう……」

寢息に反応して、改めて兄さんの顔をまじまじと見てみる。
すごく幸せそうな顔で寝ている。
はあ……。

こんな顔で寝られると、起こすにも起こせないじゃないか。

「……アホ兄さん」

「ん……ん……すうー……んう……」

僕の呟きに反応したかのように、僕の肩に兄さんの頭がもたれかかる。

「……もう」

右肩に兄さんの頭がもたれ、少し重さを感じた。

男だった時は、重いかあまり思わなかったけど、やはり体は女の子。

体が華奢になったなあ、と自分でも実感してしまう。

自分の左手を出して見つめながら、今日の出来事を振り返ってみた。

海人とのキス。

あれは本当にハプニング続きだった。

正直、海人にはすぐ申し訳ないと思っている。

僕が知る限り、海人も特定の彼女を今まで作っていないはずだ。

もしかしたら、海人にとっても、多分ファーストキスだったのかも
しれない。

今日、後でもう一度ちゃんと謝っておかなきゃ……。

次に生徒会での兄さんの勧誘。

……うん、これはもうどうでもいいな。

それにしても、早瀬さん。

あの人、本当に綺麗だったなあ。

兄さんが尻に敷かれていた事も驚きだ。

何か、兄さんの弱みでも握っているのかな？

……今度、聞いてみよう。

「ん……」

ちょうど、一日の振り返りに区切りがついた所で、兄さんが目を開
け、僕の肩から頭を起こす。

「け……い？」

「あ、起きた？ 兄さん、もう御飯できているよ」

「ん……あ、あ」

まだ完全に眠気から覚めていないのか、兄さんは目を擦って返事をする。

「ほら、早くしないとせつかくのハンバーグも冷めちゃうよ」

兄さんの腕を掴んで、一緒に立ち上がる。

「ハンバーグ……？」

立ち上がった後、兄さんはテーブルの方を向く。
テーブルの上に置かれたハンバーグを見て、眠そうな目が一気に覚
醒したかのように、大きく開けていく。

「ハンバーグ、キタアアアアアアアーツ！！」

いきなり大声で叫びだした事に反応が遅れて、僕は耳を塞げずにそ
の大ボリユームの叫びをすぐ隣で聞いてしまった。

「ツ~~~~~！！」

耳の中でキーン、と遠くで鳴ったような音が何度も聞こえる。

「ふっはっはっはっは！ 壮士、完全復活！」

「に、兄さん！ き、近所迷惑だつて何度言つたらわかるんですか！」

「ああ、蛭！ すまん、すまん！ でも、少し寝たらすつきりしたぞ」

先ほどまで、大人しく寝ていたのに今は打って変わって、豪快な笑い声でリビングを響かせている。

ああ……、なんだか急に頭痛が……。

「はあ……」

溜息をつきながら、先にテーブルへと移動する。
席に着くと、後に続いて兄さんも椅子に座る。

「いただきまーす！」

「……いただきます」

ボソッと呟くように言う僕とは対照的に、元氣有り余るくらいの声で言う兄さん。

ああ、急に兄さんの事がうっとおしく思えてきた……。

「……さっきまで、あんなにテンションが低かったのに……馬鹿兄さん」

聞こえないようにボソボソと愚痴を垂らす。

「ん、何か言ったか？ 蛭」

「別に何も言っていないせんよ、はあ」

再び、溜息をついた後、ナイフとフォークを持ち、ハンバーグを口に入れていく。

美味しい、美味しいんだけど……。

少し冷えて温くなったからか、味の美味しさが軽減しているような気がする。

「……冷えたから、あんまりだね」

「そうか？ 俺は美味しいと思うけどな！」

「僕はもっと早くに起きて、出来立てのハンバーグを食べて欲しかったです」

「ごめん、ごめん！……でもさ、蚩」

「……何ですか？」

兄さんが手の動きを止める。

そして、笑いながらだが、どこか真剣な眼差しで僕を見る。

「ハンバーグってさ。こう……なんというか、熱すぎると口が火傷しそうです。逆に冷たすぎると、美味しくなくなる。それは人で例えても同じでさ。熱すぎる奴は人気を帯びるけど、冷たそうな人はやっぱり係わりにくいだろ？」

「まあ、……それはそうですね」

「だから、俺はその間である“温い”がいいと思うんだ。熱すぎず、

冷たすぎず……ちょうど良い温かさで満たす……ってな！」

「あ……」

意外な言葉に僕は啞然としてしまう。

熱すぎず、冷たすぎず……、自分は『温い』がいい。

何故だろう……？

そう言った兄さんの言葉に何故だか、心が温かくなるのを感じた。

「ん？ 蛭、どうした？」

「な、なんでもないです！ ただ、兄さんがあまりにも真面目な事を言ったので……」

「そうか？ 俺は常に真面目だが？」

ニコツ、と笑いかける兄さんに僕は動揺してしまう。

「ま、まさか……！！」と言って、驚愕の顔を浮かべ、兄さんが顔を近づけてくる。

「蛭よ、兄さんに惚れたか！？」

「違いますよ、そんな事ありあえませんか」

「ぐはっ！ 即答とは……っ！ さ、さすがだ……マイシスター、
もといフラグ・クラッシャー、蛭」

「勝手に変な称号をつけないでください！ とうかまず、フラグ・
クラッシャーって何ですか？」

「だが、だがな！！ 俺にはまだ最終兵器があるのだ！！」

「……そこ、スルーですか。それに最終兵器って……、なんだか怪
しげで嫌な感じがするから使わないでください」

「今こそ、最終兵器の出番だ！！」

「ああ、僕の言うことは完全に無視なんですネ。はあ」

嘆息をつきながら、ハンバーグを口に入れる。

……なんとも、温い。

絶対に出来立てのハンバーグの方が美味しいと思うのに……。
だが、兄さんの言葉では、きつとこの温さがいいのだろう。
さっきの言葉が頭に過る。

熱すぎず、冷たすぎず……ちょうど良い温かさで満たす……

「ねえ、兄さん」

「おっ！　なんだ！！　ま、まさか……！　俺の最終兵器を受けてくれるのか！？」

「……違いますよ」

「ん？　なら、なんだ？」と疑問を表情に浮かばせる兄さん。

僕はこれを言おうか迷いながらも、ゆっくりと口を開けた。

「ハンバーグ……だけどさ」

「ん？　ああ！　ハンバーグがどうかしたのか？」

「ちょうど良い“温かさ”……だね」

僕の言葉に兄さんは一瞬目を丸くしたが、すぐに笑顔を見せた。

「……だろ！」

「まあ……ちょっとだけね」

兄さんは、うんうんと頷きながら、手の動きを再開して、ハンバーグを口に運んでいく。

「やっぱ、蛸の料理、美味いよ」

「ん、……ありがとう」

すごく美味しそうに食べている兄さんを見て、満足する。

僕もナイフとフォークを動かして、ハンバーグを食べていった。

それからその後、お互い会話もなく黙々とハンバーグ食べていったが、どこか温かい雰囲気につつまれているような……そんな感じがした。

「ふう」

つい、気の抜けた息を吐いてしまう。

それにつられてか、ピタッ、と蛇口の先から雫が床に落ちた。浴槽から出る蒸気を眺めながら、僕は笑みを浮かべた。

「気持ちいいー！」

タオルを体に巻いたまま、浴槽にゆつくりと肩まで浸かる。やっぱり気持ちがいい。

この時間で一日の疲れがとれると言っても、過言ではない。

「はう……、いい湯加減」

両手でお湯をすくい、それを顔にかける。

パシャパシャッ、と水が弾く音が浴室を満たす。

お風呂に入っている時が一番幸せだ。

だって、この時間帯のみ、兄さんに何もされないんだよ？

あの変態妄想の兄さんの魔の手から、一時でも逃げられると思うと、これ程幸せな事はありません。

いや、本当に。

それくらい、僕にとってはお風呂の時間は重要なのだ。

「はう……もう、最高だよ」

両手を頬に当てて、嬉しい声を上げて喜ぶ。
ああ、この時間が一生続けばいいのに。

でも、さすがに一生だと上せてしまっよね……。

「惜しいな〜……はあ〜」

天井を眺めながら、浮かばれない溜め息をつく。

……その時だった。

「お風呂、お風呂……っ」と

溜め息を吐き終えたと同時に、浴室のドアの向こう越しで兄さんの
声が聞こえてきた。

「……は？」

つい、声を上げてしまう。

なんだか、とてつもなく嫌な予感がする。

モザイクミラーで飾られた浴室の扉を見つめる。
そこには、服を脱いでいる兄さんの姿がぼやけて映っていた。

「ちょ、待っ　！」

その言葉の続きを口に出す前に、ガラッ、とドアの開く音がする。
同時にドアの先から、腰にタオル一枚巻いただけの兄さんが……。

「あ、あれ？　蛭、入っていたのか！？」

少しびつくりしたような声色で僕へと話しかける。

僕は体に巻いていたタオルを手で押さえながら、兄さんを軽く睨む。

「に、兄さん……」

「あ、あははは……！　いや、その……とりあえず、すまん！」

僕の睨んだ視線を逸らしながら、兄さんは頭を掻きながら謝罪した。
兄さんも故意でやったわけではないのか、顔を真っ赤にさせて同様
していた。

そんな兄さんの顔を見ていると、なんだか怒る気も失せてしまう。

あれ……？

兄さんの目をよく見てみると、視線がある一点に集中している。

僕はその視線を辿っていき、そして兄さんがどこを見ているのかを
分かり、思わず赤面してしまった。

「に、兄さんっ！」

「な、なんだ？ 蚩」

「……さ、さつきから……僕の胸ばかり、その……見すぎです！」

「あ……っ、いや、すまんっ！」

「っ……も、もうっ！ しっかりしてくださいよ！ 兄弟なんですからね、僕達は！」

「あ、ああ……っ」

「とりあえず、出て行ってもらえますか？」

「そ、そうだなっ！ ごめんな！」

兄さんはそう言って、浴槽から出ようとドアへ手を掛ける。

「……あれ？」

兄さんが呆気のない声を上げる。

何度もドアを引いたり、押したりしているが、ドアが開く気配はない。

兄さんの顔つきが険しく変わっていく。

「どうか……したんですか？」

僕がそう聞くと、兄さんが額に冷や汗を垂らしながら、笑い顔を見せる。

「ドアがな、……開かないんだ！」

「……へ？」

「いや、だからさ……。ドアが　！」

「に、二回も同じ事を言わないでください。それよりも、ドアが開かないってどういう事ですか！」

僕の苛立った声が浴室を響かせる。

兄さんは何かを思いついたのか、手を打つ。

額から出る汗の量が、更に増している中、兄さんが口を開く。

「あ……。多分、俺が浴室に入る前に出した体重計が遮っているのかもしれない……。かも」

「……ああ、やっぱり。兄さんのせいなんですネ」

「そ、そうなる……。よな！　あ、あははは……。はは……」

げんなりした顔を浮かべて、僕は兄さんを睨んだ。

たじろぎながらも、兄さんは笑顔を崩さず、なんとか保っている。

「あははっ、すまん！」

すまん、じゃありませんよ。

はあ……。。

まあ、幸いにも海人が、保健室の件についての話で九時に家に来てくれるから、それまで二人で待っていれば助かるのだが。

……あれ？　……二人で……？

「……っ！」

思わず舌を嚙んだような声を上げてしまう。

「ん、舌でも切ったのか？ 大丈夫か？ 蚩」

兄さんが心配そうに伺うが、そんな事を気にしている場合ではなかった。

海人が家に来るのは九時。

僕が入る前の時間が八時だとして、それから十分くらい経ったとして、後五十分。

その五十分間、兄さんと二人きりでこの狭い浴室の中を一緒にいなければならぬ。

お互い、体にタオル一枚巻いた程度。

さすがに兄弟だと、変な事にはならないとは思っただが……。

でも、これは……もしかしたら、すごく不味い状況じゃないのだろうか？

第7話 『温かさ』（後書き）

久しぶりの更新となります。。。

読者の皆様。

長々、待たせてすみませんでしたw！

この「僕、女になりました」はモバゲーでも連載しております。

そちらの方では、多少改良しておりますので、モバゲーをしている方はそちらも目を通して頂けると嬉しいです^^

次回の更新は少し遅くなるかもしれませんが。

ほんと、すみません……orz

第8話 記憶の断片（前書き）

さて、八話になりましたね。

皆さんいつも、ご愛読ありがとうございます

そういえば、作者さんが今回の話に伏線をかなり入れた……とか言っていましたけど。

うん、どうせ僕には関係ないよね？

……そうだね？

……って、読者の皆様もそう言うってくださいよ！

「あうう……なんだか落ち込むなあ……。そ、それでは……第八話をどうぞ。……はあ」

第8話 記憶の断片

「ああ、蛍！ そんなところばかりきつくしないでくれ！」

「兄さん、何を言っているんですか？ こうしないと、気持ち良くなりませんよ？」

「くっ！ で、でも……そこは……痛いっ！」

「気持ちいいでしょ……？ 兄さんがして欲しいって言ったんだから、気持ちいいはずだよ？」

「う……、あ……ああ！ も、もう！ 許してくれ……蛍……！」

「兄さん、別に我慢しなくてもいいよ？ ほら、ね？」

「はあ……くはっ！！ くう……蛍……っ！」

「兄さん。ほら、もっと気持ち良くなって……」

「く、ああああ ツー！」

……あれから、既に三十分が経過した。

風呂場に閉じ込められた僕と兄さんは、気まずい雰囲気を出しながらも、一緒にお風呂に浸かっていた。

もちろん、僕は女の子なので、背中合わせでだけど。

以前、海人が来る様子はなく、本当に困った状況となってしまったのだ。

お互い、ずっと背中合わせで浴槽の中に入っていた時、兄さんがある提案を持ち出した。

まあ、その提案とはあまりに簡単で……そして、すごく当たり前の事なのだが。

「……蛍、まあ待っている時間ももたないしさ、洗い合いっこしないか？」

「は、はあ！？」

まったく、このおバカはまたなんてセクハラ発言をしたんだ……。もともと、反省の色がなかっただけに余計にこの発言は僕を苛立たせた。

「兄さん、殴られたいですか？」

兄さんの目の前で、僕は拳を強く握り締めてはつきりと言う。

表情はニツコリと、だが拳にはオーラを宿して。

さて、兄さんはどう返事を答えるのかな？

……って、考えなくてももう分かりきっている事だけど。

「蜚、殴つても構わん！！ だから、俺と洗い合いっこしようぜ！
」

ベシッ！

兄さんが言葉を吐いた瞬間、僕はすかさず、兄さんの腹に拳を入れ込んだ。

「ぐはあああ！」

丸裸の状態で見事に腹に入ってくれたので、それはもう……。

兄さんは僕のパンチを食らった直後、風呂場の壁にぐったりとたれかかった。

「大袈裟ですよ」

「いや、十分……効きました……」

「……はあ」

本当にリアクションだけでは無駄に高いな、この人は。

その分、学習能力に欠けているから、本当にまったく成長する兆しが見えない。

はあ……、出来の悪い兄さんを持つと苦労します、はい。

「さ、さて、蛍。約束だ！俺と洗い合いつこしようぜ！！」

「兄さん。しつこいです！嫌なものは嫌ですよ」

「ええ〜！俺、蛍のその長い髪を洗いたいのに……」

「我まま言っても駄目です」

「なら、その背中を洗い流してあげるぞ！！」

「だから、駄目なものは駄目ですって……」

「よし！！仕方ない、そのすべすべの肌を俺が堪能しながら洗ってやる！！」

「……ついに本性が出ましたね。この畜生め」

駄々をこねる兄さんを見て、呆れながら嘆息をつく。

兄弟なのに、そこまで弟の（今は妹……だけど）体に触りたいとは、何たる最低な兄だ。

はあ〜、我慢だ。僕よ、ここは我慢しなければならない。

兄さんの口車に乗せられず、なおかつ、この時間を切りぬける方法を考えなきゃ……。

そつだ、早く方法を
！

「蛍の胸、やっぱり大きいよお〜！！」

兄さんがニヤけた顔で笑いながら、僕の胸をツンツンと触ってくる。
……駄目だ。

どうしても、兄さんに殺意が湧いてくる。

というか、もう殺っちゃっていいですか？

ねえ、このお馬鹿丸出しの兄を殺っちゃっていいですか？

「け
」

「うるさい、お馬鹿、この変態!!」

ベシッ！ バシッ！

右と左のパンチによる二段コンボのツーヒット。

「ぶああああーっ！」

パンチはいずれも腹に入り、兄さんは苦しそうな声を上げて腹を抱えながら、浴槽に撃沈する。

「ぐ……はっ、蜚……そんな、せめてもう一度胸を……」

ああ、まだ言うか。このお馬鹿は……。

「兄さんはとことんやらなきゃわからないみたいだね？」

「…………へっ？」

僕はそれまで、溜めて、溜めて、溜めこんでいた怒りをここで全て解放した。

そして、先に浴槽から出ると、続いて兄さんの体を浴槽から引っ張り出す。

兄さんはキョトンとした表情で、これから起こる事をまったく予想できていないようだ。

…………ふふふ、可哀そうに。

久しぶりにここまで僕を怒らせたんだ。たっぱり、お礼を返さなきゃ…………ね。

「兄さん…………、それでは…………おしおきの時間ですよ？」

僕は笑顔で兄さんに言い放った。

兄さんは体をビクツとさせて、僕を怖がるように見上げる。

「蚩…………あ、あれ？　いつもと雰囲気が違うよ？　なんか、後ろから物凄くドス黒いオーラが見えるような…………？」

ほう…………なんだ、良く分かっているみたいじゃないか、兄さん。

僕は浴室のドアの取っ手に掛けられたウォッシュタオルを手に取り、兄さんの背中の前に立つ。

「さて、兄さん。…………ご希望通り、洗い合いつこをしましょうか？」
そう言って、僕は水とボディークリームを付けずに兄さんの背中を硬

いままのウォッシュタオルで洗おうとする。

「け、蛭？ いきなり、どうして……」

「僕は兄さんの期待に応えただけだよ」

「……ありがとう」

兄さんはその事に気付かず、なんだか少し顔を赤くして恥ずかしそうな様子を見せた。

……何で顔を赤くしているんだ、この人は……。

気になったものの、やはり怒りの度合が強かったために、それをさらっと流す。

僕は硬いウォッシュタオルは使つと、兄さんの背中を洗っていった。

「あ、あれ？ なんだか、少し痛いぞ……？」

「気のせいですよ、兄さん」

僕は兄さんの違和感を無視して、力を更に強めていく。

「ぐ！ や、やっぱり痛い！ け、蛭！ 少しタンマー！」

「兄さん、何を言っているんですか？ これは兄さんがして欲しかった事なんですよ？」

「ち、違つ……、俺はこんな事……」

弁解も空しく、僕は兄さんのその言葉を聞かずに力一杯背中を洗っていく。

兄さんは苦痛を混じらせた声を出して、止めて欲しがっているがそんな事関係ない。

「兄さん、どこか……痒い所はありませんか？」

「ぐ……っ！」

あまりに痛いのか、兄さんの顔が歪む。

それを見てしまった僕は、更に興奮してしまった。

……兄さんって、そんな顔ができるんだ。

うむ、これは新しい発見だ。

「兄さんの痛みに耐えるその顔、……すごく可愛いよ」

「け、蛭……！」

……やばい。

兄さんの切なさそうな表情を見て、僕すごく喜んでいる。

なんだか、兄さんを虐める事の深みにはまってきたのかもしれない。

「兄さん、止めてほしい？」

「くっ……蛭、やめてくれ……。頼む……。俺が悪かったから……」

兄さんが必死そうな顔で僕に許し乞う。

確かにここまでで、もう充分仕返しは出来ていた。

むしろ、僕の方がやりすぎと言っても過言ではない。

だが、兄さんのその弱々しい姿があまりに僕のツボに入ってしまった、
どうしてもまだ続きがしたくなるのだ。
そして、僕はその欲望に……勝てなかった。

「仕方ないね……。兄さんがそう言うなら」

僕の言葉に兄さんが安堵の笑みを浮かべる。
だが、次の一言で兄さんは絶望に陥るだろう。
僕は兄さんと同じ目線までしゃがみ、満面の笑顔で言った。

「“次”は頭を洗ってあげるよ」

「……え、……っ……ぎ？」

ほら、やっぱり……。

兄さんは予想通り、絶望の顔で僕を見上げた。
僕はそれを見て、ニヤリと口元を歪ませてしまう。
ああ、その顔……兄さんのその顔が、すぐたまらない。
だが、やはり仕返しはここまでで止めておかなくては。
さすがにこれ以上は兄さんが可哀そうだ。

「さて、兄さん。続きを……」

言葉で脅えさせようとするも、内心は落ち着かせていた。
僕はシャンプーの入ったボトルを取り出して、それを右手につけて
いく。

残った左手でシャワーの水を出して、準備を整えると兄さんに振り
返り、背中後ろに立つ。

「……いい加減……しろ……」

頭を洗ってあげようとした瞬間、兄さんが僕に聞こえないよう何かを呟いた。

その声色にはどことなく、怒りが混じっているように思える。そして、何より先ほどまでとは……兄さんの雰囲気が違う。

「兄さん？　ほら、次、頭洗うよ」

これはまずい、そう思った僕はさっきまでの声色を捨てて、だるそうないつもの声で兄さんに話しかけた。
だが、それが間違いだった。

その言葉で兄さんは立ち上がり、僕の方へと向く。

「兄……さん……？」

「ふざけるのもいい加減にしろ……！」

「あ………」

呆気のない声が僕の口から、出てしまう。

兄さんは怒っていた。

それもすごく怖い顔をして……。

「あ……ごめん。……やりすぎた………」

ふざけた冗談が言える状況ではなかった。

その場で僕はすぐに謝った。

だが、見ると兄さんの怒りはまったく覚める様子がない。

むしろ、中途半端に謝った事に対して、余計に苛立ちが募ったように見える。

「これは……“おしおき”が必要だな」

さっき、僕が兄さんに行った言葉をそのまま僕へと返してくる。
言葉を聞いた瞬間、背筋がゾツとした。

だって、兄さんの顔は僕と違って、笑って言っていなかったから。
その不気味さ故に、僕は顔を恐怖にひきつかせてしまう。

「い……嫌……」

立場が逆となり、震えた声で怯える僕に兄さんが手をこちらに向け
て伸ばしてくる。

それは悪魔が誘うかのように、手招きしているみたいにも見えた。

「さあ、蚩……おしおきの時間だ」

「あ……やめて……嫌……っ！」

僕は兄さんの手を振り払い、その目を閉じた。

……数秒の時間が流れる。

ポチャン、ポチャンと水が垂れ落ちる音がする。
今の僕は兄さんが怖くて目が開けられない以上、音に頼るしかないか

った。

暗闇の中で、ずっと音に集中していく。

「蛍……」

兄さんの呼び声が聞こえる。

「蛍、目を開けろ」

嫌だよ、だって何をされるかわからないから。

怖いから……。

……そう言えば、前にも何度かこんな事があった。

何かで失敗をして、ヘマをする毎に“いつもパパは『私』を殴っていたから”。

「止めて」、「許して」、そう謝っても殴り続けていたから。誰も助けてくれない、誰も『私』を見てくれない。

だって……。

『私』は愛されていなかったんだもの。

「蜚、目を開ける!!」

「あ……」

兄さんの言葉でハッと目が覚める。

そこには怒っているはずの兄さんの顔は無かった。

「……大丈夫か？」

心配そうに尋ねる兄さんに僕はコクンと頷く。

「ふう……とりあえず、ごめんな」

「え……？」

「ほら、俺が“おしおき”って言ったやつ。あれ全部、冗談だよ」

「冗談……？」

あの表情が……全部、冗談？

「いや、本当にごめん。でも、まさかそこまで怯えるとは思ってなかったし……。悪かった。でもお前、あれは痛かったぞー！ 背中
の辺りなんて凄く赤くなっただな」

兄さんが話も続けるも、僕はそれを聞く余裕がなかった。

あれが……全部、嘘だった。

その事に僕の心は安心と、同時に深い悲しみに埋め尽くされた。

「あ……う……」

涙が、零れてしまう。

こんな事で泣くなんて、普段なら絶対にありえないのに。それでも、ポロポロと涙が溢れ出てくる。

多分、それは怖くて、悲しくて、すごく嫌だったから。

「蚩……？ え、ちょっと……泣いているのか？」

僕が涙を流している事に気付いたのか、兄さんが驚きながら心配する。

「……ごめん、何でもないよ」

「何でもないわけないだろ。……俺のせいだ、……本当にごめん」

兄さんが申し訳なさそうに誠意のこもった謝罪で謝る。

「いいよ。もう……」

ようやく涙が止まったので、僕は下がったままの兄さんの頭を上げるように笑顔を見せて言う。

正直、泣いた後だから目が腫れて、笑っても不格好だろう。

兄さんはそんな僕の顔を見て、僕を……抱きしめた。

「に……兄さん……っ！」

あまりの突然の行動に悲しみを吹き飛び、驚かされてしまう。しかし、それは一瞬の間だった。

兄さんの顔を見上げると、その顔は罪悪に襲われているような、そんな表情を浮かべていた。

「ごめん……蛍……。俺は傍に……ずっと蛍の傍にいるから」

「兄さん……？」

それはかなり引つかかる言葉だった。

兄さんはまるで言い聞かせるように、私に囁いてくる。

でも、その言葉の意味が僕にはわからない。

ただ、“ずっと傍にいる”という言葉が深く感じられたのは確かだった。

「いいよ、兄さん。……もう、大丈夫だから」

そう言うも、兄さんはずっと言葉を止めなかった。

何度も、何度も……。

まるで、自分自身に呪いめいた呪文を聞かせるように。

この十分後。

海人が僕達の家に着き、インターホンに出ない事から異変を感じたのか、すぐに家の中へと入り、風呂場に挟まった体重計を退けて僕達を開放してくれた。

第8話 記憶の断片（後書き）

さて、またもや久し振りの更新となります。

作者の桃月です。

今回で八話目となりました。

お風呂です。お風呂の話ですw

というか、蛍の黒っぽいりがはつきりと出ていますねwwはいwww

では、本題に入りましょうか^^； 最初から入れw

今回、伏線をかなり詰め込みました。

勘が良い方はその勘を頼りに、物語を膨らませているでしょう 失礼だろ

特に今回の物語で出たキーワードが“蛍の恐怖心”と“壮士の異常なまでの妹思い”ですね。

まだ、どう進むかは明かせませんが、物語を読むにつれていずれわかるでしょう。

それと、文章ですが深夜遅くまで打ったので下手に誤った箇所が多数あると思います。

後ほど、睡眠をとって起き次第、訂正をちゃんとしますのであしからずw

それでは、皆さん！！

おやすみなさい
www
www
www
www
www
ばかやろ
う

ノ
シ

第9話 蛭（前書き）

知ってしまった後悔よりも

知ってしまった幸せを『私』は感じたよ？

「という訳で、少し物語が深刻になってきましたね。読者の皆さん、お久しぶりです。蛭です！ さてさて……、前回のお話からなると……今回は僕の謎が明らかに……？ さて、どうなる事でしょうか！？ それでは、第9話をどうぞ」

第9話 蚩

チウンチウンと小鳥のさえずりが聞こえてくる。
ああ、もう朝か……。

「ん……んう……」

ベッドから起き上がった僕は腕を伸ばして、小さな欠伸をする。
近くの鏡を見ると、目の下にうつすらとだが隈が出ていた。
それに昨夜、泣いた事もあってかすごく酷い顔だった。
気楽に眠れる方がおかしいに決まっている。

「ふう……」

すぐ近くにある小さな机に飾られた写真に写るお母さんを見つめる。
どうして……、どうして昨夜、あんな変な映像が頭に流れ込んだんだらう。

まったくもって、意味不明だ。

あんなの……僕は知らないのに。

僕の記憶の中には入っていないのに……。
それに『私』って……一体……。

海斗が助けに来てくれた後、パジャマに着替え終えた僕は海斗を招き入れた。

「ありがと、海斗。助かったよ」

あのまま、風呂場に閉じ込められていたら、きっと逆上せ死んでいただろう。

海斗に軽くお礼を言つと、海斗は少しむくれた表情で僕に話してくる。

「なあ、なんであんな状況になっていたんだ？ その、壮士さんと二人きりでお風呂なんか……」

「あ、ああ、あれね……。たまたま、僕が入っている時に兄さんが間違つて入ってきたんだよ」

突然の海斗の質問に動揺してしまう僕。

……うう、なんとも情けない。

「……そうか」

渋々と納得したようだが、どうやらまだ疑った目を向けてくる。

一体何だと言うんだ……。こっちはそんな所じゃないというのに……。

風呂上りで体が熱かったために、自室に海斗を招き入れる前にリビングで汲んできた牛乳を飲んでいく。
ふう、美味しいなあ。

やっぱり、風呂上りは牛乳と相場が決まっているよ、うん。

「壮士さんは……もう寝たのか？」

牛乳を一気に飲み干しながら、頭を縦に振る。

「っ……ぶはあゝ！ うん、今日はもう疲れたって……」

豪快な飲みっぷりを海斗に見せながら、答える。

そう、兄さんは風呂を出た後、すぐに自室へと戻っていった。いつもなら、この後しつこく僕に構ってくるのだが……。何故かはわからないが、直感的にそれがまるで、僕の事を避けているように見えた。

「そっか……」

そう言っただけで、海斗は僕の目をまっすぐ見てきた。そして、体をゆっくりと僕の方へ近づけさせてくる。

「ど、どうしたの？」

「なあ、お前……あのさ。保健室の事……その件で俺の事をここに呼んだんだよな？」

「あ、……うん」

「それで……何？」

ふてくされた感じで言う海斗の言葉に、少しムツとするがおさえる。

「……とりあえず、ごめん」。

「え？ な、なんだよ……、いきなり」

海斗が意外な顔で僕を見つめてくる。

僕は頭を少し下げて、続きを言っていく。

「いや、今日……その事があって、僕が海斗の事避けていたから……。だから、ごめん」

「……………」

「本当に済まなかったって思っているよ。……ごめん」

「……………」

海斗からの返事がない。

気になりゆっくりと顔を上げてみると、黙ったまま海斗がため息を吐いていた姿が目映った。

「はあ……………」

なんだか少し残念そうな顔で、小さなため息をまた吐いた。

「か、海斗……………」

一体全体、どうしたって言うんだろう。

というか、まずどうしてそんなに残念そうにしているんだ、海斗は。

……逆にこっちがため息をつきたい気分になってしまうよ。

せっかく、ちゃんと面と向き合って謝ったというのに……。

はあ……。ほら、ため息をついてしまった。

……心の中でだけど。

「はあ……やっぱり……いくら蛭が女になったとはいえ、……男同士じゃ……だめだな……」

「ん？　今、何か言った？」

小声でぼそぼそと呟く海斗の言葉が聞こえなかったために、聞き返す。

「いや、別になんでも……」

そう答える海斗の姿を見て、思わず鳥肌が立ってしまった。

赤くした顔を僕から背ける海斗を気色悪いと思った僕は異端だろうか？

いや、まあ、大事な親友にこう言うのはなんだが、……いつもの男らしさがまるつきり感じられない。

何、この弱弱しくてなよなよしている海斗は。

……一体、全体本当にどうしたっていうんだよ。

まさか、変な食べ物でも食べておかしくなったんじゃないだろうな。

……それはないか、うん。

「さて……っと」

海斗が立ち上がり、僕の部屋から出て行くとする。

「もう帰るの？」

「ああ、用件はこれだけだろ？ 明日は休みだけど、俺ちょっと予定入っただけな」

「そっか……。うん、わかった」

「それじゃあ……」

そう言って、海斗は僕の部屋から出て行く。
僕も海斗の後を追って、玄関まで見送った。

それが昨日の出来事。

あまりの眠たさに昨日あった事の大きさを忘れかけてしまいが、それはいけない。

流石に兄弟ギクシャクしたままで生活するのは、気まずいだろう。

僕はベッドから降りて、パジャマから着替え始める。

着るのは、兄さんに買ってもらった服だ。

かなり裾の短い青のショートパンツとノースリーブと……。

明らかに今の子供っぽい容姿の僕には、とてもじゃないが似合いそうではないと思うが……。

まあ、仕方ない、……今日はこれで兄さんのご機嫌をとろう。

自分で言うのもなんだけど……僕、我ながら健気な少年に育ったな……。

「兄さん！起きていますか？」

着替え終わった後、僕は兄さんの部屋へと向かっていく。

休みの日の兄さんはほとんどの場合、朝遅くまで寝ているのだ。

そのために、いつも僕が起こしに行く事になっている。

トントンと、軽いノックを入れて確認する。

いつもなら、僕の掛け声とこのノックで目を覚ましてくれるのだが、どうやら……返事が返ってこないところを見ると、まだ寝ていらっしやるようだ。

「ふう……。兄さん、入りますよ？」

僕は無許可で兄さんの部屋へと侵入した。

兄さんの部屋の中に入るのは随分久しぶりに思える。

兄さんは僕の部屋に入ってきているのに、……なんだかおかしい気

分だ。

ベッドでは兄さんが、すやすやと眠っていた。

「……おい、兄さん。朝だよ？ 起きてよ、もう九時回っているよ？」

「ん……すう……すう……」

……くそ、なかなか起きてくれないな。

それに結構、綺麗な寝顔で寝てやがるし。

なんだか……、これじゃあ起こすのがもったいないような気がしてきた。

僕は兄さんの寝顔に見惚れながら、その頬をつんつんとつついてやる。

兄さんの肌は思ったよりも、プニプニとしていて……柔らかい。

「むう……、こやつの肌。すごく柔らかいじゃないか」

と、馬鹿な事を言いながらも兄さんの顔で遊んでいく僕。

昨日のお風呂の兄さんのあの顔も良かったけど、でもこの兄さんの無邪気そうな寝顔の方が可愛い。

って……、何を考えているんですか、僕は。

「はあ……。馬鹿だ、僕」

そう呟いて、兄さんの頬をつつくのを止める。

そうして、部屋の辺りを見回しながら、調べていく。

本棚には色々な小説や難しい本まで置かれていて、僕が読めそうな本はない。

更に、意外……というかありえないのだが、兄さんの本棚の奥底まで調べても、エロ本が出てこない。

本当にこれは驚愕すべき事だ。

あの兄さんが……いつでも思春期真っ盛りの兄さんが、エロ本の一つや二つ、本棚に入れていないなんて……。

いやはや、もう昨日の出来事がどうでもよくなってきたくらいだ。こればかりは、僕も深く感動してしまった。

次に僕は兄さんの勉強机の椅子に座りながら、机を探索していく。何か、他に面白い事はないだろうか？

そう思いながら、僕の動く手と好奇心は止まらなかった。むしろ、増すばかりだった。

「ん？ なんだろう……。鍵が掛かっている？」

机のある引き出しを開こうとするが、そこには鍵が掛かっている開けない状態でいた。

力任せに引っ張って見せるが……やはり開かない。

どこかに鍵がないか、探してみる。

すると、机のシートに鍵らしき物を発見して、僕はそれを手に取った。

多分だが……、間違いない。

これがこの机の鍵だろう。

この引き出しの中に、何があるのか……。

駄目だ……心がワクワクしてきた。

何か、見られてはいけない物とかが入っているのかもしれない。というか、この中にエロ本が入っている可能性だってある。

でも……、本当にこの引き出しを開けてしまっているのかな？

唐突に僕は疑問に思った。

もしかしたら、兄さんにとって……すごく大事な物がこの引き出しの中に入っているのかもしれない。

ああ……、どうしよう……。

……ええい！ この際、見たとしても知らぬ振りをして入れば、なんとかなるだろう。

「それでは……兄さん、すみません」

一言、寝ている兄さんに断りを入れる。

そして、僕は兄さんを起こすことを当に忘れて引き出しに鍵を入れて開けていった。

引き出しの中には、一枚の写真と一冊の日記帳があった。

僕は期待を胸に、写真を手にする。

どうせ、兄さんの初恋の相手の写真だろうと思いつつ……。

「あれ？ これって……」

でも、それは兄さんにとって、初恋の相手でもなければ友達との写真でもない。

映っているのは……僕。

それも女の子の姿の僕を、そのまま子供にしまったような写真だった。

髪の毛は今よりも短くて、ショートカットだが……これは明らかに僕本人。

写真の裏を見ると、紛れもなく『蛭、六歳』と書かれている。

「なに……これ……」

唇をブルブルと震わせながら、そう呟いてしまう。

昨日、不意に風呂場で見てしまったあの映像が頭に浮かんた。

『私』という幼い女の子の姿をした、もう一人の僕を……。

その子はお父さんから、酷く虐待を受けていて……すごく可哀想で……。

でも、それは僕じゃない……。

僕であるはずがない……。

ありえない。

だって、僕は……男で……。

それに僕が六歳の時の記憶だって、ちゃんと

……あるのに、……あるはずなのに……！

どうして……、どうして僕は思い出せないんだ……？

何がどうなっているんだ……。

僕は本当に『伊藤 蛍』なのか……？

それとも、写真に映るこの女の子が本当の『伊藤 蛍』なのか……？

駄目だ、頭が混乱してきた。

それに、激しいくらいの頭痛がする。

「僕は……、僕は……一体……？」

そう、答えを求めている者のように独り言を言うと、もう一つ、引き出しの中から取り出された日記帳の存在に気づく。

そうだ、もしかしたら……真実はこの日記帳に書かれているかもしれない。

日記帳を開いてみると、有難い事に兄さんはこういう事に几帳面なのか、日記の初めには目次欄が記入されていた。

具体的に書かれているところを探し当て、その目次欄に書かれた最後の題名に僕は目を疑ってしまった。

蛍が“男の子に変わってしまった”日……。

僕はそれを見て、驚きながらも目次欄に書かれたページを開いた。ページを開いてみると、そこにはより詳しく詳細が書かれていた。

今日、僕の従兄妹の蛍ちゃんが……僕のパパが作った薬を飲んで男の子になってしまった。

蛍ちゃんは、蛍ちゃんのお父さんに酷い事をされていて……いつも傷だらけで……。

それを見て、いつも悲しんでいた僕に蛍ちゃんはいつも笑顔だった。

「私は大丈夫だよ、お兄ちゃん」

そう言われて……余計、悲しくなった。

僕は蚩ちゃんに何も出来ないのに。
それでも、蚩ちゃんはいつも……いつも僕に心配ないよと、その声を掛けてくれる。

守ってあげたい。

守りたかったのに……。

ある日、蚩ちゃんはお父さんからあまりに酷い暴力を受けて入院してしまった。

全身痣だらけで……お見舞いに行った時、蚩ちゃんはずっと眠っていた。

すごく、悲しかった。

蚩ちゃんのお父さんが許せなかった。

僕はパパに言った。

蚩ちゃんを助けてって……。

でも、パパは無理だ……って。

パパにはどうする事も出来ない。

そう、僕に言った。

それでも、僕は諦めなかった。

蚩ちゃんは僕が一番好きな女の子だから。

蛍ちゃんが入院して目覚めた日、僕は急いで蛍ちゃんの入院する病院にお父さんに行った。

でも……蛍ちゃんと会った際に言われた言葉が「だれなの？ お兄ちゃん」だった。

すごく悲しかった。

その場で……泣きそうになった。

病院の先生は僕とパパに言った。

蛍ちゃんは『記憶喪失』っていう病気にかかってしまったって……。

だから、僕の事を全部忘れていたんだって……。

僕とパパが先生の話聞いていた時だった。

蛍ちゃんが間違えて、パパのあの薬を飲んでしまった。

それを全部飲んでしまい、蛍ちゃんは男の子になってしまった。

病院の先生もパパもびっくりしていた。

でも僕が一番びっくりしていた。

それでも、僕は蛍ちゃんのそばにいた。

男の子に変わっても、蛭ちゃんは蛭ちゃんだから……。

蛭ちゃんのお父さんが蛭ちゃんを『育児放棄』っていう事で、蛭ちゃんのお父さんの弟のパパに『親権』っていうのを譲った。それは、蛭ちゃんが男の子になって一ヶ月くらいのことだった。これであの意地悪なお父さんからいじめられずに蛭ちゃんは僕とパパと三人で暮らせる。

本当に嬉しい。

蛭ちゃんが男の子のままでも、僕は好きだよ。

ずっとそばにいるよ、僕だけは蛭ちゃんの正義の味方だから。

日記はそこで止まっていた。

だが、そこからの出来事は大体、予想できた。

この後、兄さんやお父さんは僕のために精一杯尽くしてくれたのだろう。

僕が女の子に戻るきっかけとなったあのジュース……薬も、きっとお父さんが必死になって開発したはずだ……。

そう思うと、なんだか胸が熱くなった。

僕は……いや、“私”は……。

私は……『伊藤 蛍』

でも、私は女の子で……それで兄さんとは兄妹じゃない。

兄さんは従兄妹の壮士お兄ちゃん。

それで……、私の本当のお父さんは……。

お風呂場で流れたあの映像は私の昔の記憶。

残酷なあの日常を救ってくれたのは、兄さんと今のお父さん。

その事にすごく感謝する。

でも……、分からない事が一つ。

「お母さんは……」

そう、私のお母さんについての事が一切、そこには書かれていなかった。

私のお母さんは……？

私のお母さんって、あの写真に写るお母さんは……果たして、私の本当のお母さんなのだろうか？

思い出そうとするが、あの辛く悲しい日々よりも前の事は思い出す事が出来ない。

これも、兄さんの日記に書いている『記憶喪失』のせいなのだろうか。

兄さんの方を見ると、すやすやとまだぐっすりと寝ていた。

私は、兄さんに近づき……そして、その顔を見る。

「私……思い出したよ、兄さん……」

兄さんの顔をじっと見つめる。

この人はずっと私を見守ってくれた。

それも、すごく小さい時の頃から、今まで。

本当の兄妹でもないのに……まるで、本当の兄妹のように接してくれた。

記憶を取り戻した今だから、兄さんの過度のスキンシップの裏返しに宿るその想いが痛いほど、伝わってくる。

「ねえ、兄さん……。私、昔の辛い記憶を思い出して、悲しいけど……でも、それ以上に嬉しいんだよ？」

兄さんの顔へだんだんと近づいていく。

今だから……今、思い出す事が出来たから、だから、こんなにも想いが溢れてしまう。

「兄さん……今まで、ありがと。事あることに結構、酷い事ばかり言ったよね。……ごめんね？ 兄さん……」

「ん……んん……」

兄さんは幸せそうに、寝顔で応える。

そのだらしない返事に、クスツとつい笑ってしまう。

その愛しい顔を見て、私は 唇を重ねた。

「大好きだよ、兄さん」

第9話 蛭（後書き）

—、（）やあ、皆様。

眠いです、朝方の更新となります。

桃月です。

皆様の要望につき、早めに更新をしました。

というか、更新した日の読者様の数がかなり多くて舞い上がっていますw

—、（）本当にありがとうございます！

さて、今回の話ですが、もちろんこれで終わったわけではありません。

まだまだ回収しなきゃいけない矛盾点や伏線、それに蛭、壮士、海斗の関係もまだはつきりしていませんので；；

ですが、これだけははつきり言っておかなければなりません。

蛭、ついに記憶を取り戻し、一皮向けてデレ期に突入しましたww
ww

黄金期キタ

（。。。）

!!!!!!

本当に申し訳ないw！

というか、展開に無理があったから、伏線回収が多くなってしまった 自業自得だw

もう少し後にした方がいいと思っていたが、だが後悔はしていない
おい

さて、ここから私も書きやすくなると思います。

なんたって、蛭がデレるのでwww まてw

さてさて、だんだんと作者自身も楽しくなってます。

『僕なり』、今後ともご愛読よろしくお願いします！

あと、メーデーさん、いつも感想ありがとうございますw笑
その感想にいつも励まされて、ここまで頑張ってきましたw！

これからも、感想をどうか、どうかああああwww 結局それかw

では、皆様

次の話でまた会いましょう

！
ゞ（＊。　　＾＊）ノ　　see you next time！

第10話 恋心（前書き）

今、考えると……。

あの時間はすごく楽しかった。

私があそこまで真剣なるの……多分、初めてかもしれない。

だから、どうか……。

この気持ちが報われる事を……。

「さて、まだまだ続きますよ。少し乙女チックなシリアス恋愛パート。はたして、どうなるのか、否や？ では、第10話をご覧くださいあれ！」

第10話 恋心

唇を重ねた後、私は日記と写真を兄さんの机の引出しに戻して鍵を閉めた。

そして、鍵を元通りの場所に戻す。

勝手に知ってしまった以上、兄さんからは自分から言うつもりだ。

記憶を取り戻した事も、兄さんの事をどう想っているのかも。

「ん……んん、……あんぱん……」

兄さんはまだ寝言を言いながら、寝てらっしゃる。

本当に朝が弱いというか、低血圧というか……。

見ているこっちが耐えられないくらい、情けなく思えてしまう。

……まあそれは、寝言を言う兄さんの姿が可愛いらしいので許すでしょう。

私は今度こそ、兄さんを眠りから起こそうと兄さんの体に乗るかかった。

「ほら、兄さん！ 起きてください、朝ですよ。もう、学校遅刻しちゃいますよ！」

まあ本当は休日で、学校はお休みなのだが、これくらいの嘘は言うておくべきだろう。

兄さんは私の大声に耳を塞いで、「後少し……、五分でいいから……もう少しだけ……」と子供のようにせがんでいる。

本当にもう、困ったお兄ちゃんだ。

あの日記に書いていた、たくましい兄さんは何処に行ったのだから……。

クスクスと笑いながら、兄さんの頬を少し強くつねってやる。そうすると、兄さんが眉をしかめて痛そうな顔をした。

「む……むむ……」

「ほら、兄さん。もういい加減に起きてよ。朝だよ」

「……蛍？」

兄さんは一度目を開けて私の顔を見ると、またすぐに目を瞑った。

「今日学校ないだろ……。もう少し寝かせてくれよ……」

だるそうにそう言うと、兄さんは布団へと潜り込もうとする。

どうやら、昨日のあの風呂での件については、もうあまり気にしていないように見える。

これなら、私も話しやすい。

「兄さん、ほら。もう起きているなら、布団から出てよ！……じやないと」

そこまで言って、兄さんの顔へと一気に急接近する。
そして、兄さんの耳元に息を吹きかけるよう、囁いて言った。

「朝のキス……しちゃうよ？」

「な　　ッ！！」

私の言葉に兄さんは顔を真っ赤に染め上げて、いきなり上半身を起こす。

そのせいで、私はバランスを崩してしまい、兄さんの体から落ちて、ベッドからも落ちてしまう。

「痛っ！」

ドンッ、と勢いのいい転んだ音をたてて、私は尻もちをつく。

「……もう！　いきなり痛いよ、兄さん」

「だ、だって、お前……どうして……！」

さっき、私の名前を言ったのにどうやら寝ぼけていたのか、兄さんが私の顔を見て驚いた表情を浮かべていた。
私はお尻を払うと立ち上がり、兄さんがいる隣へと座り込む。

「わたし……僕、ちゃんとノックはしたよ？」

危うく、『私』と言いかけてしまい、少し焦った。

今はまだ、兄さんには気づいて欲しくない。

……気づかれたくないのだ。

なんというか、雰囲気というのはやはり重要だろう。

「そ、そうか……。それなら……まあ、……仕方ないか」

兄さんは渋々と納得して、私の体をずっと眺めるようにして見つめていた。

「えっと……蛍。お前、俺の買ってあげた服を……どうして着ているんだ？」

兄さんはまた少し照れたように言う。

「どうしてって……、着ちゃ駄目なの？」

「いや、そんな事は」

「なら、……いいでしょ？」

「う……」

言葉をつまらせながら、兄さんは私から目を逸らす。
その仕草に私は、また胸がキュンとなった。

あう……、ヤバイ。

兄さんがすごく可愛く見える。

なんというか、子犬のように思わされる。

私もこんな仕草をされるとは思ってもみなかった。

兄さんは、ほら、あれだ。

通常の時と照れる時では、差が激すぎるんだ。

だから、こうやって私が兄さんに積極的にいくと、兄さんは照れてしまう。

今までどうして、気付かなかっただろう。

やっぱり、記憶を取り戻してから私は前までの私とは少し見方が変わっている。

兄さんがこうも可愛く見えるのだ。

私は兄さんの手を引っ張って、ベッドから引き起こした。

「お、おい、蛭」

「ほら、下に行こうよ。兄さん」

「あ、こら……！ 手を引っ張るなって……。どうしたんだよ、お前。今日、なんかやけに機嫌が良くないか？ なんか、おかしく見えるぞ」

「えへへ、気のせいだよ。さあ、ほら早く」

兄さんの質問の私は笑顔で答えた。
どうしてだろう。

本当になんだか、気分がいい。

これは記憶が戻ったせいなのかな？

それとも、兄さんの事を男の人として意識しているせい？

まあ、この際どっちでもいい。

とにかく、今がすごく楽しく感じられる。

「ねえ、兄さん」

一階への階段を下りていく中で、私は兄さんに声をかけた。

「今日さ、僕と二人でどこかに遊びに行こうよ」

「二人って……。蜚、本当にどうした？ 頭でも打って、おかしくなったのか？」

兄さんは私の言葉に呆れたようにして返してくる。

「もう、頭なんか打ってないよ。わた……。僕は、僕だよ」

「ん？ 今、お前……。何か間違えて言いかけなかったか？ 思えば、さつき部屋にいた時も間違えていたような……。えーと、わたし……？」

「あ、ああ！ えつと、それは…… 『綿菓子』の夢も見えないよ」
て言おうとしたんだよ」

「ああ、そっか。成る程」

「うんうん」

首を縦に振りながら、なんとか誤魔化す事に成功。

ふう…… 危なかった。

兄さん、本当に変なところには気にかけるんだから。
階段を下り終えて、リビングへの扉を開ける。

そして、兄さんには椅子に座ってテーブルで待っていてもらい、私
は朝ご飯を作っていく。

「ねえ、兄さん。何か朝ごはんに食べたいものとか、ある？」

「特にないぞ」

「なら、食べやすそうなものにしておくね」

それだけ言うと、僕は料理へと専念した。

トースターにパンを二枚、セツトし終わると次に目玉焼きを作る準備をする。

卵を2個、油に火の通ったフライパンに入れる。

ジュワジュワと、焼ける音をたてて、白身の部分が徐々に焼かれて固まっていく。

そして、黄身がだいたい半熟ぐらいになったと思ったら、フライパンから出来上がった目玉焼きをお皿に乗せていく。

私ができる目玉焼きは出来上がった直後に味付けをするようになって
いる。

……というか、ただの癖です、はい。

塩と胡椒を全体的にまんべんなく少しだけ降り注いでやる。

これで私特製の目玉焼きが完成なわけだ。

出来上がった匂いに釣られてか、テーブルで待っていた兄さんが台
所へと入ってきた。

後ろも見ずに足音で気付いた僕は、兄さんに言う。

「どうしたの？ まだ、全部は出来上がっていないよ？」

「ふっふっふ。いやいや、俺はこれさえあれば十分で……」

僕の言葉に、兄さんは不気味な返事で返してくる。

と、突然お尻に変な感触がした。

すりすりと触られているような……というか、触っているのはこ
に一人しかいないのだが。

「ひゃう……。に、兄さんも発情期なんですね」

「ふっふっふ、さつきは後れを取ったが眠気が覚めた俺はまさに暴
れん坊將軍なのさ！ はっはっは！」

兄さんは豪快に笑う。

はあ……。……。

やれやれ、その笑い声が近所の人に迷惑だって前にも言ったのに……

どうやら、いつもの調子の兄さんに戻ってしまったようだ。
なら……。

「ねえ、兄さん」

「ん……？　なんだ、マイシスター？」

お尻をまだ触りながら、平然と聞いてくる兄さん。
だが、これから私が言う言葉は、兄さんをKOに追い込むほどの威力を持ち合わせたものだった。

「もっと……触ってもいいよ、ここも、あそこも……」

「……え……？」

いきなり、兄さんから豪快な笑いが消える。

そして、呆然とした表情で私を見ってくる。

私はそれに構わず、兄さんがお尻に当てていた手の指を……口にぐわえた。

「ん……、ん……んちゅ……」

「ちよつ、……け……い……っ!？」

兄さんの驚く声に私は指を口から離す。

「んあ、……どうしたの？ 兄さん」

「……あ……」

兄さんが呆気のない瞳で僕を見つめた後、その顔をさつきみたく、また真っ赤にさせた。

頭からは湯気が、しゅわしゅわと出ているように見える。

やっぱり……、兄さんは責められると弱い。

どんどんと顔が紅潮していく兄さんに、私は小悪魔にも似たような笑顔で瞳を上目にして、兄さんを見上げた。

「降参……する？」

私の笑顔に見とれてか、兄さんが口を開けて顔を真っ赤にしたまま、黙って頭を頷かせた。

私は笑みを浮かべた後、兄さんを放っておいて、出来上がった目玉焼きが乗ってあるお皿を向こうのテーブルに持って行った。

兄さんはボーっと突っ立ったままで、口をあんぐり開けて、上の空の状態となっている。

……あらら、そこまで刺激が強かったかな？

「ほら、兄さん！ いつまでも、そこに突っ立ってないで早く来てよ。せつかく、作ったのにこれじゃあ、冷めちゃうよ?。」

「……………」

兄さんは私の言葉にまったく反応せず、まだ突っ立ったままにいる。

やっぱり、少しやりすぎちゃったかな……。

あ、あはは、……兄さんってやっぱりエロ本とか持っていないから、こういう事は苦手なのかもしれない。

私は心の中で少し反省しながらも、それでも、ちょっぴり嬉しい気持ちに浸っていた。

何故だって……？

だって、それは……。

「ほら、兄さん」

兄さんの背後に立って、後ろから抱きしめた。

自分で言うのもなんだが、私の少し大きな胸が兄さんの背中に完全に密着して、その弾力を兄さんを感じさせる。

兄さんにとっては多分、まさに最強最悪の攻撃。

攻撃名は……そうだな、『小悪魔化した妹からの誘惑』と言ったところだろう。

「あ……ああ……っ」

兄さんの思考回路が完全にショートとしたのか、頭からボンツと大きな湯気が輪になって上がった。

「ダメだ……もう……俺……。ああ……すごい……感觸……もう死んでもいいや……。はは……。おっぱい万歳……。妹……。万歳……」

そのまま、何か聞き取れない声でボソボソと呟いて、口から……つて魂が出てる！ 魂！

に、兄さん！ いくらなんでも、それは……免疫なさすぎだよ！
というか、兄さん男の子でしょ？

なら、多少はこういう事を期待したりするもんでしょ……。

あう、これってなんか結構前途多難なのかもしれない。

はあ……。

やっぱり、意識も女の子になっても、溜息は相変わらず出るみたい
です、神様。

でも、それでも……。

兄さんの背中をギュツと力を入れて、抱きしめる。

温かい……。

兄さんが前に言っていたの『温かさ』、今はちゃんと分かるよ。

この温かさだけはずっと感じていたい。

私だけのものにしたい。

「ん……兄さん」

兄さんがへなへなと地面に足をついて、座り込む。

同時に私も座り込んで、そのまま抱きしめるのを続ける。
抱きしめながら、目をゆっくりと瞑った。

そして、兄さんの背中に顔をぴったりとくっつかせた。

……このまま、時が止まればいいのに。

そう思ったが、それはやっぱり無理な相談で。

だから、それならもう少しだけ……。

兄さんの理性の限界が来るまで、ずっとこのままでもいい。

まあ、兄さんの理性の限界を超えてしまったら、私が兄さんに襲われてしまうだろうけど。

でも……それでも、まあいいかな？ えへへ。

ねえ、もう少しだけこの時間を許してくれるよね？ 神様。

私は心の中で架空の神に祈りを終えると、兄さんの背中を抱きしめながら安らかな笑顔を浮かべて、この時間をかみしめる様に堪能する。

今日は、清々しいくらいに良い天気。

まるで、私と兄さんを包むかのような晴天だった。

「さて、食べ終わったらどこに行く？ 兄さん」

食べ終わった食器を台所に持っていき後片付けをしながら、私は兄さんに訪ねた。

「あ……そ、そうだな。えっと……」

言葉を詰まらせながら、兄さんは椅子に座って考えているのだろう。私の抱擁から解放された兄さんは、以降ずっとこの調子だ。

そう、この場面にきてとうとう兄さんの素の性格が露わになってしまった。

免疫がありすぎるというのも苦労なものです……、でも免疫無いのも中々の苦労をさせられます。

……まあ、そこが兄さんの良い所でもある。

安心して兄さんに大胆な事が色々とできるので、私にとっては本当

に助かる部分でもあるから。

それに……こっちの兄さんの方が可愛いし。

あんなに無理にお馬鹿に演じなくてもいいのに……。

兄さんって、そこまで本性を隠すくらいに恥ずかしがり屋なのかな？

ああ、もう……シャイな兄さんが可愛すぎて……あう……。

駄目だ。これじゃあ、私と兄さんの位置関係が逆転している事になってしまう。

記憶を取り戻す前の私はあれほど兄さんの事をぼろ糞に思っただけ……。

結局、人の事が言えませんでしたようで。

「兄さん、僕……二人で遊園地行きたいな」

「遊園地って……蛭、それは兄妹で行くところじゃないだろ？」

「別にいいでしょ？ それに僕と兄さん、別に恋人同士に見えてもおかしくはないと思うよ？ むしろ、遊園地に行ったらほとんどの人には恋人同士に見られるかもね」

「こ、恋人って……。いや……だけど……っ！」

「……兄さんは、嫌……なの？」

食器洗いの手を止めて、兄さんに近づいて話しかける。

少し涙を目に溜めて、瞳を綺麗に潤しながら、私は兄さんを見つめて寂しそうに言った。

「嫌だったら……、別にいいよ?」

「あ……いや、別に嫌とは……」

私の言葉に戸惑う兄さんに、ここでもうひと押し詰めていく

「私は……兄さんとだから、行きたかったんだけどね」

口から舌をチロツと出して、悲しそうに笑ってみせる。
それを見て、兄さんは私の頭に手を置いて、そして……優しく撫でてくれた。

「わ、わかったから。だから……そんな顔をするな……」

ああ、……ちよろいな。

と、心中でふざけて言ってみたりして、兄さんの顔を見つめる。
すごく恥ずかしそうにして、頭を掻きながら照れている。

あまりこの顔を直視しすぎると私の理性が間違いなく溶かされるな、
うん。

「それじゃあ、兄さんは先に支度を済ませてきて」

私はそっけなく言つと台所に戻り、食器洗いを再開させながら兄さんに言う。

「あ……うん」

返事をして兄さんは早々とリビングから退散して、二階へ上がって行った。

……さて、どうしようか。

遊園地で兄さんに記憶が戻った事と私の気持ちを伝えるか、それとも……伝えないか。

もし、その事を伝えたならどうなるだろう。

兄さんは私の事を今以上に意識してはくれる……はず。

自惚れているわけではないが、兄さんの態度から見て、兄さんは今も変わらず私の事が好きな……はずだ。

……でも、もしそれが違っていたら？

兄さんだって、変わっているかもしれない。

動揺だって、女の子に責められる免疫がないだけで説明が済むからだから、どうしても迷ってしまう。

どちらにしても伝えたのなら、多分今のこそばゆい関係は終わってしまうだろう。

伝えなかったら、何も変わらない今までの日々……それに私の意識があるだけ。

いや、記憶の事だけを伝えるという手もある。

だが、どのみち……気まずい関係になってしまうのは明らかだろう。

兄さんに余計な気を使わせるのは、嫌だ。

私は……兄さんを苦しませたくない。

なら、やっぱり

「兄さん……」

愛しい人の名前をボソツと呟く。

「私ね、勇気ないんだよ……」

独り言のように呟いた言葉は台所に流れる水の音に吸い込まれるようにして、消える。

誰も聞いてくれるわけもなく、だから呟ける言葉がある。

「だから……待っている事しか……できないよ……」

それは私の願望だった。

自分勝手に、我がままで……でも、それが女の子。

女の子という生き物なのだろう。

皿洗いを済ませた後、二階へ上がり、自分の部屋へと戻って行った。改めて、自分の容姿を鏡で見してみる。

「私は可愛い……のかな？」

容姿としては……“男の子だった私”から見たら、可愛いとは……

思う。

だが正直、自分に自信を持てるほど、まだ私は“女の子として”ちゃんと出来ていない。

つまりは、男として過ごした時間の方が長いから……、女の子が言う可愛らしさというのが理解できてい。

女の子らしさがわからないのだ。

兄さんのために精一杯のお洒落はするつもりだが、それでも不安だ。いざという時のために、お化粧の仕方を佐倉さんに教えてもらっておいてよかったが上手く出来るだろうか？

兄さんに一人の女の子として見てもらえるように……。

私は慎重に考えて、遊園地にデートしに行く服を考えた。

すごく悩んだけど、不思議とそれは楽しい時間だったのかもしれない。

好きな人の笑顔を考えながら、どうやったら振り向いてもらえるか、どうしたら好きになってくれるかと……。

多分、こういう事を考えてしまうのが女の子……なのかな？

ただ、今は……。

兄さんがあつと驚くような、そんな綺麗な自分になりたい。

迷いに迷って、決めた服は兄さんが私に買ってきてくれたもう一着の服。

けっこう短い黒のスカートに赤と黒のチェックのＴシャツ。

それに頭には黒のリボン、足にニーソックスと……まあ、兄さん好みの服装で完成だった。

着替えてみて、鏡で自分の姿をしてみる。

「絶対に……これ、見えちゃうよね？」

少しでも風が吹くと、たちまちスカートの中の下着が見えそうなくらい、短いスカートに恥ずかしくなり、つい顔を赤く染め上げてしまふ。

駄目、駄目！

兄さんのためなんだ、兄さんの。
これくらい……我慢しなくちゃ！

そう自分に言い聞かせて、勇気づける。
他人にスカートの中を見られるのは、嫌だけど……。
そう、これは兄さんのため。
兄さんの喜ぶ顔がみたいから。

「うん……よし！」

私は財布とケータイを鞆に入れた後、その鞆を肩に掛けて、部屋を後にした。

机の上には、片づけるのを忘れて置き去りにしたままの化粧品と幾つものリボンが散らばっている。

そこには明らかに、デートに行く際、女の子の夢のようなきらきらとした時間を体験したかのように物語っていた跡があった。

第11話 キス、キス、ディープキス!? (前書き)

はう……。

えっと、その……。

あまり、タイトルは気にしないでください、はい！

あ……あう、それにしても……。

「兄さんの性格が掴みきれません……はあ」

第11話 キス、キス、ディープキス！？

さて、今朝に昔の記憶が戻ってすっかり女の子な私なのですが、やはり兄さんはそれに気づいていないために突然の態度の変わりようにも戸惑いを隠せない訳で……。

「ねえ、兄さん。どうして、そんなつまらなそうな顔するの？ ほら、もっと笑ってよ。せっかく、遊園地に遊びに誘っているのに……」

遊園地行きの電車の中で、私の隣に腰を掛ける兄さんに文句を垂れるように言う。

兄さんは相変わらずの困っているような表情で、私に視線を合わせてくれなかった。

運が良いのか悪いのか、偶然にも今乗っている電車はすごく人が空いていて、私達二人がいる電車の車内では、私と兄さんを除くと誰一人いない。

言わば、私達の貸し切り状態となっていた。

「……蛭。やっぱり、今日変だぞ、お前」

先程から、兄さんはずっとこの調子なのだ。

私の事が気に掛かるのか、それとも疑っているのか。

まあ、どちらでもいい。

とにかく、兄さんの勘が今日はやけに冴え過ぎている。

危険だ、これは危険なのだ。

さっきから、心が何かの危険信号を訴えているかのように、ドクンッ、ドクンッ、といつもよりも早く鼓動している。

「いつも変態な兄さんの口から、よもやそんな言葉が出るとは思いませんでしたよ」

冷静に見せて対処するも、兄さんがそれでも疑いを探っていく。

「むう……。つか、蛍。なんか雰囲気変わってないか？」

「何をまた……。気のせいだよ、兄さん。“僕”は常に毒舌でなおかつ腹黒い蛍さんだよ？」

ニツコリと兄さんに微笑み、兄さんはたじろぐ様子を私に見せる。

とりあえず、これで気をそらしたかな？

あ、そうそう。

女の子の記憶を取り戻したとは言え、私は兄さんの前では『僕』を使っている。

先程も言ったが、それはまだ兄さんに記憶が戻った事を知られたくないからだ。

今日中にはこの事は私の口から伝えるつもりなのだが、それでもまだ今は早い。

早いのだ。

この名残惜しい時間を楽しみたい。

いや、私は兄さんと新しい関係になりたいのかもしれないが、まだ心の何処かでは多分兄さんの『弟』でいたいのもかもしれない。

……もう少しだけ、夢を見続けたいんだ。

「それにしても、電車の中でボーっと座っているだけだと眠くなるよな……」

兄さんが眠たそうな顔で、欠伸を漏らしてしまう。

目の下にはうつすらと隈が出ていて、目尻には微量だが涙が溜まっていた。

「昨日、やっぱり寝る事ができなかった？」

やっぱり、あのお風呂の件を気にしているのだろうか？
だが、私の質問に兄さんは首を横に振った。

「いや、寝たよ？」

作り笑顔で答える兄さんにため息をつく。

……明らかに嘘だ。

「兄さん。ほら、自分の顔を見て」

私は膝の上に乗せていた鞆から、折り畳み式の手鏡を持って、兄さんの顔を映す。

「え……、気にするな！ 隈が出来たってなんてことはない」

「……………やせ我慢」

「が、我慢なんかしてないからな！」

聞こえないようにいったつもりが聞こえていたらしくて、兄さんが私に口論する。

「我慢しているでしょ？　というか、本当はあんまり寝てないですよ？」

「う……っ、寝たぞ……………2時間くらい」

語尾の部分をボソツと呟く兄さんに、呆れてしまう。

「ほら、やっぱりあんまり寝てないじゃない」

「いやまあ、人間は二時間でも十分の睡眠は」

「取れませんから」

「……………」

むくれたようにして、兄さんがそっぽを向く。
私と一緒に、兄さんの仕草もかなり変わった。
いや、多分これが兄さんの本来の姿なのだろうか？
私は思わず、クスクスと笑い声を漏らしてしまった。

「む…………っ、何だよ。何か可笑しい所でもあったのか？」

兄さんが拗ねた口調で言う。

しかし、それは私にとってはまったくの逆効果。
その拗ねた姿が、またなんとも可愛らしいというか…………。
余計に私を笑わせてしまいますよ。

「ふふ、ねえ、兄さん」

「……なんだよ？」

すっかりご機嫌が斜めになってしまった兄さんに私は失笑しながら、話しかける。

「兄さん、今の方がなんだか生き生きとしているよ？ やっぱり、今までが無理があったのかもね。うん、本来の兄さんは恥ずかしがり屋……と」

「う……っ、そんな事はないぞ。というか、恥ずかしがり屋でもない！」

兄さんが否定しながら突っ込んでくる。

やっぱり、立場が逆転したなあ……うん。

なんだか、兄さんが前までの私みたいに見えて仕方ない。

……ご愁傷様です。

「なら、証明できる？」

挑発するような私の言葉に兄さんは、「証明って……何を？」と言
い返してくる。

「ふう……」

一息ついて、間を置くと僕は続きを話した。

「……キス」

「……………え？」

拍子抜けた声で、兄さんが目を丸く驚いた顔つきで私を見る。

「だから……キス、だよ？」

「……………」

もう一度言った瞬間、兄さんが真剣な表情で黙り込んでしまふ。
いや、私はからかうつもりで言ったんだけど、……マズイ。
もしかしたら兄さん、今の言葉を真に受けたかもしれない。

真剣な表情がそれを語っているように見える。

気まずい空気になってしまい、視線を逸らすために車両の窓を見てみると、外では電車が今まさにトンネルに入ろうとしていた。

このトンネルは結構長くて、電車が完全に抜けるのにも十五分くらいはかかってしまう。

トンネルを抜ければ、目的地である遊園地が見えてくるだろう。

……そろそろ兄さんに言った冗談を解いてやらないと。

さすがに、遊びに行くというのにぎこちない雰囲気のままじゃ、せっかくのデートも楽しくならない。

それにこのままじゃ、お風呂の二の舞になる。

早くこれが冗談だという事を言わなきゃ……。

「えーとね、兄さん。実は」

続きを言おうとした瞬間、トンネルに入る。

「……………」

トンネル内に電車が突入した瞬間、ザーツとした音が車内に響き、私の声がかき消された。

なんて、間の悪いタイミングなのだろうか。

本当に自分の運の悪さにも嫌気がさしてきたよ、あう。

思わず、ぐったりとしてしまう。

電車にはまだ昼ごろなので、明かりがつけられておらず、車内は真っ暗になってしまう。

私は頭を窓につかせて、ため息をついた。

「はあ……」

どうやら、自分のため息だけは聞こえるらしい。

なんとまあ、不平な事だ。

嫌になって、私はもう一度ため息をつこうとする。

その刹那、いきなり顎をぐいつと掴まれて、引っ張られた。

兄さんの手だ。

何かが、唇に重ねられる。

次第に温かな感触広がっていく。

……柔らかい。

私の唇と重なったその柔らかなものが一体何なのか、すぐにわかってしまった。

だって、前に一度経験していたから。

あの保健室で海斗と誤ってキスした経験を。

「ん……んう……っ！」

嬌声が漏れてしまう。

すごく柔らかな感触が私の唇を包んだ。

次第に、ちゅっ、ちゅっ、と吸い上げるようにエスカレートしていく。

卑猥な音が互いの唇から発生する。

気持ち良い……のかはわからないが、だがなんだか無理やりされている感だよ、これ。

海斗の時は触れた感じのキスなのに……これは何か違う。

あう、これ、すごくいやらしいキスだ……っ！

「んっ！？ んん……っ！」

さすがにこれはやりすぎだろうと思い、兄さんの唇から離れようと、手で押しのけるが、腕をぎっしりと掴まれる。

兄さんの力は私よりも上で、逃げる事ができなかった。

「んーっ！ んう……ん……っ……っ！」

更にエスカレートしていくキスに私は成す術もないまま、怖いと思いつつも……それでも受け入れてしまう。

「ぶはっ……はあ、はあ……。兄さん、どうして……っ」

ようやく、解放されて、キスをしていた相手が誰なのか確信していた私は、息を乱しながら言う。

「蛍……」

兄さんが色っぽさを含んだ声で私の耳元に返事する。

「キスして欲しかったのは……お前だろ？ それに、今日の蛍……
すごく可愛すぎるから」

「兄……さん……」

この状況で、可愛いと言われて喜ぶべきなのだろうか、戸惑ってしまふ。

「香水つけているだろ？ 蛍の身体からすごく良い香りがする」

「ん……ひゃうっ」

兄さんは辺りが真っ暗なのをいいことに、私の首筋に息を吹きかけたり、舌でなぞったりしてくる。
なんともくすぐったい感触につい、ゾクツとしてしまった。

「僕達は兄弟だよ……こんなの、駄目だよ」

いくら車内に人がいないとは言え、度が過ぎている。

私は『兄弟』という肩書きを使って、言い返そうと試みた。

兄さんはその事を知っていて、なおかつ私がその事を今も知らない
と思っているだろう。

そこについて、最大限に活用した。

これで……、今の兄さんなら止めてくれる……はず。

だから、これ以上は　もう！

「残念だけど……蛭、お前　もう知っているんだろ？　“お前が元から女の子だった事”や“俺達が兄妹として血が繋がっていない事”も」

「な　ッ！？」

兄さんが言ったその言葉に、背筋が凍った。

え……嘘、……バレたの？

でも、ちゃんと日記はひきだしに戻したはずだし、それに鍵だって元通りにもどしたはずなのに……。

それなのに、どうして！

私の疑問を解くように、兄さんが口を開く。

「お前、俺が気づいていないとでも思っていたのかよ。……あの机のひきだしを開けたら、仕掛けたシャープペンスルの芯が折れるように仕向けていたんだよ。まあ、あくまで保険としてだし、まさか、蛭があの日記を読むとは思わなかったぞ」

どこの世界の秀才ですか、あなたは！

すごく無駄な才能に満ち溢れているよ！ それ、ある意味すごいよ！

そう突っ込んでやりたかったが、今はそんな状況ではない。

早くも私の予定が、計画が崩されたのだ。

いや、そもそもこんな事は想定していない。

それに、いつの間にかだんだんと兄さんのペースに私が乗せられている。

はう、なんだか立場がまた逆転して、元の立場に戻りそんな雰囲気が出ているのは気のせいでしょうか、神様？

「あとちなみにだが、照れたり拗ねたりしたのは、お前が本当に見たのか試すためにふっかけてやったんだ。それに見事にお前はかかってくれたという事だな」

「それじゃあ……あれって、全部……」

「ああ、演技だぞ」

……今、殺意沸きました。

女の子の意識を取り戻しても、殺意が沸きましたよ。

つまり、あの朝の全てが演技だったという事になる。

私は見事に兄さんに踊らされていたわけか。

ああ、くそ、……なんで私はこんな人を好きなのでしょうか。

うう……アホ兄さんめ。

「でも、演技って言っても、実際に俺も照れたり拗ねたりしたのは、

本当だから。まあ……なんだ。演技であって、演技でないみたいな？」

「……兄さん」

「それにほら、蛍が過去を思い出してくれたのは……俺にとっては嬉しい誤算だったんだ。うーん……なんというか、これから俺のやりたい放題？」

「なんか字が違っよ、兄さん！ それ、危ないよっ！」

さすがに突っ込んではいられずにはいられなかった。
というか、やりたい放題って……あう。

その光景を想像してしまい、顔が熱くなる。
想像した自分が馬鹿でした、はい。

「とりあえず、風呂場での事は……ごめんな。記憶戻ったから今なら蛍もわかると思うけど、俺は……蛍を守ってあげる事が出来なかった。……ただ、見ていただけしか出来なかったんだ。俺は……卑怯な人間だ」

「……兄さん」

いきなりそんな謝罪を言われても、私が困ってしまう。

暗闇の中で顔は見えないけど、きっと辛い顔でいるのだろう。

「俺は、蛍の親父から蛍を守ってあげることができなくて……。それに負担が掛かりすぎた蛍の看病をする事だけしか、俺には出来なかったんだ。……ごめん」

「……………」

兄さんにどう返事を返せばいいのか、わからない。
多分、これを言葉だけで許したとしても、兄さんは引きずってしま
う。

それは、日記の内容の重さから見ても、……わかってしまったから。
でも、私の過去の傷で縛ってしまうのは、嫌だ。
兄さんを縛って手に入れても私は嬉しくないし、それをすれば、私
が兄さんの心を逆に傷つけてしまう。

やっぱり、兄さんは優しいけど、……優しすぎる、ズルイよ。
だって、私に暇を与えてくれないもの。
本当にズルイ人だよ。

でも、だから私はきつとこの人の優しさに幼い頃から惹かれてしま
った。

記憶を取り戻した時、その事を忘れずにこんなに愛しく思えた。

この気持ちに嘘はないんだ。

だから……もう、伝えてもいいよね？

「兄さんは……いつも“私”を助けてくれたじゃない。だから、私
は兄さんをまた好きになった。」

結局、私から想いを伝える事になってしまった。
でも、想いを止める事ができなかったから。

「忘れていても、この気持ちだけは小さい頃から引き継いだままで、だから消えなかった。……好きです、兄さん。お兄ちゃんとしてではなく、一人の男として、私は伊藤壮士が好きです」

兄さんからの返事を待つ。

少し怖い。

でも、どんな返事でも後悔はしないと思う。

と言いつつ、えへへ、やっぱり……怖いかも。

「蚩……」

兄さんが私の名前を呼ぶ。

それに身体がビクツと反応して、強張る。

「……俺……は」

「……っ……」

ボソツと呟く兄さんの言葉に期待をこめる。

そして、紡がれる言葉は優しい声色で語られた。

「……俺もお前だけを見ていた。……男になっても、お前が記憶を失っていても、俺は……お前の事が諦め切れなかった。でも……」

「でも……?」

そこで言葉が区切られ、私は不安になる。

「俺で……本当いいのか？ 俺、かなり嫉妬強いし、調子にのるし、それに……エロいぞ……？ そんな奴でもいいのか？」

自分に自信がなかったのか、兄さんがなんだか弱音つばい言葉を吐く。

その言葉に、当然のように私は言い返す。

「ん……、えっと、嫉妬してくれても構わないし、少し抑えてくれるなら調子にのつてもいいよ。それに……えっちなのは、男の子だから仕方ないから。兄さんこそ、……私でいいの？ その、私って結構面倒だと思っし、嫉妬もすごくするよ？ それにわがままだし、すぐにかつたるくなりし、それについて最近まで男の子で全然女の子らしくないと思っし……、他にもまだまだいっぱい良くないところを探せば出てくるよ。それでもいいの？」

「……関係ない」

きつぱりと兄さんからそう告げられる。

「俺は、面倒くさい女の子が大好きだ。嫉妬されるのも大好きだ。それにわがままな子だって可愛いと思っし、適度にかつたるくなる所もギャップがいいだろ？ それに……お前はすごく女の子をしているじゃないか。他にも良くないところが出てきても、それでもいいさ。俺は蛍の全部を好きになる自信があるからな」

それは、すごく嬉しい言葉で、でも本当に幸せでいいのかなって思えるくらいで。

「俺も……ずっと前から、お前だけを見ていた。好きだ、蜚」

頭を撫でられて、少しだけ涙を零して、泣いてしまった。
すごく、すごく嬉しいから。

こんなにも早く、でも時間は長かった。

それでも、兄さんと想いが伝わった。

そして、兄さんもずっと私の事を見てくれていたのだ。

「兄さん……ッ！」

兄さんの左腕にギュッとしがみつく。

……だがしかし、喜んでいるのはつかの間だった。

兄さんがとんでもない発言をする。

良い雰囲気だったのを台無しにしてしまうような、そんな言葉を。

「それじゃあ、二度目のキスを頂こうか、蛭！」

「へぁ……？」

私の口から、呆気のない声が出てしまう。

さっきまで、すごく真剣な声で告白してくれた兄さんが、ここにきてその声色に下品さが混ざったように聞こえた。

「えーと、兄さん。もう一度聞いていいですか？」

「いや、だから、ファーストキスは頂いたからさ、続きの二度目のキスだって！」

兄さんの声がいつもの、調子のいい声に戻っていた。

えーと……トンネルに入って、既に結構時間立つよね？

もうすぐでトンネルを抜けれると思うし……、兄さんはまた何を大胆発言するんだろうか。

それに、兄さんには残念ながら……。

「えーと、その……私、これでキスしたら二度目じゃなくて、三度目のキスに……」

「え？　今、何を言いました、蛭さん？　兄さん気のせいなら、聞き流すよ。さあ間違いを正しましょう。いますぐに！！」

「あう、……ごめんなさい」

「ぐはっ！」

私の謝罪と同時に、兄さんが吐血したような声を出す。

今、兄さんがどんな姿か大体予想がつく。

きつと、頭を俯かせて、口をあんぐりと開けているだろうな、うん。

「誰と……したんだ？」

兄さんの声のトーンが低くなる。

その声色には怒気が含まれていた。

自分がボロを言った事に早くも後悔してしまう。

「あ、いえ……その……海斗と……」

「なっ、か……海斗君……だとっ！」

「……はい……。でも、その……事故だよ？　故意でしたんじやないから、その……気にしないで、ね？」

兄さんの怒りの雰囲気シュンと身を縮めてしまっ。
事故とは言え、私が悪い事には変わらない。

それに、お互い想いが繋がった直後でこっぴどい話をしてしまうと…。

……許してもらえないかもしれない。

しかし、兄さんがこれまた意外な言葉を口にする。

「よし、なら……もう一度“今”キスしてくれたら、許す」

「……………へ？」

またもや、私から呆気のない声が漏れてしまう。

すぐく簡易というか、兄さんは回数で優越感に浸りたいのだろうか？
むしろ、それで許してくれるという事が不思議で仕方ない。

兄さんが私の肩をがっちり離さないに掴む。

「え、いや、それで許してくれるなら……でも、今は」

「……………だーめ」

そう言つて、私の唇を塞いだ。

唇が重なる。

さっきよりも激しい、理性が溶けてしまいそうなキスだ。

兄さんが私の唇をこじ開けられて、口の中に舌を忍ばせようとする。

「ん、いや……待っ

んう、あ……………」

キスする事もまだ二回目なのに、兄さんはそんな事知ったことではない様子で続けていく。

私の舌を探って、そして淫らな音を立てて絡める。

やだ、待って！　だつて、ここ電車の中なんだよ！？　ディー
プキスなんて……っ！　駄目、駄目……っ！

思考の中ではそう思っても、でもそれを兄さんが許してはくれない。

「んあ、ん、んう……ふあ……！」

舌が絡まる際、淫らな音が聞こえた。

同時に私の口から出たとは思えないような、淫らな声が漏れていく。
さっき言ったと思うが、私達がいる車内には運良く他の乗客が誰一人いない。

そのため、いくら声が漏れても人に知られる心配はなかった。

つて……そうじゃなくて！

こんな、こんな卑猥な事で私はされるままになってしまっているんだろ。

今なら、空いている手で抵抗する事ができるのに……。

……でも、もう頭がボーっとして……どうでもよくなってきた。
こんなの、卑怯だ……。

だけど、でも……兄さんのキスが気持ちいい。

こんな事、いけないと思うけど、舌が勝手に兄さんを求めてしまう。絡めてきた舌を受け入れてしまうんだ。

「ん……、ふぁ……ぁう……」

こんなの、異常だ。

自分でもわかってる。

でも、頭ではわかっていても、身体がいう事を聞いてくれないのだ。兄さんを求めている。

ずっと偽りの記憶でだまし続けてきた想いが、心が繋がった今になって溢れかえって兄さんを欲している。

私、えっちじゃないよ？

でも、兄さんは別なんだよ。

愛している人なら、女の子は何をされても嬉しいって友達が言っていたけど。

きっと、こういう事なのかな？

「ふぁ、兄さん……ん、んちゅ、……んう……んむっ」

「蚩、お前……意外とえっちな女の子だったんだな」

兄さんが唇を離して、感心するような声で言う。

「あ……。ち、違うよ！ その、これは……っ」

弁解するも、余地がない。

はい、確かに私は兄さんのキスをせがまれて、されるがままで、そ

れで気持ちよくなっていました。

あう、こんなの……意地悪だ……っ！

「とりあえず、これで許す。えっちな蛭を見る事が出来たから」

「あう……。だ、だから、それは……ううゝ」

兄さんがクスクスと笑いながら、私の額を人差し指で小突く。

どうやら、完全に立場が元に戻ってしまったみたいだ。

それも今朝の私と兄さんの立場をそのまま入れ替えたみたいに。
私、有利な立場に立ちたかったのに……。

でもやっぱり、兄さんには勝てませんでした、うう。

電車はようやくトンネルを抜けて、久しぶりにみるかのような眩しい光が車内に差した。

それほど、トンネルの中にいる時間が長く感じていた。

「なあ、蛭。」

「な、何ですか？ 兄さん」

まだ、先程のキスに浮かれていた私は兄さんの笑顔を見るだけで精一杯だった。

「もう一度、キスしてくれるか？ というか、これ兄さんの命令な」

「あつ、命令って……もう！」

なんだかんだ言いつつも、私は兄さんを受け入れる。

二人の影が重なる。

お互いの顔がはつきりと見える中で、本日二度目のキスを交わした。それは一度目や二度目のような激しいキスじゃなかったけど、……でも、すごく優しいキスで心が満たされた。

「ちなみになんで隠していたんだ？ 素直に俺に記憶が戻った事を教えれば良かったじゃないか」

兄さんがムスツと駄々を捏ねながら歩く。

私はその横で、兄さんの手を繋ぎながら、反論した。

「いや、そうは言ってもさ。やっぱり私は不安だったんだよ？ 言ってしまったら、今の生活がきまなくなるし、そもそも私があの家
に続けてもいいのかな？ って、考えちゃって」

電車を降りてから、少し歩くと遊園地はすぐそこだった。

結局、あのキスの後に何度もキスをしてしまい、もう既に八回してしまった。

……四回目から全部、私がキスをせがんだ事は誰にも秘密です。

「お前はどうかあれ、俺の家族なんだから。これからも……」

「それって、どういう意味なの？ 兄さん」

口元を笑わせて、兄さんを見つめながら尋ねてみる。
その意味はもちろんわかっていた。

「……お前、それ確実に確信犯だよな？ それ」

兄さんが呆れたように、ため息をついて私を見た。

どうやら、この今日の前にいる兄さんこそが、兄さんの素の本性であるらしい。

しかも、私とほぼ同じような性格のも持ち主だった。

「……確信犯？ なんの事なのかな？ 私は、兄さんの口から聞きたいんだけど」

「仕方ないな。……こういう事だよ」

そう言つて、兄さんが頬に、ちゅっ、と軽くキスする。

「あ、う……！ 不意打ちは心臓に悪いからやめてください！ それに言葉じゃないし！」

周りに他の人がいるにも関わらず、キスしてくる兄さんに顔を真っ赤にしてしまう。

「あのカップル凄いな、周りに人関係無しにキスしちゃっているし」

「熱いね……羨ましい」

「お似合いのカップルだね。男の方は背が高くてカッコいいし、女の方はスタイル良くて凄く可愛いし……」

周りでひそひそと話が耳に嫌って言うほど入ってくるのだが。

あう、皆さん聞こえていますよ。

もう少し、ボリウム下げて控えてください、うう……。

「だって、行動の方が蜚、嬉しいだろ？ あと、顔すごく赤いぞ」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら兄さんが、からかってくる。

そ、それは兄さんのせいですよ！

さつき、私と性格がほとんど似ていると言ったけど、違いました。兄さんの方が色んな所でタチが悪いです。

それに色んな意味……ズルイよう。

「ふん……」

「あれ、怒った？ 蜚、機嫌直せよ。俺が悪かったって」

「なら、何が悪かったか、十字以内でまとめて答えてください」

「そんな簡単な事でいいのか？」

兄さんが楽勝みたいな顔で、それでもって拍子抜けた声で私に確認してくる。

「自信があるなら、どうぞ」

「答えは…… “愛しているから”」

「なっ！ こ、こんな昼ごろから愛を語らないでください！」

「……あれえ？ さつき、電車の中ではあれほど、『兄さん、もっとキスして！』ってえっちな声を出してせがんでいたのに？」

「ち、違います！ 周りの人に誤解されるから、やめてよっ」

私達の様子を見て、周囲にいた人全てが笑っている。

傍から見ても、こんな会話をしていたらバカップルに見えてしまう。

……いや、訂正しよう。

完全にバカップルです、はい。

は、恥ずかしいよ……、兄さんの馬鹿！

そう思うも、当の本人は笑って楽しそうにしている。

本当に楽しそうな笑顔だ。

……残念ながら、今のこの状況では私は兄さんのその笑顔を素直に喜べません。

「兄さんのアホ」

「くつくつく！ ああ、そうさ。俺はアホで変態な壮士さんだよ」
不屈な笑いを見せる兄さんに、ため息をつくも……でも。
それでも、やっぱり二人にとって変わった瞬間が今日と言う日なの
だと、そう思わせるには十分な幸先だった。

「あれ？ ……あれって……まさか……」

その二人から少し離れた所で、見た事のあるようなその姿に驚く少年がいた。
可愛らしい少女が兄と慕う男と手を繋ぎながら、……まるで恋人みたいに歩いている。

「姉さん”……？」

少年がどこか懐かしそうにして、少女を見ながらそう口にする。

少年とその少女の容姿は、よく似ていた。

まるで、“その少女を男っぽくしたら、少年になる”かのように……。

そして、少年のその首に下げられているネックレスのタグには、
『KEI & REN』と文字が刻まれていた。

第11話 キス、キス、ディープキス!? (後書き)

久しぶりの更新ですw

皆さん、お久しぶりw!

長野県でゆつくりしてまいりました(・A・)

いやあ、やっぱり田舎って空気もいいし、景色も綺麗だから最高だよな、うん!

さて、本編の内容ですが……。

とりあえず自重しますwwwwサーセンwwww

ごめん、俺ww欲望に耐え切れなかったwwwwwwwwww おい
蛭さん、この場をお借りして謝りますw

本当にすみませんでしたwwww

後、最後の方にちよこつと出てきた『彼』

物語の核……というか、まあ、読者の皆さんも読んだら気づくと思います
ですが、あれは蛭の　です。

あれ?　言葉に出ないな?　自重しろww

とにかく、次の話は遊園地で兄とのラブラブデート!

おちゃらけなギャグもほんのちよっぴり入れてみたり……w

よし、頑張つて次の話も執筆しよう!

読者の皆さん、次回もお楽しみにw

ゞ(*。^*)ノ　see you next time　!!

それと余談ですが……。

未だに蛭の一人称がたまに「僕」になっている事に作者もつい忘れがちな現状ですww

すみませぬwww

くそwwまだ「私」が慣れてねえwwww

第12話 邂逅（前書き）

なんで……。

どうして……今になって現れたの？

なんか、すごく嫌な胸騒ぎがする。

どうしてだろう……怖い。

「と、何故だかシリアス（？）っぽい前書きになりましたが、果たしてどうなる事やら。そして、前回の話の最後で描かれた少年とは一体……？ ちょっと、新展開を迎える模様ですよ、読者さん！さて、本当にどうなってしまうんでしょう、私。……はあ、この先心配だ、……はう」

第12話 邂逅

「さて、螢。遊園地に着いた訳だけど、最初に何か乗りたい物でもあるか？」

遊園地の入場券を買う列に並びながら、ふと、兄さんが些細な事を聞いてきた。

「えーと、それじゃあ……」

と、すぐに答えようとしたが、ここの遊園地にはどんなアトラクションがあるのか、実はあまり知らなかったのでつつい悩んでしまった。

定番とかなら、ジェットコースター？
それとも、急流滑り？

とにかく、最初は絶叫系のアトラクションに乗った方が良い出だしを踏めそうだ。

「それじゃあ、ジェットコースターに乗ろうよ」

「ジェット……コースター……？」

私の言葉に兄さんが眉をピクツと動かして聞き返してくる。

「うん」

私はそれに頷いた。

すると、兄さんの顔がだんだんと青ざめていき、口に手を当てる仕草を見せた。

「……えっと。その他には何か乗りたい物とかある？」

『ジェットコースター』の他に乗りたい物があるか、兄さんが聞いてきたが……これは明らかに私の注文を流そうとしている？

兄さんは絶叫系の乗り物が嫌いなのかな？

ちよつと、単刀直入に兄さんに聞いてみる事にする。

「兄さんってさ、ジェットコースターとか嫌いなの？」

「べ、別にそんな事はないぞ」

と、兄さんは否定する。

しかし、その様子は完全に動揺している。

……やっぱり、絶叫系の乗り物は嫌いなのかなあ……？

過去に兄さんと遊園地に行った事はなく（私の記憶が元通りならば）、そのために兄さんがどんな乗り物が好きなのかわからない。

私は基本、“アレ”以外なら何でも大丈夫なのだが。

あつ、ちなみに“アレ”というのは、かなり定番のアトラクション。どこの遊園地にも大抵置かれているはず。

本当にそのアトラクションだけはいらないんだけど、……あう。

……極力、この話題は兄さんの前では伏せておかなきゃ。

兄さんの性格上、私が“アレ”が苦手なのを知ったら、きっと行くだろうし。

「えーと、兄さんは何か乗りたい物とかあるの？　せっかく二人で来たんだし、兄さんも何に乗りたいか言わなくちゃ」

「俺か……、えっと……俺は……その……」

「ほーら！　何？　聞こえないよ？」

「……ん」

今度はもじもじしながら、兄さんは恥ずかしそうにある方角を指す。

「？」

兄さんが指した方向を追いかけて視線をやると、そこには遊園地内のアトラクションのあるポスターが入口の壁に貼られていた。

『PANDAでショー』

……それは決して、乗り物系のアトラクションではなかった。

観賞系のものだろうか。

そのポスターは、可愛いパンダを背景に和やかな文字で書かれていた。

あ、あつれー？

私の気のせいかな。

何だか、可愛いパンダと触れ合っている子供の写真が……。

目を擦ってみるが……うん、錯覚ではないらしい。

「……………」

視線を兄さんに戻すと、顔を赤くしている。

ああ、……これはまた、なんとも可愛い趣味をしている。

いや、ネタじゃない所を見ると、本当に可愛らしく思える。

まさか、こんな和やかなアトラクションが好きだとは……。

てつきり、私が苦手な“アレ”が好きだと思っていたが、予想を遥か右斜めに裏切られて、苦笑してしまった。

苦笑する私を見て馬鹿にされたと思ったのか、兄さんが顔をムツとする。

「…………馬鹿にしただろ？」

兄さんがふてくされたようにして、聞いてくる。

私をジーっと軽く睨む兄さんの視線が、まるで小動物が少し拗ねて

飼い主に反抗するような目に見えた。

というか……拗ねている、うん。

「うっん、馬鹿にはしてないよ。ただ、“可愛い”とは思っただけだ」

「蛭、それを馬鹿にしていると言っただが？」

「そんなに文句を言うなら、言わなきゃよかったのに」

「……蛭が強要してきたんだろ？」

「ごめんなさい」

「……はあ」

兄さんがうんざりした溜め息を漏らす。

妹……、コホンッ！

『彼女』に教えてしまった事を今になって後悔してしまったのか、結構ショックを受けている模様だ。

んー、そこまで気にする事なのかな？

こっぴどいのが好きな男の子って、結構たくさんいると思うんだけど。

でも実際は、やっぱり言いにくいかな……。

「そんなに落ち込まないでよ。別にいいじゃない、パンダ可愛いし」

「落ち込んではない。へこたれているだけだ」

……それって、どっちも同じような意味だよ。

すかさず、心の中で突っ込みを入れてやる。

「ほら、入場券」

兄さんが入場券を大人二枚買って、その内の一枚を私に渡す。

「ん、ありがとう」

入場券を受け取ると同時に、兄さんが私の手を繋いだ。

「そ、それじゃあ、行くか」

兄さんは照れくさそうに顔を赤くしたままで言った。

握った手は優しく繋いだまま、離さないように。

そんな不器用だけど、つい優しい行動に嬉しくなってしまう。

「……………うんっ！」

兄さんの手を握り返す。

「さて、初めにどのアトラクションに行くかだけど……………ここはやっぱり、パンダのアトラクションに」

「や・だ」

兄さんがほほ笑みながら言った言葉を、即答で拒否。
そして、私の言葉に、兄さんのほほ笑んでいた表情が崩れ落ちる。

「最初はもちろん、ジェットコースターでしょ？」

「そんな……。お前……パンダを観賞するアトラクションに賛成してくれたんじゃないのか……？」

兄さんが凄く傷んだ顔を見せるが……だが、しかし。

「私？ 私は“賛成する”なんて、そんな事一言も言ってないよ」

「うわっ、はめやがった!？」

「兄さんが勝手に私が賛成したと思いこんでいただけでしょ？ 私は別にはめた訳じゃありません」

「蚩……。……よし、聞いてくれ。何故、俺はジェットコースターが嫌いなのかを！」

「別に聞きたくありません」

「どうしてだ……。どうして、よりもよってジェットコースターなんだ!？」

「ん、特に深い理由はないんだけど……どうしても、聞きたい？」

「あ、ああ」

一拍置いて、私は答える。

「……兄さんがジェットコースターにビビる顔をこの目で見ておきたいから？」

最大限の可愛らしい笑顔を作って、私は兄さんに冗談めかして言う。

「……………」

痛い。

私の言葉で黙り込んだ兄さん。

その目から、浴びせられる視線がとてつもなく痛い。

なんだ、この異様な視線は。

兄さんの口元から「……悪魔め」と呟くのが聞こえた。

し、失礼なっ。

別にちよつと冗談を言ってみただけなのにさ。

うう……、後で絶対にびつくりさせてやる。

「仕方ないなあ。それじゃあ、『パンダでショー』ってやつ……見に行く？」

「……………」

無言で兄さんが首を縦に振る。

その表情は子供が大人からおもちやを与えられた時のような喜んだ顔だった。

思わず見とれてしまった。

……兄さんのこういう幼い所を見ると、なんだか私が年上になったような気分になってしまう。

というか、多分私の方が精神年齢高いんだろうな。

あまり言ったら悪いと思うんだけど、兄さん……良い意味で子供みたいだし。

……うん、本当にこれと言ってしまったらきつと兄さん怒ると思うし、……口には出さないでおこう。

「それじゃあ、行こっか。兄さん」

「ああ。今夜は返さないよ、マイハニー！」

「……狂言ばかり言っていたら、放っておきますよ?。」

「く、くうっ! さっきまでは俺が主導権を握っていたのに!」

「はいはい」

苦笑をしながら、兄さんの手を引っ張る。

受付でチケットを渡し、遊園地の入場門を潜ると、そこには可愛らしい着ぐるみのマスコットキャラがたくさんのお客さんを迎え入れていた。

周りには小さな子供達がいて、よほどそのマスコットキャラが人気なのかがわかった。

「わあゝ! 可愛いね。ほら、あれ!」

私がマスコットキャラを指差し、兄さんがそれに笑う。

「なんか、蛭、子供だな……ぷぷっ」

「あ、笑わないでよ、もぉ……。だって、せっかく遊びに来ているんだし、楽しまなきゃ損じゃない?」

「まあ、確かにそうだな」

「それに……」

「?」

「兄さんとの初デートじゃない? だから……余計に、ね」

「蚩……」

兄さんが意外な点を突かれたような、少し驚いた顔をして私を見つめる。

「って、ごめんごめん。なんだか辛気臭くしちゃったね。……あはは」

私は笑って、誤魔化してみた。

自分で言っていてなんだが、後から恥ずかしくなってきたのだ。あう、たくさんの人の前で何を言っているんだろう、私は。

「お前、やつぱり……可愛いな」

「ふえ？ な、何をいきなり あ……」

ぎゅっと、繋いでいた兄さんの手に力が籠った。

「に、兄さん……」

見ると、兄さんは口元をニツと笑わせていた。

「俺、幸せだ」

兄さんが漏らしたその一言で、私は顔を下に向ける。聞いていて、あまりにも嬉しくて恥ずかしい言葉だった。私が言ってしまうのもなんだが、多分、こんな真っ昼間から熱いカップルはそう他にはないだろう。

はう……。

これじゃあ、今日一日自分の正気が保てるのか怪しくなってきた。
まだ、デートは始まってばかりなのに……。

はあ、……幸せだ。

最初にパンダのショーを見た後、今度は私のお願いとして、ジェットコースターに乗ってもらった。

パンダのショーを見ていた時とは偉い違いで、……兄さん、ジェットコースターにビビりすぎです。

まさか、乗っている最中に私の手を震えながら、ずっと掴んでいたなんて……。

しかも、乗り終えた後の顔ときたら、すごく青ざめていたし。

あれは、さすがに笑ってしまったね、うん。

その後も、まあ色々巡回した。

急流滑りに、ゴーカート。

それにシューティングアトラクションや、回るティーカップ。

けど、お化け屋敷に言ったのは大失敗だった……。

「に、兄さん。本当に……入るの？」

「当たり前だろう？ ……まさか、蛭ってお化け屋敷とかって苦手なのか？」

「え！？ い、いや……そ、そんなことないよ！ べ、別にお化けなんてこの世に実際にいるわけ」

そう私が口走った瞬間、屋敷の中から「キャー」と叫ぶ声が響いて聞こえた。

「ひぁ……っ！」

もちろんの事、私はその叫び声に驚いてしまう。
そして、足をガクガクと震わせて、兄さんの腕にしがみついた。

「……やっぱり怖いんだろ？」

兄さんは、私の怯える姿を見て、ニタニタと喜んでいる。
その表情を見て、すごく悔しい思いになってしまった。

そうです、兄さんが言ったその通りです。

私、お化け屋敷が大の苦手なんです！ お化け、怖いです！

だ、だってね！　すごく気持ち悪いんだよ！？

血とか出て、しかも透明で、三角巾で、足がなくて……っ！

えと、確か昔に一世風靡した井戸から出てくる女の幽霊の映画を見てから、私苦手になったよ。

あう、あれはトラウマだった……。

ホント、トラウマだったなあ……うう。

で、でも！　人には誰でも苦手なモノってあるものだよ！

そ、それに兄さんだって、ジェットコースターが苦手じゃない。

それなのに……人の苦手なモノを知って、それを笑うなんて……！
……。

……遊園地に入る前に兄さんの行きたかったアトラクションを笑い飛ばしたのは、この際、棚に置いておいてください。

「やっぱり、やめる？」

兄さんが聞いてくるが、今ここで引き返したらなんとなくだが、兄さんに負けたような気がしてならない。

というか、兄さんだけ苦手なアトラクションに乗っておいて、私だけが乗らないっていうのは、なんだか納得がいかない。なので、仕方ないが、ここは一つ。

「……入るっ」

「え？」

「入るったら入るの！」

「いや、でも苦手なんだろう？ 別に無理して入らなくても」

「む、無理なんてしてないから！ ほら、早く行くよ」

強気に言うが、内心はビクビクしていた。

だが言った以上、今更引き返す訳にはいかない。

私は兄さんの手を引っ張って、中へと入って行った。

……そして、二十分後。

「……う、うう……っ」

見事に撃沈しました。

ええ。本当に、本当に怖かったんです。

「ほ、ほら！ 泣くなよ、蜚」

兄さんが頭を撫でながら慰めてくれたけど、残念だが効果はあまりない。

今は拭い切れない恐怖心が、抑えきれない程に私の胸の中で飛び出していた。

「あ……うう……っ」

だって、本当に怖かったんだよ。

のっぺらぼうは出たり、ミイラ男は抱きついてくるし（その際、兄さんはかなり怒っていた）、映画に出てきた井戸から出てくる幽霊も歩いている中、後ろから襲ってきたし。

何より、一番怖かったのは最後だ。

出口間際の壁から無数の手に腕や足を掴まれた。

冷たいがぬるぬるした感触、それが無数も襲ってくるのだ。

「いやああああああああああああっ！！」と素晴らしい程の絶叫を私はしていたような気がする。

……いや、していた。必死で叫んでいました。

と、とにかく。それぐらいにあれば本当に怖かった。

多分、私が今まで体験した中で一番の怖さになるかもしれない。

あう……、これはまた嫌なトラウマになりそうだ。

「よし！　ちよつと休憩しよう。なっ？」

まだ、少し泣き続ける私に兄さんが提案を持ちかけてくる。

私はコクンと頭を頷かせた。

近くにあったベンチに二人して座る。

「飲み物いるか？」

「……コーラ」

「うし、了解！　なら、買ってくるからちよつと待っててな」

兄さんが笑顔でそう言い残して、頼んだジュースを買いに人並みに潜っていった。

兄さんのこういう性格には凄く感謝だ。

なんだかんだで、優しくて気を配ってくれる。

やっぱり……好きになって良かったな。

「ふう……」

兄さんの事を考えると、涙も止まって気分も落ち着いてきた。それほど、兄さんが頼れる存在になっていたのかもしれない。ううん、きっとそうなんだ。

私は胸に手を置きながら、自分の心臓の鼓動を確かめてみた。

ドクンッ、ドクンッ

……温かい。やっぱり、ドキドキしている。

きつと、これが恋をしているって事なんだ。

そう自分に言い聞かせて、頬を少し緩ませる。

多分、自分の顔が今すごくニヤケていると思う。

でもね、……仕方ないよ。

だって、嬉しいんだもん。

今、すごく楽しい。

兄さんと一緒にいれて、すごく楽しい！

……ねえ、神様。

再び、女の子に戻してくれた事、私に記憶を戻させた事、すごく感謝しています。

こんなに幸せでいいのかってぐらいに。

「あー」

だから、お願いです。神様。
この幸せな時間を、永遠に続けさせて下さい。

「あー……って聞いている？」

今、手に入れたこの幸せをずっと……。

「あー！」

「え……?」

耳元で少し大きく呼ばれて、私は我に返った。

「あ、やっと気づいてくれた」

視線を向くと、そこには私をさっきから呼んでいたのか、少し呆れた顔をした男の子が目の前に突っ立っていた。

「呆けすぎだよ、君」

男の子がぐいっとな顔を私の顔へと近づける。

「わわっ」

男の子の動作に私は思わず、顔を引いてしまった。

……いきなり、なんだ。この男の子は。

よく見ると、すごく可愛らしい顔をしている。

そう、この男の子には悪いのだが、女装をしたら確実に似合いそうな、そんな綺麗な小顔だった。

身長もそれなりに高いように見え、だがしかし、どこか幼さが抜けきっていない所から見ると、私や海人と同年ぐらいに思える。

って、兄さんという人がいるのに何をのうのうとこの男の子を観察しているんだろう、私は。

でも……あれ？

ちょっと待て。

この顔、どこかで見た覚えが……ある？

「ああ、えーと……蛭……さん。伊藤蛭さんですよね？」

「あつ、はい」

謎の男の子が私の名前を呼び、私も返事する。

……つて、なんで私の名前を知っているんだ？

ちよつと落ち着け、私。

この目の前にいる男の子は何者なんだ？

見覚えのある顔だけど、どこかで会ったような記憶が一切ない。
いや、それ以前に会った記憶がないと言えるのに、どうして見覚え

があるって思ってたんだろう？

でも……、なんだろう。

この子、やっぱりどこかで……それに何度も、“見たことがある。”

それにこの声も……どこかで……。

「やっぱり」

男の子が嬉しそうに笑みを漏らして言った。

“やっぱり”……？

やっぱりとはどういう意味なんだろう。

この子は……一体？

と、そこまで、考えた後、私は硬直してしまった。

この子に何故、見覚えがあるか分かってしまったのだ。

馬鹿だ、私は。

なんで、なんでこんな事にもっと早く気付かなかったんだろう。

“つい最近まで、当たり前のように見ていた顔なのに……！”

いや、正確にはこの男の子が何者かは、今も分からずじまいだ。

だけど、……本当にこんな事ってありえるの？

そう、自分に何度も心の中で言い聞かせた。

だつて、その男の子の顔は……。

「久しぶり……だね」

男の子がその顔を一気に近づけてきた。

唇が重なるか重ならないかのそんな微妙な瀬戸際で、男の子は笑顔だった。

そう、無邪気なまでに。

「姉さん」

「あ……」

そして、無抵抗にして唾然だった私に構わず、こんな人様がいる中で男の子は私の手に軽い口づけをしてきた

何をされたか、瞬時に気づくことはできなかった。

それほど、頭が混乱していた。

理由は……さっきも言ったとおり。

だって、その男の子の顔は、女の子に戻る前の私に瓜二つなくらい
そっくりだったのだから。

第12話 邂逅（後書き）

また、お久しぶりの更新となります。
読者の皆様、桃月です。

えーと、また徹夜で書いたので文章グダグダです；；
本当に申し訳ない；；； だったら直せ
一応、この物語が完結後にちょこちょこ直したり修正入れたりする
つもりです；； 今すぐ直せええええ！！

でも、なんとか9月中には更新できて良かったです。

とにかく、この作品は完結を目指さないと…… けどまだ先が長い
iiiiiiiiiiiiiiii orz

ちなみに「僕なり」は全50話くらいにする予定であります。

大体、文字数で言うと30〜35万字辺りでしょうか？

いや、もしかしたら作者（俺）の都合でもっと長くなるかもwww
それほど、この作品、作者も気に入っておりますw！

何せ、作者のラブコメ処女作なものでwww！yhao！！

さて、とうとう第1号のお邪魔虫が登場しましたねw まて

あ、勘違いしないでくださいよ？

これはラブコメです、普通の甘いラブコメですww！

この物語は蛭と兄さんの甘いラブコメで進めるつもりですから、決
してドロドロには（ry

ええと…… うん、多分。

自重します、はい…… orz

でも、基本は明るいラブコメですb

ええ、絶対にw

だってドロドロなの書いてたら、作者の精神が麻痺してくたばるもんwww

彼については詳細がまだでしたね。

いずれ、またキャラの詳細を載せたいと思います。

……というか、初対面でいきなりキスって実際にはありえないよ、うん。orz

しかも……実の　にされるなんて……現実では絶対にならないな、うん。　なら、何故したし

ふう、……しかし、これはラブコメ!!

ご都合主義なんだ、何もかもが……orz　強引だな、おい

つてな訳で、これから読者の方々!

長くつきあってもらおう事になるかもしれませんが、どうかよろしく願います。

では、次の更新にて!

第13話 …… BLですか？

えーと、うん。まず整理しよう。

……一体、何でこんな事になったのだろうか？

左隣にはムスツとした兄さんと、右隣にはさつき知り合った少年がにこーっと笑って、私を見ている。

「姉さんとうして遊ぶなんて、ホント何年ぶり以来だろう。それに、壮士兄さんとも遊ぶのもすごく久しぶりだしね。」

「あ、あはは」

私の事を“姉さん”と呼ぶ少年の名前は、恋。綾瀬 恋。あやせれんくという。

何故、私の事を姉さんと呼ぶのかは、少し前の話に遡る事になるのだが。

「ねえ、壮士兄さん。なんでシカトなの？ ねえ？」

「……………」

兄さんが恋君の言葉をシカトする。珍しい、実に兄さんらしくない。……いつもの兄さんなら、普通にノリツッコミをすぐするはずなのだがどうやらしないらしい。……あう、困ったなあ、ホント。

「に、兄さん……………」

兄さんの腕の裾を軽くひっぱり、兄さんに恋君には聞こえないように耳打ちする。

「そんな不機嫌にならないでよ。私だって、正直どういった状況なのか困っているのに……」

「……蛭。わかっている、……わかっているんだよ。でもな、こればかりはさすがにタイミングが悪すぎたんだ」

「う……うう」

どうやら、兄さんの怒りパラメーターは結構な位にまで来ているらしい。珍しい分、怖いんだけどね……はあ。

「あのさあ、壮士兄さん。もしかして……“うちの姉さん”とデパート中だったりしてた？」

恋君がからかう様な言い方で、兄さんに詰め寄る。てか、なんか恋君の目も若干狙っている感じがしているので、明らかにからかっているな、これ。兄さんもピリピリしている分、悪かった雰囲気更に悪化していきそうだよ……うう。

「……………」

恋君の明らかにからかう言葉をそれでも無視し続ける兄さん。

「無視するなよー。奇跡的にもこうして、僕と姉さん……“姉弟”が再会できて、なおかつ“従兄”の壮士兄さんとも出会えたのにさ」

恋君が“従兄”という部分を強調して言う。

「れ、恋君……！」

さ、流石にちよつとまずい雰囲気になりかけたので、恋君の言葉を制しようとする。

だが、その時、沈黙を決めていた兄さんの口が開く。

「ふっ……恋よ、“相変わらず”のシスコンなんだな、お前は。やつぱり、小さい頃から『お姉ちゃん、お姉ちゃん！』とばかり言うて、蛭の後ろに常についてきていたもんな、お前」

「ちよ……っ、兄さん！？」

うちの兄さんがまた、いきなり何を言い出すかと思えば、挑発返しだった。しかも若干ひきつつて笑っている。

無理があるよ、兄さん、それ！

はあ……、我ながら情けない兄を持ってしまったな、と思ってしま
う。

年下の恋君相手に、そんなに向きにならなくても。

「うん、シスコンだよ。だって、僕姉さんの事を愛しているし」

お、おiiiiiiiッ！！　ちょ、まで、恋君、何を言っている！？

「れ、恋君……ッ！　い、今の、姉弟って意味で言っただよね？
そうだよな？」

……そうでないと困るぞ、私は。

隣ではただでさえ、恋君に対して殺気を放ちまくりの兄さんがいるのに……。

「え？　いや、もちろん女性としての意味だけど？」

「よし、恋よ。ちょっとこっちに来ようか」

そう言っつて、兄さんが恋君の腕を引っ張って、どこかへ連れて行くとする。

「い、痛いよ……。も、もしかして……壮士兄さん、僕に……」

「ああ、そうだ。……俺はお前を……」

「ああ！ やっぱり！」

「自分でもわかってるんだな。なら話は早いな。今、お前を！」

「 やっぱり、壮士兄さんは姉さんに嫉妬しているんだね？ 僕の事が好きすぎるからー！」

「……は？」

兄さんが拍子抜けた声で息を漏らす。……私も兄さんと同じ気持ちだ。

「これがモテる宿命なんだね。……従兄の壮士兄さんまで、僕はたぶらかしてしまったなんて。しかも……男同士なのに……」

「お、おい……。勘違いしているぞ、恋。俺はだな、お前の事が」

「ううう、やっぱり……これって 禁断の恋、になるんだよね？」

恋君が兄さんを上目使いで見つめる。

「ちょっと、待て。恋、そんな目で見えるな。ってか、寄るなー！」

近いぞ、顔が！！」

「壮士兄さん、そんな激しく照れなくてもいいのに……」

「お、俺は照れてなんかまったく　！！」

「まあ、……照れ屋さんなんだから、壮士兄さんは」

恋君が兄さんにウィンクを放つ。……またこれが綺麗に決まったせいか、女の子がされたら、絶対にときめくだろう。それほど、良い容姿でなおかつ完璧なウィンクをしたのに、その相手が男とは……。

「ちっがあああああああう！！」

大声で否定をする兄さん。だがしかし、なんだか兄さんも嫌々言いつつも、顔赤くしているし……。

……むう。私と容姿が似ているからって、なにさ！

「……兄さんの見境なし」

「……ん？ 姉さん？ 今、何か兄さんに言った？」

「ふえ！？ あっ……な、何も！ 何も言っていないよ、恋君」

ぷいつと視線を反らす私に、恋君が気になったのだろうか？ 今度
は私に迫ってくる。

「姉さんって……さ。本当に 可愛いね」

「ひゃ……っ」

恋君が私の耳元で兄さんに聞こえないように囁く。いきなりだったので私は一歩下がって距離をすぐさま置いた。

「あははっ！ 姉さん、そんなに警戒しなくてもいいのに」

「恋よ……。蛍に何を言ったんだ？」

兄さんが目を怒らせながら、恋君を睨む。いや……私がムツときたのは、もとはと言えば兄さんのせいなのだが……。

「やだなあ、壮士兄さん！……やっぱり妬いているんだ！僕って、本当に壮士兄さんから愛されているなあ〜！」

「だから、違うつて言っているだろうが！　むがああああああああつー！！」

再び、兄さんと恋君がじゃれあう。

……はあ。恋君がどこまで本気なのかはわからないが、私としてはたまったもんじゃない。

兄さんと両想いになった今、変な誤解は押さえておきたいものだ。

それにしても……兄さんと恋君って、なんだかんだいいつも二人は仲が悪いようではないらしい。恋君がどう思っているのかはまだイマイチよくわからないけど、兄さんもそれほど恋君の事を嫌っているようには見えないし……。

むしろ、以前の私と兄さんの関係に似ていて、ちょっと羨ましい部分がある……かも。

……つて！　ああ！　何を言っているんだ、私は！

「壮士兄さん、好きだよ！　僕も……アイ・ラブ・ユー！」

「勘違いだ！！　俺はお前の事など愛していない！！　だから、やめてくれ！！」

「つれないなあ〜！　心の中では僕の事、本当に愛してくれているのに……」

「だから、なんでそうお前は俺の心を見過ごしたような言い方をするんだよ！　誤解を招くような言い方はやめろ！」

「ぶうー！」

「むくれても駄目だぞ、恋！」

……いや、ほんと、以前の私の立場がそっくりそのまま兄さんに入れ替わっていて、ちょっと見ていて面白いかもしれない。

いや、客観視している私自身も正直どうなんだろうと思う部分があるんだけどね、……あはは。

ただ、なんかさっきまでの悪い雰囲気崩れて、若干和やか（？）な雰囲気に戻りつつあるしさ。多分……恋君なりに気転を聞かせて

くれたの、かな？　そうだとしたら、やっぱり根はいい子なんだろう。

「ねえ、壮士兄さん。僕と姉さん、やっぱり選ぶなら絶対に僕だよね？」

「いいや、俺は断固蚩を取るぞ？　絶対にお前だけは取らん！！」

「ひどいなあ……。……流石ツンデレの壮士兄さん！　内心では実は僕の事を」

「だからなあああああ、俺はさああああ、ノーマルなんだよおおおおお！！」

……でいい加減、これはいつまで続くんだろうか？

いや、ホント、長い。うん……。何、これ？　えーと、これって、やっぱり俗に言う。

「　　B L > ボーイズラブく？」

「それそれ！ 流石姉さん！ わかってるね」

「おいおいおいおいおい、ちょっと待てえええいッ！！！」

兄さんが大きな声を出して、ぼそつと呟いた私の肩を掴んで激しく揺らす。

「蛭よ！！ 俺はそんな趣味はまったくないぞ！！ 目を覚ませ！！ わかった？ わかったよな！？ だから、今言った言葉を取り消すんだ！！」

「あ、う……ちよ、兄さん、落ち着いて！」

先に言おう。非常に私たち三人は周りの人に迷惑だ。ええ、本当にごめんなさい。皆さん。

だからそんな痛々しい目で見ないでください。

……はあ。

グラグラと揺らす我が兄の顔と言ったら……それはもう、必死そう
で、……ええ。……まあ、前科らしいものはあるが、兄さんが僕に
抱いていた感情は真つ当なノーマル……だと信じたい。

「……はあ」

「おい、蛭。今のため息はなんだ？」

「あ、いえ。……兄さんって、実際のところどっちなんだろうなあ、
と思ひまして」

「ど、どっちって……何の」

「NL>ノーマルラブ<派なのか、BL派なのかって言つ……」

「俺はノーマルだ!!」

兄さんが物凄い形相で荒い息を立ててはつきり言う。

……そんな必死にならなくても。私だって、あくまで冗談で言っ
ているつもりだったんだけどなあ。

「ちえゝっ、つまんなーい!」

恋君が本当につまらなさそうな顔をして、ふてくされる。

本当によく表情に出る子だな。

言い忘れていたが、今、私を含めたこの三人で観覧車に乗ろうと列にならんでいる所だ。

……列に並びながら、さっきまでの会話をしていたという事は、……うん、なかったことにしよう。

で、だけど……何故、恋君が私の事を“姉さん”と呼ぶのかは、少し戻って今から三十分前の話になる。

第13話 …… BLですか？（後書き）

えーと、ご無沙汰です。

いえ、本当にすみませんでしたorz

この一年間、絵ばかりを描いていました。すんごく申し訳ないっす！

そのために、遅れていた更新です

一年以上空けてしまいましたが、再開します！

長らく待った方、お待たせです。

僕なり、再開します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8559d/>

僕、女になりました

2010年10月10日15時33分発行